

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 233

八 紘 古 墳 群

主要地方道倉敷美袋線道路改築に伴う発掘調査

2 0 1 1

岡山県教育委員会



調査地上空から東方を望む（西北西から）



1 4～6号墳（南から）



2 4号墳石室と敷石（南から）



3 5号墳石室と石積み（南から）



1 5号墳石室 (北から)



2 6号墳石室 (南東から)



3 8号墳石室 (南西から)



4 5号墳土器出土状況 (北西から)

卷頭図版 4



1 4号墳出土土器



2 5号墳出土土器



3 6号墳出土土器



4 8号墳出土土器

序

八紘古墳群が所在する総社市西部の新本川流域には、数多くの古墳や製鉄関連遺跡の存在が知られています。

このたび、主要地方道倉敷美袋線道路の改築工事が計画され、岡山県教育委員会では工事の影響を受ける八紘古墳群について関係機関と協議を重ねてまいりました。しかしながら、現状保存が困難な3基の古墳についてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置を講じることとなりました。

当初、調査対象の3基の古墳は、大きく破壊を受けていると考えられていましたが、調査の結果、古墳の墳丘やその内部にある横穴式石室の基底部分は予想に反して良好に残っていることが分かりました。また、この3基以外にも埴輪を立て並べていた古墳の所在が明らかとなったり、非常に小さな石室をもつ古墳が確認される等、新たな発見もあり、多くの成果を得ることができました。

この報告書が、文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史を研究する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施、報告書の作成に当たりましては、岡山県埋蔵文化財専門委員をはじめとする多くの方々から有益な御教示と御指導を賜り、また、岡山県備中県民局建設部をはじめ、関係各位、さらに地元の方々の多大なご協力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

岡山県古代吉備文化財センター

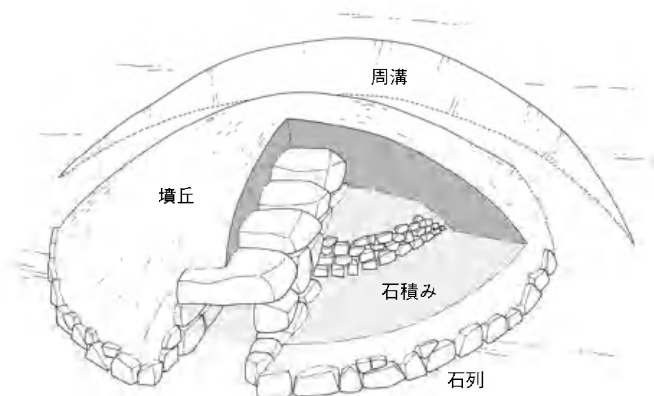
所 長 児 仁 井 克 一

例 言

- 1 本書は、主要地方道倉敷美袋線道路改築事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備中県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した八紘古墳群の調査報告書である。
- 2 八紘古墳群は、総社市山田814-2、814-5、814-7に所在する。
- 3 八紘古墳群の「八紘」は、古墳群が所在する場所の地区名である。平成15年発行の『改訂 岡山県遺跡地図』では、当該古墳群は「中組古墳群」と称されている。しかし、「中組」は、本来当該地より東方に存在する地域を指す名称であるため、これを訂正し名称を「中組」から「八紘」に変更した。また、古墳の位置や番号の対応関係を整理し、詳細は第4図と表2にまとめた。さらに調査時には、八紘古墳群と周辺の古墳群の精査を行い、新たな古墳が確認できたことで、この結果を同図・表に加えている。
- 4 発掘調査は、平成21年度に島崎東・物部茂樹・小嶋善邦・白木亨が担当して実施した。調査面積は1,200㎡である。
- 5 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、平成21年度埋蔵文化財専門委員の稲田孝司氏（岡山大学名誉教授）から、有益な御指導と御助言を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。
- 6 本報告書の作成は、平成21年度に実施し、島崎・亀山行雄（10～12月）・物部が担当した。
- 7 本文の執筆は、調査を担当した島崎・物部・小嶋・白木が行い（文責は目次に示す）、全体の編集は物部が行った。
- 8 埴輪の胎土分析と地山土の成分分析は白石純氏（岡山理科大学）に、石室石材の鑑定は鈴木茂之氏（岡山大学）に依頼し、有益な御教示を賜った。また、そのいくつかについて報文をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。
- 9 炭化物の放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。
- 10 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 11 本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標V系の座標北である。図中の座標値および報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。ただし、日本測地系の座標値を併記している図が一部ある。
- 2 本書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率はおおむね次のとおり統一している。
遺構 古墳：1/150、古墳石室：1/60・1/40、古墳床：1/40・1/20、石列等：1/40
遺物 土器・埴輪：1/4、石製品：1/3・1/2、金属製品：1/2
- 3 遺物番号のうち土器・埴輪以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。
石製品：S 金属製品：M
- 4 本書における古墳の用語は下図のとおり。
- 5 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のために口径の推定が困難なものである。
- 6 土層断面図等に使用した土色は、各調査者の記述に従った。
- 7 本書の第2図に掲載した地図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「高梁」・「玉島」を複製・縮小し、加筆したものである。
- 8 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。なお、須恵器編年は陶邑編年（田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966）を用いる。



本書で使用する用語

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	(物部) 1
第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	(島崎) 3
第1節 発掘調査にいたる経緯	3
第2節 発掘調査および報告書作成の経過	3
1 発掘調査	3
2 報告書作成	4
3 体 制	4
第3章 発掘調査の概要	5
第1節 八紘古墳群と調査の概要	(島崎) 5
第2節 4号墳	(小嶋) 9
1 墳丘と周溝	9
2 横穴式石室	12
3 出土遺物	16
4 小 結	16
第3節 5号墳	(白木) 18
1 墳丘と周溝	18
2 横穴式石室	24
3 出土遺物	27
4 小 結	28
第4節 6号墳	(物部) 29
1 墳丘と周溝	29
2 横穴式石室	33
3 出土遺物	36
4 小 結	36
第5節 7号墳	(物部) 37
1 出土遺物	37
2 小 結	39
第6節 8号墳	(小嶋) 40
1 墳丘と横穴式石室	40

2 出土遺物	42
3 小 結	42
第7節 その他の遺物	(物部) 43
第4章 まとめ	(物部) 44
付載1 八紘7号墳出土埴輪ほかの胎土分析	(白石) 47
付載2 八紘古墳群の墳丘堆積物中の炭化材の年代	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 51
遺物観察表	53
図 版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図	遺跡位置 (1/2,000,000) ……………	1	第30図	6号墳 (1/150) ……………	29
第2図	周辺の遺跡 (1/25,000) ……………	2	第31図	6号墳墳丘断面 (1/80) ……………	30
第3図	調査区位置 (1/3,000) ……………	3	第32図	6号墳石列・貼石 (1/40) ……………	31
第4図	八紘古墳群と近隣の遺跡 (1/5,000) ……………	5	第33図	6号墳石積み (1/40) ……………	32
第5図	近隣の古墳群出土遺物 (1/4) ……………	6	第34図	6号墳石積み・石列・貼り石断面 (1/60) ……………	32
第6図	八紘古墳群西支群 (1/1,000) ……………	7	第35図	6号墳石室 (1/60) ……………	33
第7図	調査地の地形 (1/400) ……………	8	第36図	6号墳石室床 (1/40) ……………	34
第8図	4号墳 (1/150) ……………	9	第37図	6号墳石室敷石 (1/40) ……………	35
第9図	4号墳墳丘断面 (1/80) ……………	10	第38図	6号墳排水溝 (1/40) ……………	35
第10図	4号墳石列 (1/40) ……………	11	第39図	6号墳出土遺物 (1/4・1/2) ……………	36
第11図	4号墳石積み (1/40) ……………	12	第40図	埴輪片出土位置と土層 (1/200・1/60) ……………	37
第12図	4号墳石室 (1/60) ……………	13	第41図	出土須恵器 (1/4) ……………	37
第13図	4号墳石室床 (1/40) ……………	14	第42図	出土埴輪 1 (1/4) ……………	38
第14図	4号墳石室床断面 (1/40) ……………	15	第43図	出土埴輪 2 (1/4) ……………	39
第15図	4号墳古段階の敷石 (1/80・1/40) ……………	16	第44図	7号墳推定位置 (1/1,000) ……………	39
第16図	4号墳出土遺物 1 (1/4) ……………	17	第45図	8号墳 (1/150) ……………	40
第17図	4号墳出土遺物 2 (1/2) ……………	17	第46図	8号墳断面 (1/60) ……………	40
第18図	5号墳 (1/150) ……………	18	第47図	8号墳石室〈検出状況〉(1/40) ……………	41
第19図	5号墳墳丘断面 (1/80) ……………	19	第48図	8号墳石室〈原位置を保っている石材〉(1/40) ……………	41
第20図	5号墳石列 (1/40) ……………	20	第49図	8号墳石室床 (1/20) ……………	42
第21図	5号墳石積み (1/40) ……………	21	第50図	8号墳出土遺物 (1/4・1/2) ……………	42
第22図	5号墳焼土面と土器溜まり (1/40) ……………	22	第51図	その他の遺物 (1/4・1/2) ……………	43
第23図	5号墳出土遺物 1 (1/4) ……………	23	第52図	八紘 1～8号墳の築造時期と 築造順序および敷石 (1/5,000・1/200) ……………	44
第24図	5号墳出土遺物 2 (1/4) ……………	24	第53図	側壁と石積み・石列の見通し図 (1/160) ……………	44
第25図	5号墳石室 (1/60) ……………	25	第54図	八紘 4～6号墳の墳丘断面 (1/200) と 4・5号墳の構築工程 (模式図) ……………	45
第26図	5号墳石室床 (1/40) ……………	26	第55図	6世紀後半以降で製塩土器が出土した古墳 ……	46
第27図	5号墳出土遺物 3 (1/4) ……………	27			
第28図	5号墳出土遺物 4 (1/4) ……………	28			
第29図	5号墳出土遺物 5 (1/2) ……………	28			

表 目 次

表1	文化財保護法に基づく提出書類一覧……………	4	表4	金属製品 (鍔) 一覧……………	54
表2	八紘古墳群と周辺古墳群の名称新旧対照表……………	6	表5	金属製品 (刀子・釘・耳環ほか) 一覧……………	54
表3	土器観察表……………	53			

写 真 目 次

写真1	4号墳盛り土断面〈西側〉(南から)……………	10	写真6	5号墳土器溜まり (D地点) (北東から)……………	24
写真2	4号墳盛り土断面〈東側〉(南から)……………	10	写真7	6号墳石列 (南から) ……………	31
写真3	4号墳古段階の敷石 (南から) ……………	16	写真8	6号墳西側石積み (東から) ……………	32
写真4	5号墳土器溜まり (A地点) と石列 (南西から) ……	22	写真9	6号墳敷石 (南東から) ……………	33
写真5	5号墳土器溜まり (A地点) (南西から)……………	24	写真10	6号墳古段階の土器 (南から) ……………	36

写真11	6号墳排水溝内の土器（西から）……………	36
写真12	4号墳墳丘断面（南から）……………	46

写真13	4号墳墳丘断面拡大（南から）……………	46
------	---------------------	----

巻頭図版目次

巻頭図版1	調査地上空から東方を望む（西北西から）	4	5号墳土器出土状況（北西から）
巻頭図版2	1 4～6号墳（南から）	巻頭図版4	1 4号墳出土土器
	2 4号墳石室と敷石（南から）		2 5号墳出土土器
	3 5号墳石室と石積み（南から）		3 6号墳出土土器
巻頭図版3	1 5号墳石室（北から）		4 8号墳出土土器
	2 6号墳石室（南東から）		
	3 8号墳石室（南西から）		

図版目次

図版1	1 調査前（北西から）	2 6号墳敷石（南から）	
	2 調査前（南東から）	3 6号墳敷石下の状況（南東から）	
図版2	1 4号墳調査前（南から）	4 6号墳排水溝（北西から）	
	2 4号墳（南から）	5 6号墳石室（北から）	
	3 4号墳西側石列（南西から）	図版11	1 埴輪散布地（西から）
	4 4号墳西側石列（南から）		2 埴輪散布地土層（南東から）
	5 4号墳西側石積み（南から）		3 埴輪出土状況（南東から）
	6 4号墳東側石積み（南から）		4 8号墳調査前（南東から）
図版3	4号墳石室（南から）		5 8号墳検出状況（南西から）
図版4	1 4号墳西側側壁（東から）	図版12	1 8号墳石室検出状況（南から）
	2 4号墳東側側壁（西から）		2 8号墳石室検出状況（西から）
	3 4号墳古段階の敷石（南から）		3 8号墳床面（南西から）
	4 4号墳中段階の土器（南西から）		4 8号墳石室奥壁背面（北東から）
	5 4号墳古段階の土器（南東から）		5 8号墳石室（南西から）
図版5	1 5号墳調査前（南から）	図版13	1 8号墳西側側壁（南から）
	2 5号墳（南から）		2 8号墳東側側壁（西から）
	3 5号墳西側石列（南西から）		3 8号墳石室掘り方（南西から）
	4 5号墳東側石積み断面（西から）		4 8号墳実測風景（南から）
	5 5号墳西側石積み（南西から）		5 4～6号墳盛土除去後（東から）
	6 5号墳東側石積み（南東から）	図版14	4号墳出土土器
図版6	5号墳石室（南から）	図版15	5号墳出土土器①
図版7	1 5号墳西側側壁（南東から）	図版16	1 5号墳出土土器②
	2 5号墳東側側壁（南西から）		2 6号墳出土土器
	3 5号墳袖石の裏側（東から）	図版17	7号墳出土土器①
	4 5号墳土器出土状況（南から）	図版18	7号墳出土土器②
	5 5号墳石室（北から）	図版19	1 8号墳出土土器
図版8	1 6号墳調査前（南東から）		2 二反峠10号墳出土埴輪
	2 6号墳（南東から）		3 八紘19号墳出土須恵器
	3 6号墳石列と貼石		4 古墳出土中世土師器
図版9	6号墳石室（南東から）	図版20	金属製品・石製品
図版10	1 6号墳東側石積み（南東から）		

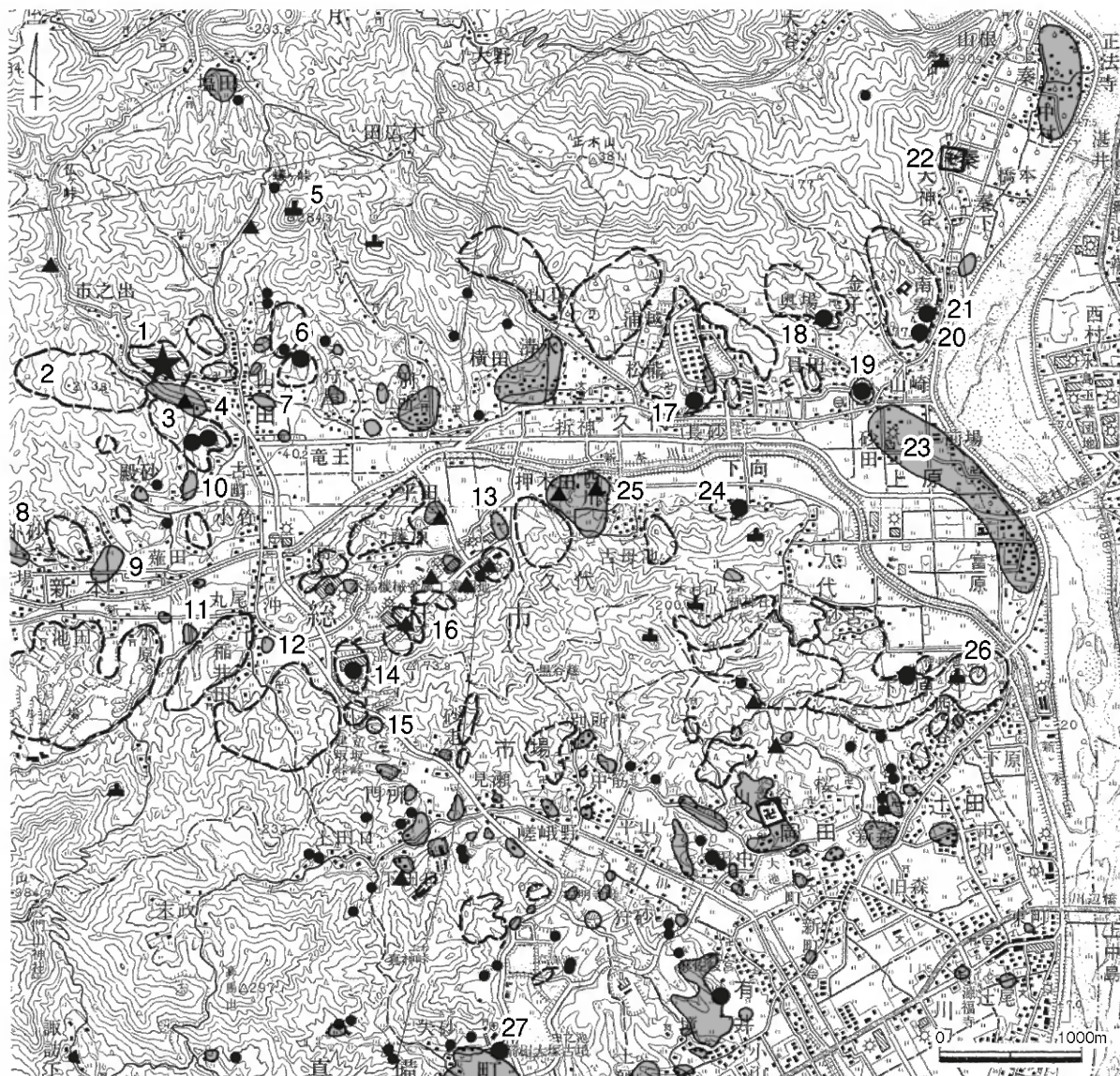
第1章 遺跡の位置と環境

八紘古墳群は岡山県総社市の西部、高梁川の支流である新本川がつくった東西に長い谷平野に所在する。造山・作山古墳に代表される古代吉備の中核地である総社平野とは、岡山県三大河川のひとつ高梁川によって隔てられている。新本川の周囲一帯は花崗岩地帯で、良質の真砂土を産し、「砂」の付く地名が各所に見られる。近年、圃場整備事業や工場団地造成が行われ、それに伴う総社市教育委員会による発掘調査によって、貴重な成果が蓄積されつつある。

さて、新本川の流域において、最も古い遺物は、長湍遺跡から出土した縄文早期の土器片である。弥生時代中期後半から後期では、平野に面する低丘陵や山裾、河岸段丘など各所で集落が確認される。中でも、横寺遺跡の小銅鐸や家形土製品、船や竜などの線刻を施した土器、市後遺跡の銅鐸形土製品、一倉遺跡の人面線刻土器など、当時の習俗を知る遺物も多く出土している。加えて、平成21年、新本川の平野の東端部、高梁川の右岸沿いに自然堤防上に立地する上原遺跡で、弥生時代前期の溝から人頭形の土製品が出土した。頭頂部に鳥の羽根飾りを模したと推定されるトサカ状の突起があり、農耕儀礼や祭祀に際して、その土製品をかぶって使用したと推定されている。弥生前期に、水田の開墾や経営が行われていた可能性を示す遺物としても注目される。また、吉備の特殊器台で飾られた立坂弥生墳丘墓や伊与部山弥生墳丘墓が見晴らしの良い尾根上に築かれている。古墳時代の集落としては、砂子遺跡・高砂遺跡・小砂遺跡・坊ヶ内遺跡・横寺遺跡など多くあり、いずれも前期と後期の住居が検出されている。小砂遺跡では集落に隣接した低位部で後期の水田が見つかっており興味深い。また、砂子遺跡では後期の鉄鉱石焙焼施設や鍛冶炉、炭窯や住居などが集落のなかでそれぞれまとまって検出されており、水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群の調査などで確認された製鉄炉・炭窯・作業場で構成される7～8世紀の製鉄遺跡とともに新本川流域の大きな特色となっている。一方、主な古墳としては、三角縁神獣鏡を出土した秦上沼古墳、全長約56mの前方後円墳秦大坩古墳、全長約38mの前方後円墳秦茶臼山古墳などがあり、新本川下流域の首長墳と考えられている。また、新本川中流域の丘陵に立地する砂子山古墳群には全長30～40mの前方後円墳が5基確認されており、この地域の系譜的な首長墳と推定される。横穴式石室では、板井砂奥7号墳や立坂北1号墳などが6世紀中頃の横穴式石室導入期の古墳であり、石室の大きさでは、玄室長6.3m、幅2.25mの久代大塚古墳が著名である。その他に、金子石塔塚古墳の石室にはこうもり塚古墳や江崎古墳と同じ貝殻石灰岩（波形石）を用いた家形石棺が納められている。終末期の古墳としては、播磨産の竜山石製横口式石棺を蔵した長砂2号墳や、法正寺1号墳などの方墳が知られる。飛鳥・奈良時代では横寺遺跡や坊ヶ内遺跡、宮ノ前遺跡で掘立柱建物群が調査され、官衙的性格が考えられている。また、飛鳥期創建の秦原廃寺は特に有名である。



第1図 遺跡位置 (1/2,000,000)



集落
 弥生墓地
 ● 古墳
 古墳群
 製鉄遺跡
 廃寺
 山城

- | | | | |
|----------|-----------|------------|--------------|
| 1 八紘古墳群 | 8 小砂遺跡 | 15 立坂弥生墳丘墓 | 22 秦原廃寺 |
| 2 二反峠古墳群 | 9 坊ヶ内遺跡 | 16 西団地内遺跡群 | 23 上原遺跡 |
| 3 砂子山古墳群 | 10 高砂遺跡 | 17 長砂2号墳 | 24 久代大塚古墳 |
| 4 砂子遺跡 | 11 一倉遺跡 | 18 金子石塔塚古墳 | 25 市後遺跡 |
| 5 鬼ノ身城 | 12 長滞遺跡 | 19 秦茶白山古墳 | 26 伊与部山弥生墳丘墓 |
| 6 法正寺1号墳 | 13 板井砂遺跡 | 20 秦上沼遺跡 | 27 箭田大塚古墳 |
| 7 宮ノ前遺跡 | 14 立坂北1号墳 | 21 秦大塚古墳 | |

第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

主要参考文献

『総社市史』考古資料編 総社市 1987

『総社市埋蔵文化財調査年報』3～11 総社市教育委員会 1994～2001

『水島機械金属工業団地協同組合 西団地内遺跡群』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告9) 総社市教育委員会 1991

『新本立坂』立坂遺跡発掘調査団 1996

『伊与部山墳墓群』伊与部山墳墓群発掘調査団 1996

『倉敷考古館研究集報』第19号 倉敷考古館 1986

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

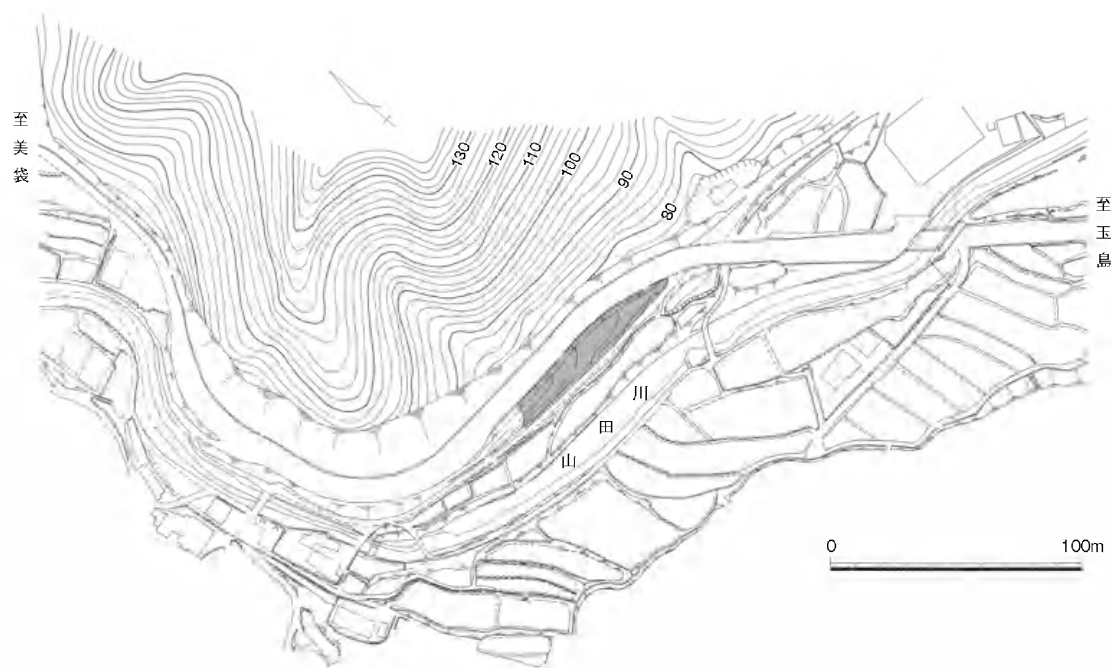
第1節 発掘調査にいたる経緯

岡山県は、主要地方道倉敷美袋線事業において総社市の山田地区で道路改築を計画した。計画された地域には、古くから横穴式石室を内部構造としたおよそ20基からなる八紘古墳群の存在が知られており、工事の対象となる地点にはそのうち3基が北側の倉敷美袋線と南側の市道に挟まれた範囲に所在した。また、範囲内には3基の古墳以外にも北西斜面に別の古墳の存在も窺われた。この取り扱いについては、事業主体者である岡山県備中県民局と県文化財課で事前協議がなされた。この結果、平成21年3月10日岡山県備中県民局長から文化財保護法第94条に基づく発掘の通知が提出され、県教育委員会教育長から用地内の遺跡については工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知がなされた。これにより、発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが実施することとなった。

第2節 発掘調査および報告書作成の経過

1 発掘調査

発掘調査は、平成21年4月から9月までの6か月間、調査員4名の体制で行った。調査は先ず調査前の地形測量を行い、以後の調査に備えた。この結果、調査対象の古墳は横穴式石室3基と北西丘陵



第3図 調査区位置 (1/3,000)

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

上にも等高線の在り方からさらに1基の可能性を認め、東側から4～7号墳として着手した。

当初4～6号墳は、いずれも石室の石材が抜き取られたもので抜き取り痕には石材の遺存は認められなかったが、調査の進展につれ側壁一段と奥壁を残した状態で検出された。また、墳丘には構築過程で石組が、墳裾の石室開口部の両脇には石列が構築されていた。

さらに、調査も終盤になった9月には7号墳の南斜面に小規模な石室をもった8号墳が確認された。

なお、古墳群の内容が明らかとなった7月11日には現地説明会を開催し、220名を超える多数の参加者があった。

2 報告書作成

調査終了後の10月から調査員2名の体制で入った。センターにおいて、遺構のトレース、遺物復元・実測・トレース、遺物写真撮影、編集、原稿執筆等を行った。

3 体制

岡山県教育委員会		次 長 (総務課長)	小林 勝
教育長	門野八洲雄	参 事	中野 雅美
岡山県教育庁		<総務課>	
教育次長	増本 好孝	総括副参事 (総務班長)	上田 利弘
文化財課		主 任	中島 忍
課 長	三村 修	<調査第二課>	
参 事	田村 啓介	課 長 (調査・整理担当)	島崎 東
総括副参事 (埋蔵文化財班長)	光永 真一	主 幹 (整理担当)	亀山 行雄
主 任	米田 克彦	総括主任 (第一班長) (調査・整理担当)	
主 任	平井 利尚		物部 茂樹
岡山県古代吉備文化財センター		主 任 (調査担当)	小嶋 善邦
所 長	児仁井克一	主 事 (調査担当)	白木 亨

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知 (法第94条)

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	期間	主な勧告事項
教 文 埋 第1507号 H 21.3.19	古墳 中組1号墳～4号墳	総社市山田字平岩 814-7	366	道路	岡山県備中原民局長	H 21.10.1～H 3.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告 (法第99条)

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡 吉 調 第8号 H 21.4.13	古墳 八幡古墳群	総社市山田 814-2 ほか	1,200	道路	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 児仁井克一	島崎東・物部茂樹・ 小嶋善邦・白木亨	H 21.4.1～ H 21.9.30

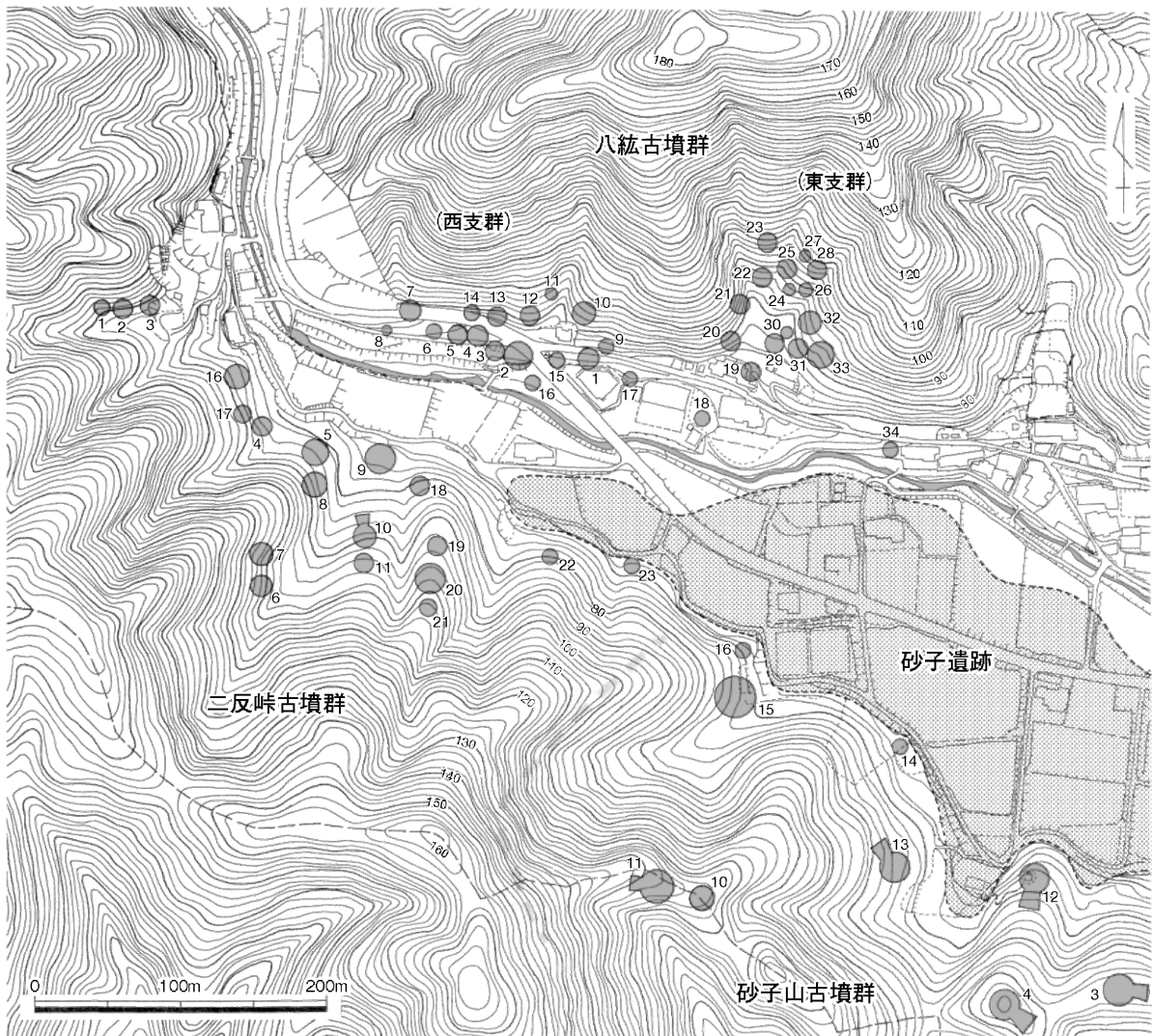
埋蔵文化財発見通知 (法第100条)

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教 文 埋 第693号 H 21.9.18	土器 (須恵器・土師器ほか)・鉄器 (鉄鏃・釘ほか)・ 石器 計整理箱25箱	総社市山田 814-2 ほか 八幡古墳群	H 21.4.1～ H 21.9.18	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事石井 正弘・総社市長 片岡聡一	岡山県古代吉備 文化財センター

第3章 発掘調査の概要

第1節 八紘古墳群と調査の概要

八紘古墳群は、新本川の支流である山田川が平野部に流れを注ぎ始める左岸側において、この平野部に接してこれより若干高位の山裾緩斜面部に存在する。古墳群の分布は、左岸山裾に沿って東西に約300mにわたって広く見られるが、大きくは東の谷部と西の山裾緩斜面の二地点に集中（以下、東・西支群）が認められる。この度調査の対象となった西支群の4～7号墳の所在する地点は、昭和40年代の県道倉敷美袋線開通に伴い大きく山裾が開削され、これによってわずかに残された裾部に4基の古墳が遺存していた。しかし、古墳の密集状況からも、また山側道路開削面には現在古墳の痕跡が2基認められることから本来さらに多くの古墳が存在したことは明白である。時期的には平成14



第4図 八紘古墳群と近隣の遺跡 (1/5,000)

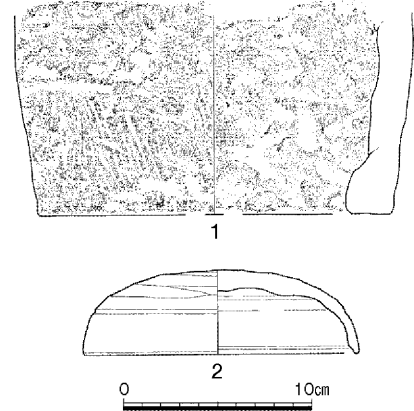
第3章 発掘調査の概要

年には近接して存在していた1～3号墳が圃場整備事業に伴い総社市教育委員会によって発掘調査が実施されており、6世紀から7世紀にかけての造営が判明している。

調査対象古墳のうち4～6号墳は、いずれも中心部が大きく開口しており、既に石室が破壊され石材もすでに見られなかった。石室の開口方向は基本的には南側の平野部を指向するものが多く見られた。一方、東の支群には、墳丘外面を角礫で葺いた32号墳を含む大小16基からなる群集墳が比較的良好な状況でその存在を見せる。

また、八紘古墳群周辺には南側の谷部には6世紀代の前方後円墳1基および墳頂部に列石が廻る6号墳を含む計23基からなる二反峠古墳群や、山塊頂部には前期から後期にかけての前方後円墳5基を含む計16基から成る砂子山古墳群の存在が知られる。

なお、これら古墳群をとりまく平野部には、総社市教育委員会によって行われた圃場整備事業に伴う発掘調査によって古墳時代の集落と製鉄遺跡である砂子遺跡が指呼の間に存在し、古墳群との関係を強く示唆する。

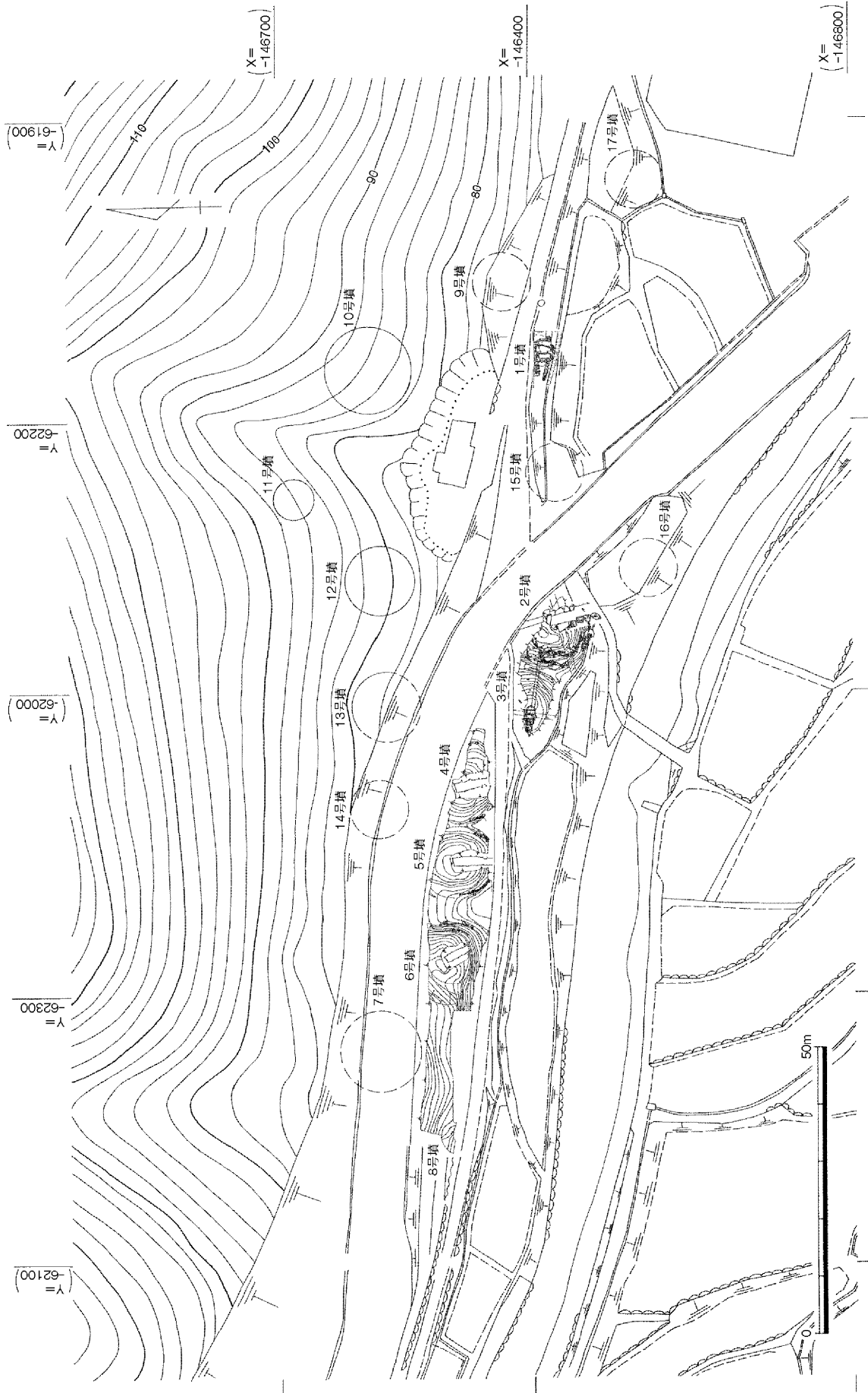


上：二反峠10号墳出土土輪 ※1
下：八紘19号墳出土土須恵器 ※2

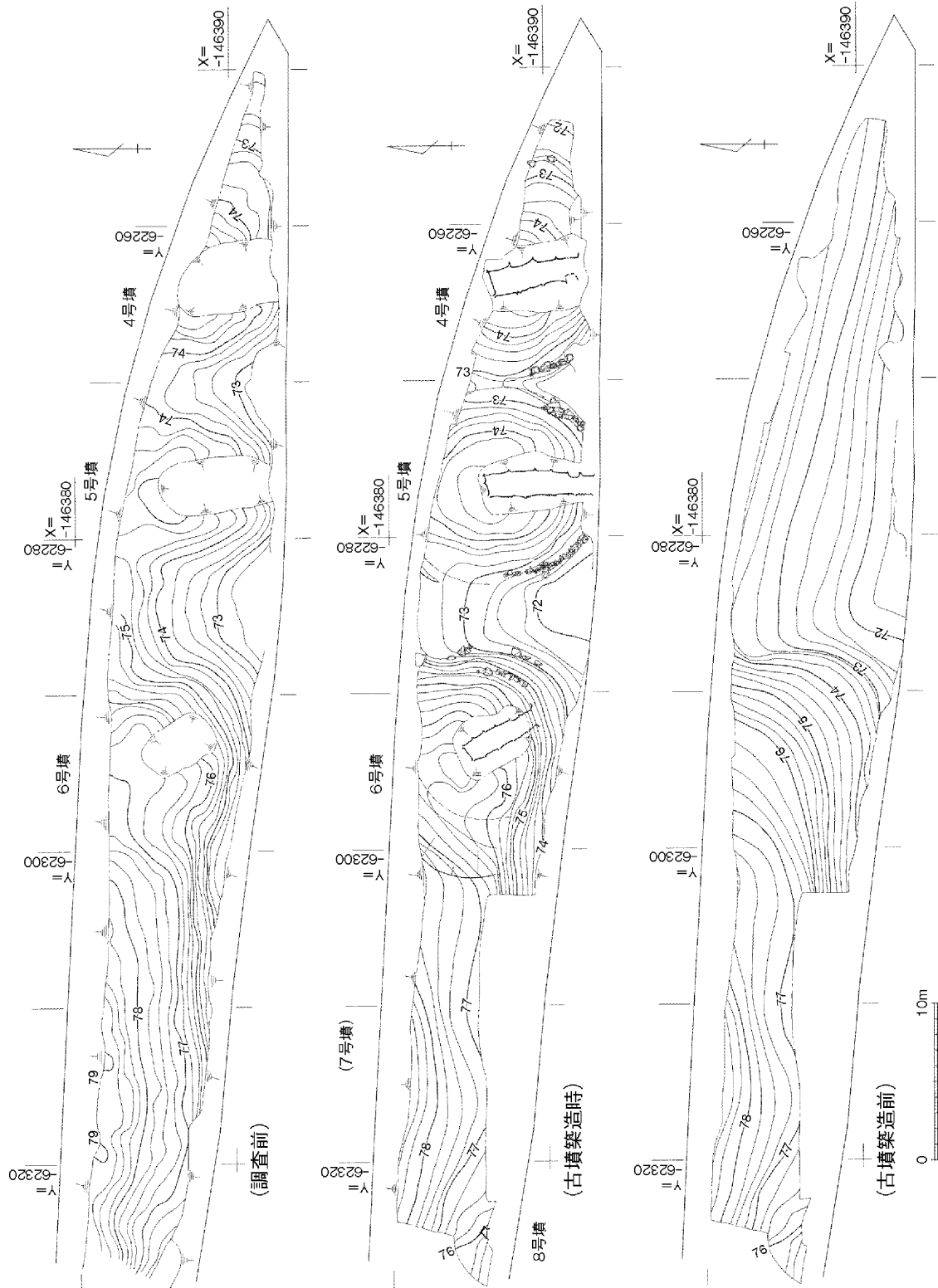
第5図 近隣の古墳群出土遺物（1/4）

表2 八紘古墳群と周辺古墳群の名称新旧対照表

名称	新名称	旧名称(県)	特徴	文献	名称	新名称	旧名称(県)	特徴	文献		
八紘古墳群	1号墳	中組8号墳	西支群 総社市調査	台帳12-2	二反峠古墳群	4号墳	4号墳		台帳12-18		
	2号墳	中組5号墳	西支群 総社市調査	台帳12-8		5号墳	5号墳		台帳12-17		
	3号墳	中組4号墳	西支群 総社市調査	台帳12-9		6号墳	6号墳		台帳12-14		
	4号墳	中組3号墳	西支群 美袋線調査	台帳12-5		7号墳	7号墳		台帳12-15		
	5号墳	中組2号墳	西支群 美袋線調査	台帳12-6		8号墳	8号墳		台帳12-16		
	6号墳	中組1号墳	西支群 美袋線調査	台帳12-7		9号墳	9号墳		台帳12-11		
	7号墳	新規確認	西支群 美袋線調査	—		10号墳	10号墳	全長23mの前方後円墳	台帳12-12		
	8号墳	新規確認	西支群 美袋線調査	—		11号墳	11号墳		台帳12-13		
	9号墳	中組9号墳	西支群 崖面	台帳12-3		12号墳	12号墳	山頂尾根	台帳12-22		
	10号墳	新規確認	西支群	—		13号墳	13号墳	山頂尾根	—		
	11号墳	新規確認	西支群	—		14号墳	14号墳	山頂尾根	—		
	12号墳	新規確認	西支群	—		15号墳	15号墳	山頂尾根	—		
	13号墳	新規確認	西支群	道により半壊		—	16号墳	新規確認	盗掘口	—	
	14号墳	新規確認	西支群	道により周溝のみ遺存		—	17号墳	新規確認	盗掘口	—	
	15号墳	中組7号墳	西支群			台帳12-1	18号墳	新規確認	石材露呈	—	
	16号墳	中組6号墳	西支群			台帳12-10	19号墳	新規確認		—	
	17号墳	—	西支群	不明		※3	20号墳	新規確認	盗掘口 石材露呈	—	
	18号墳	—	東支群	不明		※3	21号墳	新規確認		—	
	19号墳	新規確認	東支群	須恵器出土		—	22号墳	—	不明	※3	
	20号墳	中組10号墳	東支群			台帳12-4	23号墳	—	不明	※3	
	21号墳	新規確認	東支群			—	砂子山古墳群	1号墳	1号墳	円墳2基	※4
	22号墳	新規確認	東支群			—		2号墳	2号墳	円墳	※5
	23号墳	新規確認	東支群			—		3号墳	3号墳	全長33mの前方後円墳	※6
	24号墳	新規確認	東支群		—	4号墳		4号墳	全長43mの前方後円墳	※6	
	25号墳	新規確認	東支群		—	5号墳		5号墳	円墳	※5	
	26号墳	新規確認	東支群		—	6号墳		6号墳			
	27号墳	新規確認	東支群		—	7号墳		7号墳			
	28号墳	新規確認	東支群		—	8号墳		8号墳			
	29号墳	新規確認	東支群		—	9号墳		9号墳			
	30号墳	新規確認	東支群		—	10号墳		10号墳	尾根鞍部 円墳		
	31号墳	新規確認	東支群		—	11号墳		11号墳	全長30mの前方後円墳	※7	
	32号墳	新規確認	東支群		—	12号墳		新規確認	全長30mの前方後円墳		
	33号墳	新規確認	東支群		—	13号墳		新規確認	全長30mの前方後円墳		
	34号墳	新規確認	東支群		—	14号墳		—	不明		
1号墳	1号墳			台帳12-20	15号墳	新規確認		径26mの円墳			
2号墳	2号墳			台帳12-21	16号墳	—		不明	※3		
3号墳	3号墳			台帳12-19							



第6図 八紘古墳群西支群 (1/1,000) 1～3号墳は文献(※3)から転載 数字は世界測地、(数字)は日本測地



第7図 調査地の地形 (1/400)

- ※1 この植輪は、平成10～14年度に国庫補助事業として実施した岡山県内遺跡詳細分布調査において、全長約23mの前方後円墳である二反峠10号墳の前方部で表採されたものである。
- ※2 この須恵器は、発掘調査中に近所にお住まいの小西幸一さんから寄贈していただいたもので、出土地点は西に開口する横穴式石室の床付近と推定され、ここを八幡19号墳とした。記して感謝の意を表する。
- ※3 『総社市埋蔵文化財調査年報』13・14 総社市教育委員会 2004・2005
- ※4 『総社市史』考古資料編 総社市 1987
- ※5 『改訂岡山県遺跡地図』第5分冊 2003 岡山県教育委員会
- ※6 間壁忠彦「総社市山田砂子山古墳群の墳形と石室」『倉敷考古館研究集報』第19号 倉敷考古館 1986
- ※7 今枝孝志郎「山田の古墳」『山田誌』山田地区コミュニティ協議会 1994 砂子山11号墳が「山田の大塚」である。

第2節 4号墳

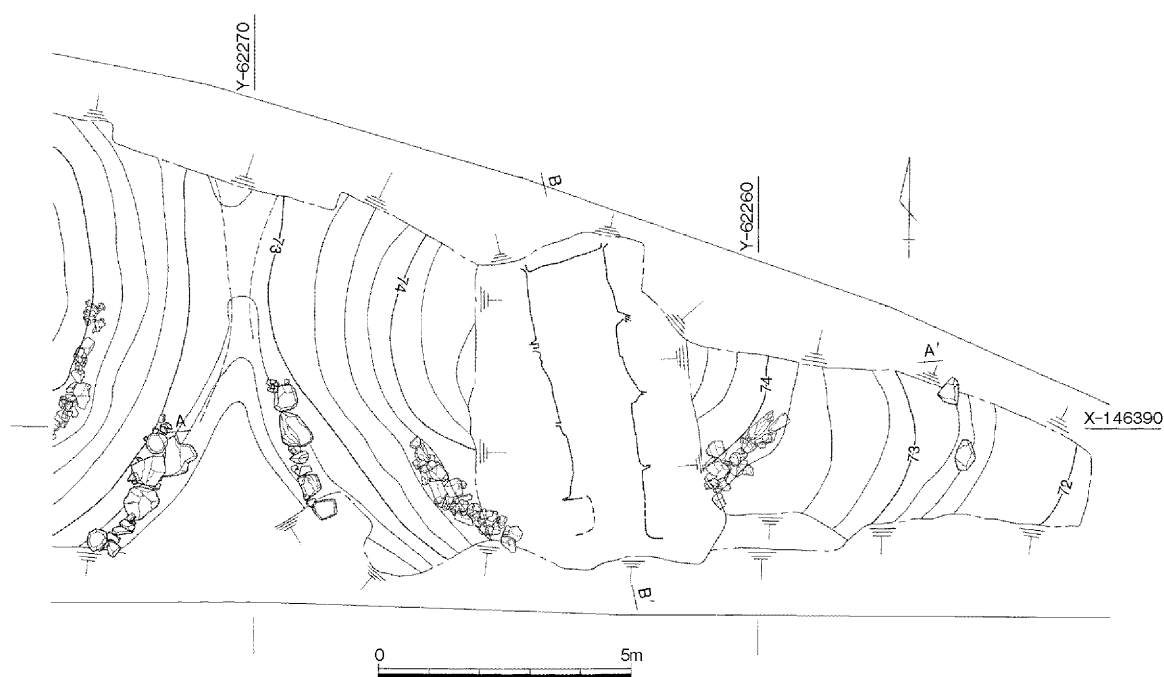
1 墳丘と周溝

今回発掘調査を実施した古墳のなかで、一番東に位置している古墳である。北側は県道に、南側は市道によって大規模に削平を受け、さらに市道側にはいわゆる「いも穴」が掘られていたため、墳丘および石室の遺存状況は著しく悪い。また、墳丘東側の73.5mのコンターライン付近から東側については、昭和40年代の県道工事残土が厚く堆積しており、調査前には東側の墳丘形状が不明瞭であった。石室は、天井石および側壁の二段目以上の石が抜き取られ、すでに開口していた。

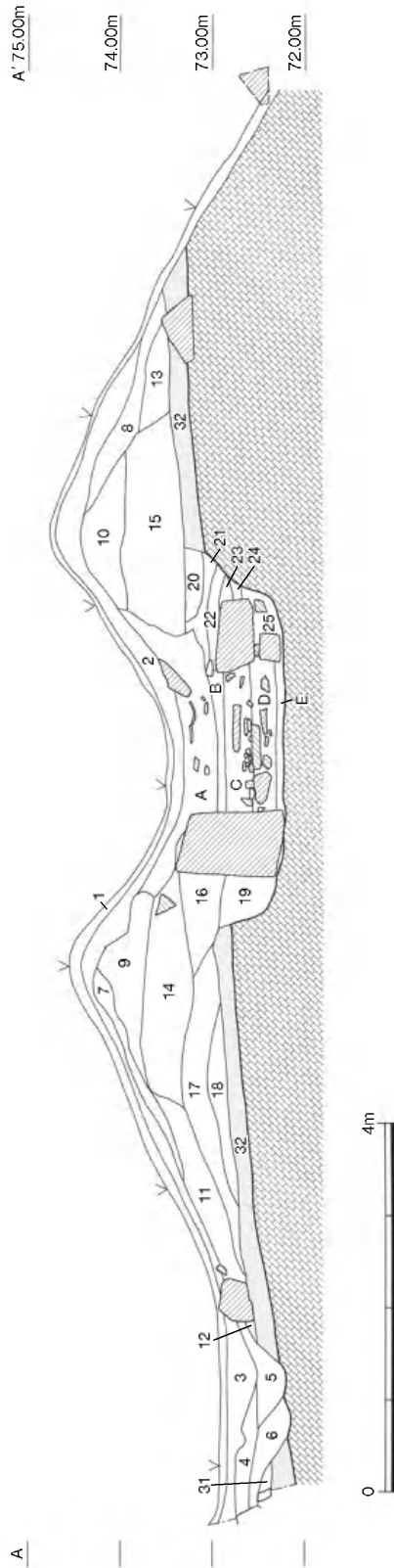
墳丘の南東および南西側で墳端を画する石列を、また墳丘西側で周溝を検出し、その状況から、4号墳は径14mの円墳と考えられる。石室天井石等が抜き取られているため、築造時の高さは不明であるものの、墳丘南側からの残存高は約2.7mを測る。

墳丘南西側の石列は、やや弧状を呈して検出されている。南側が市道等により削平されていたが、石室開口部まで構築されていたと考えられる。墳丘北西側では石列の痕跡等も認められなかったため、墳丘前面のみに石列が構築されていたと考える。石列は旧表土上に置かれ、石列前面にはおさえ土と考えられる黄褐色土（第9図第12層）が、背面には裏込めと考えられる拳大の角礫が検出されている。用いられている石の大きさは60~20cm大と様々であるものの、石列前面をそろえる意識はあったようである。墳丘南東側の石列はほとんど流失しており、わずかに2個のみ検出された。これらの石は南西側とは異なり、地山上に置かれていた。

周溝は、墳丘の南西側については市道等により周溝底面以下まで削平を受けているため確認できず、北西側については周溝と断定できるものは検出されなかったものの、5号墳A-A'断面（第19図）



第8図 4号墳 (1/150)



- | | | | |
|----|----------------|----|--------------|
| 1 | <腐葉土> | 22 | 暗灰色土<裏込め土> |
| 2 | 黄褐色土<流土> | 23 | 灰色粗砂<裏込め土> |
| 3 | 暗黄灰色砂質土 | 24 | 暗褐色土<裏込め土> |
| 4 | 黄褐色土 | 25 | 灰色粗砂<裏込め土> |
| 5 | 褐色土 | 26 | 暗褐色土<裏込め土> |
| 6 | 暗灰色土 | 27 | 灰色粗砂<裏込め土> |
| 7 | 黄褐色土<盛土か> | 28 | 暗褐色土<裏込め土> |
| 8 | 暗黄色土<盛土か> | 29 | 暗黄色土<裏込め土> |
| 9 | 暗黄褐色土<盛土> | 30 | 灰~黄褐色土<裏込め土> |
| 10 | 暗褐色土<盛土> | 31 | 暗黄色土 |
| 11 | 暗黄色土<盛土> | 32 | 黒色土<旧表土> |
| 12 | 黄褐色土<おさえ土?> | | |
| 13 | 暗褐色土<盛土> | | |
| 14 | 暗褐色土<盛土> | | |
| 15 | 暗灰褐色土<盛土> | | |
| 16 | 暗灰~灰色粗砂~細砂<盛土> | | |
| 17 | 黄褐色土<盛土> | | |
| 18 | 暗褐色土<盛土> | | |
| 19 | 暗灰色粗砂~細砂<裏込め土> | | |
| 20 | 暗灰色土<裏込め土> | | |
| 21 | 灰色粗砂<裏込め土> | | |

- | | |
|---|---------------|
| A | <石材抜き取り後の流入土> |
| B | <石材抜き取り直前の表土> |
| C | <中~近世の堆積土> |
| D | <床造成土> |
| E | <整地土> |

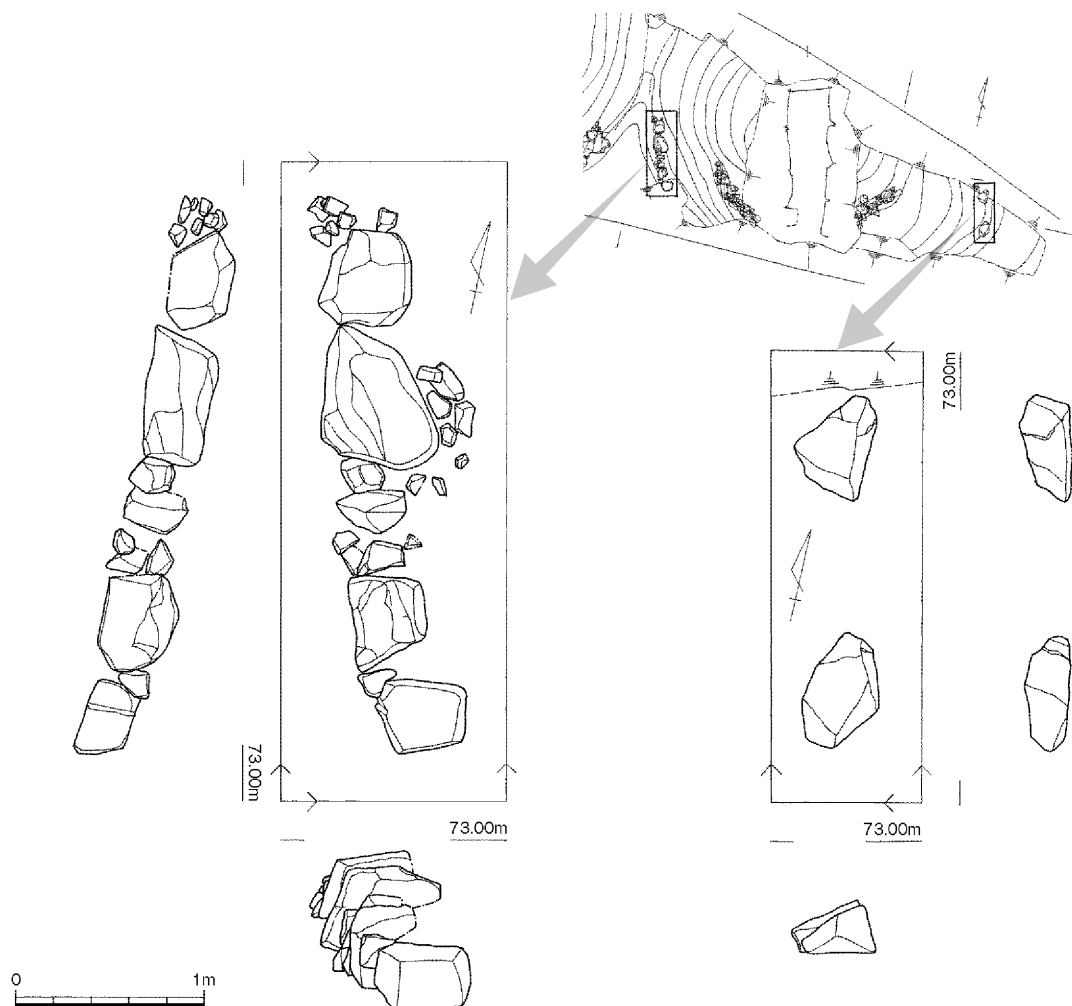
第9図 4号墳墳丘断面 (1/80)



写真1 4号墳墳丘断面<西側>
(南から)



写真2 4号墳墳丘断面<東側>
(南から)



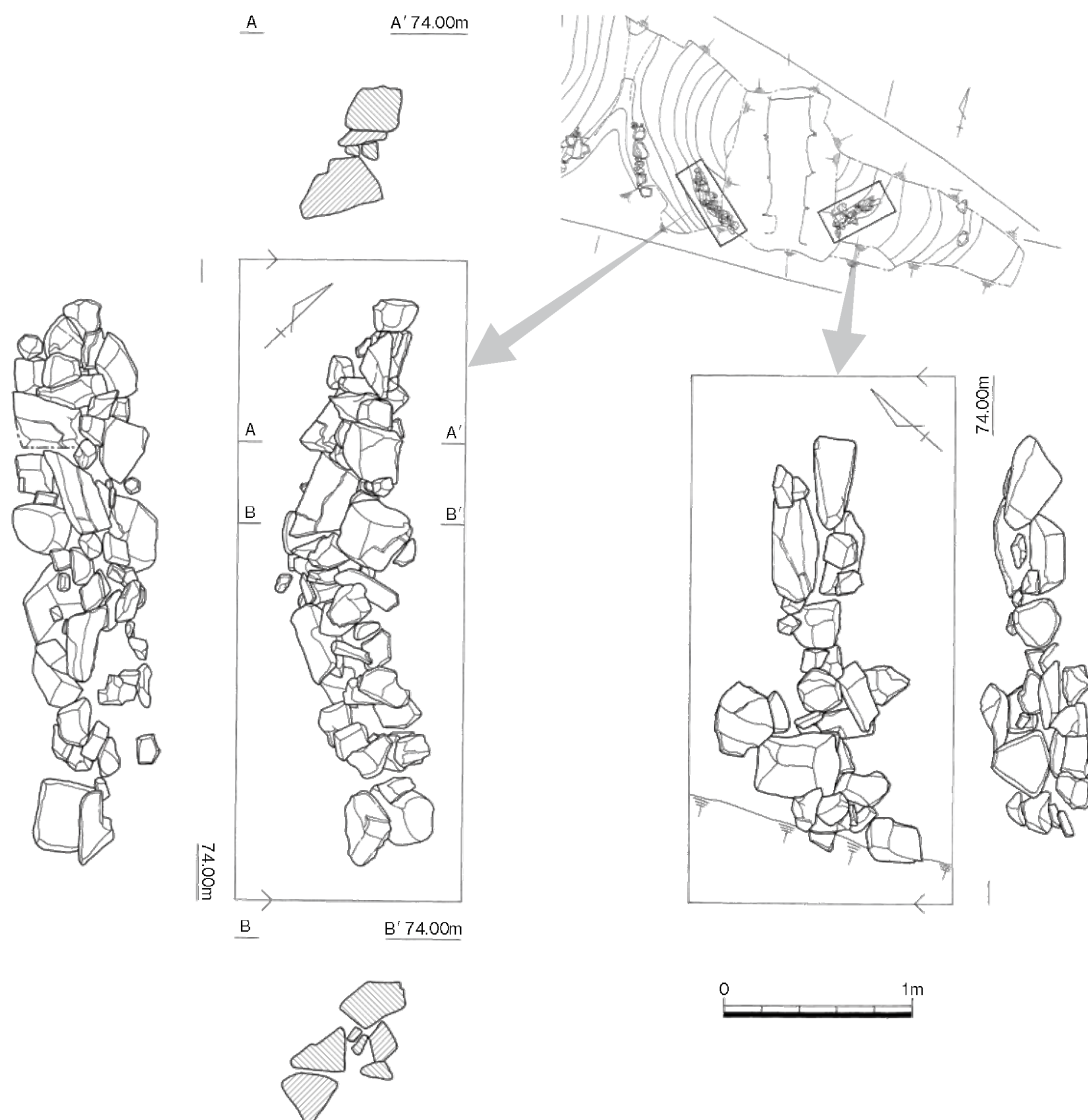
第10図 4号墳石列 (1/40)

の北側約1mから4号墳A-A'断面(第9図)の南側約1m付近まで検出された。周溝幅は、約1mである。第9図第5層が4号墳の周溝埋土であり、5号墳の周溝埋土(第9図第6層)を切っている状況が確認された。

墳丘の盛土内には、石室側壁からそれぞれ北東と北西方向に構築されている石積みが発見された。この石積みは石列と同様にいわゆる墳丘前面のみに構築され、墳丘北東および北西側には認められない。東側は直線的に約2m、西側は南端部付近が木の根により損壊を受けていたものの、第11図のB-B'付近で屈曲し約3m構築されている。石積みには40~10cm大の角礫が使用され、東側では2~3段、西側では3~4段ほどの石垣状に積み上げられている。東側は約50cm、西側は約80cmの高さを測るが、石積み天端の標高は両者とも74m前後である。東側の基底石はほぼ旧表土上に、西側の基底石は盛土上に据えられている。

墳丘盛土は非常に柔らかく、突き固めている状況は窺えない。墳丘の築造は、旧表土から石室掘り方を掘削し、石室基底石を据え、裏込め土を置いたのち、側壁の2段目以上と先述の石積みを構築しながら、側壁の天端まで土を盛る(第9図第14・15層)。こののち天井石を架け、墳丘全体の盛り土を行ったと考えられる。

なお、第9図のA-A'断面図において石室主軸から東側約4m以東は県道工事によって墳丘が削平されているため、墳丘横断面形を表していない。



第11図 4号墳石積み (1/40)

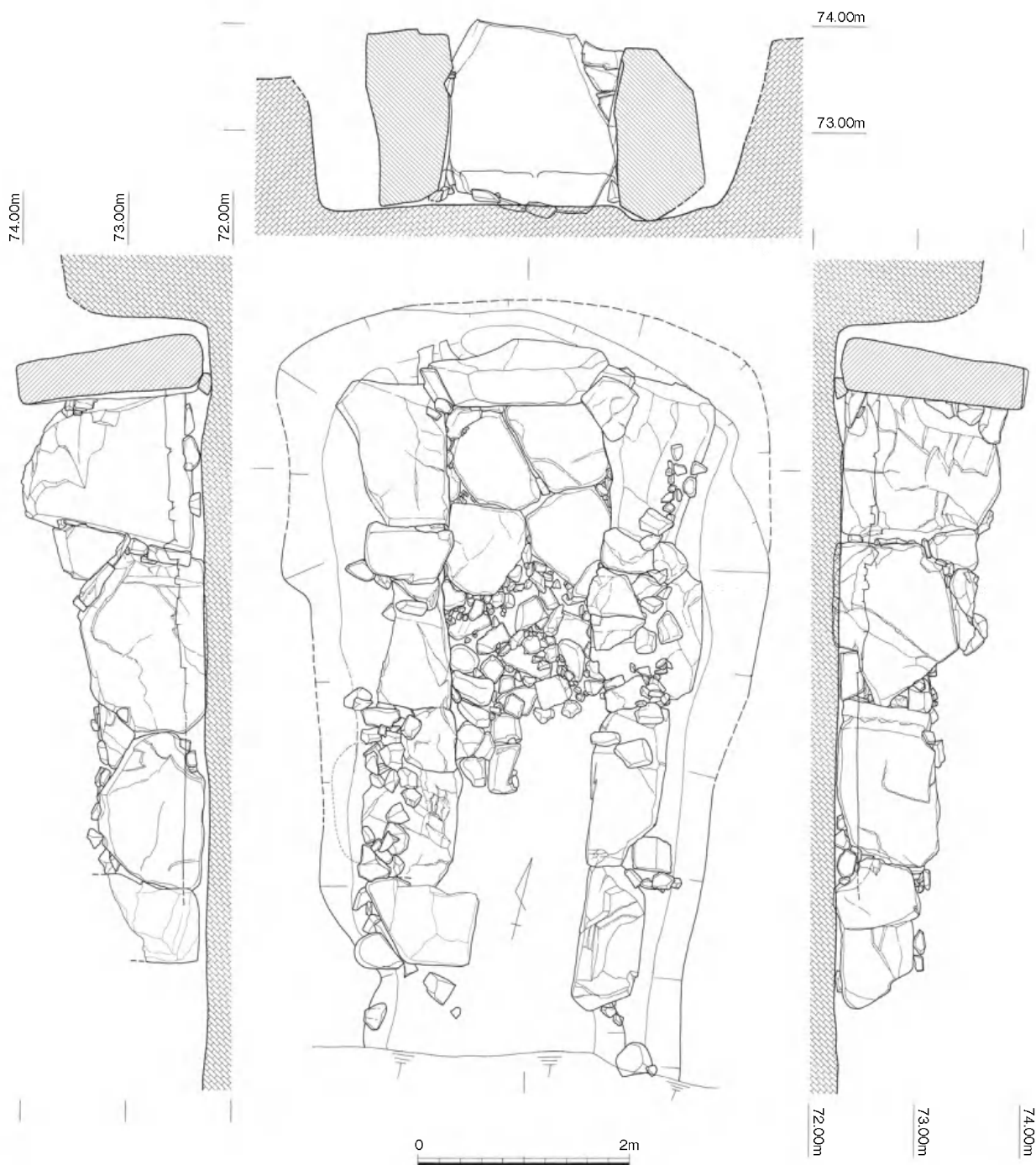
2 横穴式石室

4号墳は、規模および形態が不明な点が多いものの、右片袖式の横穴式石室と想定される。石室の開口方向はN-168°-Eである。石室内は中世頃に大きく攪乱を受け、特に東側壁側の奥壁から3m以南では第9図第E層付近にまで及んでいた。また、第9図第A層中からは、天井石および側壁2段目以上を抜き取った時に落ちた石が多数検出され、なかには50cm大の石も認められる。

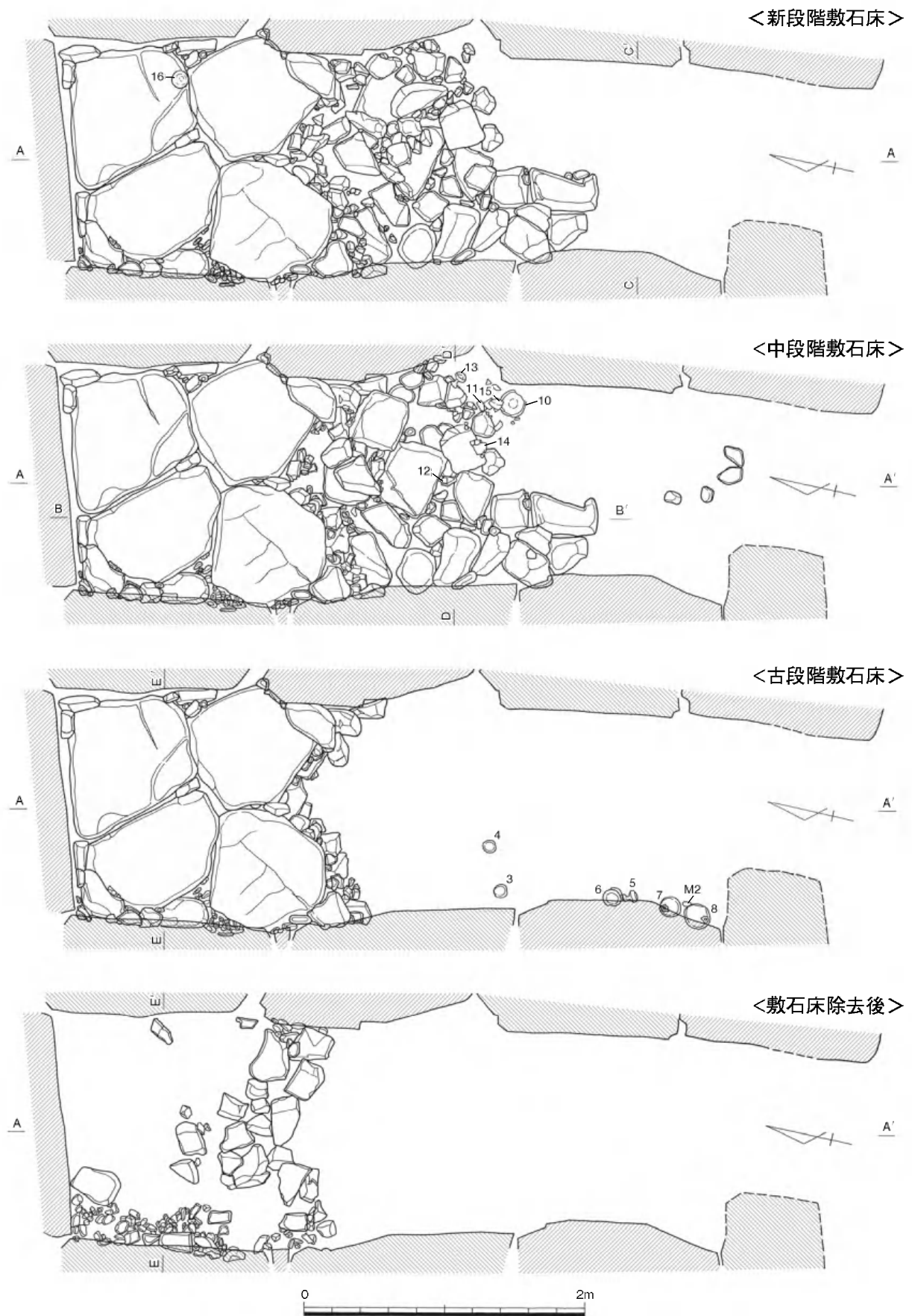
石室は残存長6.2m、奥壁側幅1.6m、高さ1.4mを測る。石室掘り方の深さは、奥壁側で約2m、羨道の南西側で約30cm、南東側で約50cmを測る。奥壁は上方にゆくにしたい幅が狭くなる、1.8m大の石が立てて据えられている。よって、奥壁と東側壁が接する箇所は、50cm大の石が石室主軸に約45°の角度で小口に置かれ隙間をなくしている。西側壁と接する箇所は残存していないが、東側壁と同様な状況であったと想定され、奥壁側の平面形は多角形状を呈していたと思われる。玄室側壁の基底石は3石で構成され、いずれも1.5m大の石が使用されており、特に奥壁から1石目の石は奥行きが約1mを測る。側壁基底石の天端の高さは、開口部に向けて下降している。これらの石の底面には、角礫

が置かれているものも見られる。袖を構成している石の上半部は抜き取り時に割られているが、おそらく立柱状の石が置かれていたと想定される。また、その対面の石も割られており、原形をとどめていない。玄門から南側は市道等により削平を受けており、閉塞施設等の石室開口部の状況は不明である。羨道幅は現存で1.0mを測る。

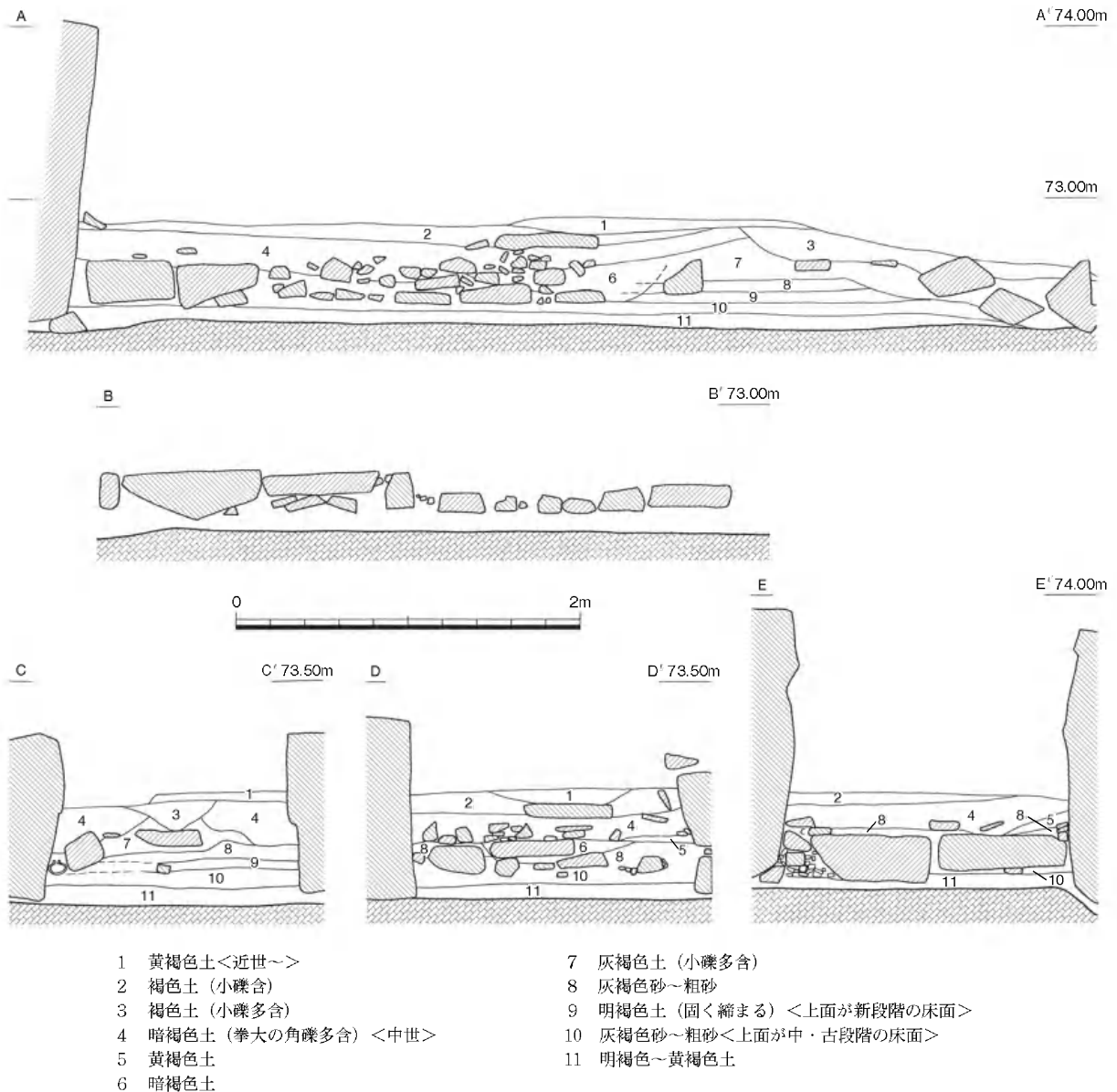
玄室は、石室掘り方底面に整地土を約10cm敷き、その上に石を敷いて床面としている。この敷石床は新・中・古の3段階に分けられる。古段階敷石床は、石室主軸で奥壁から約1.7m、東西両側壁側で同約2.2mまで置かれ、平面形では凹字状を呈する。敷石床より南側では整地土上に約10cm土を敷き土



第12図 4号墳石室 (1/60)



第13図 4号墳石室床 (1/40)



第14図 4号墳石室床断面 (1/40)

床としている。敷石床上面と土床の比高差は約30cmである。奥壁側には1 m大の平滑な巨石が4枚敷かれ、その巨石と側壁との間隙には20cm大の河原石や5 cm大の玉砂利を敷き詰めていた。敷石床の開口部側では、20cm大の石が面を意識して置かれ、なかには立柱状の石も認められる。奥壁側の巨石は奥壁および側壁と接して（東側壁北端の石の下に一部噛み込んでいる）敷かれており、これらの巨石を据えたのち、奥壁と側壁を構築したと考えられる。これら4枚の巨石は、整地土を掘り下げたり、下に石を置くことにより、上面の高さをそろえていた（第13図最下図）。中段階敷石床は、古段階敷石床から南側に50cm~20cm大の平滑な河原石を奥壁から3.6m付近まで置いているが、古段階敷石床と同じ高さまでは構築されておらず、約15cmの比高差が認められる。石と石の間隙には一部玉砂利を敷き詰めている。敷石床から南側では、古段階土床面が床面となっており、敷石床と土床の比高差は約15cmを測る。よって、この段階の床面は階段状を呈している。なお、中段階の敷石床は東側壁まで存在していたと思われるが、先述のとおり石室南東側が攪乱を受けているため、敷石は検出されなかつ

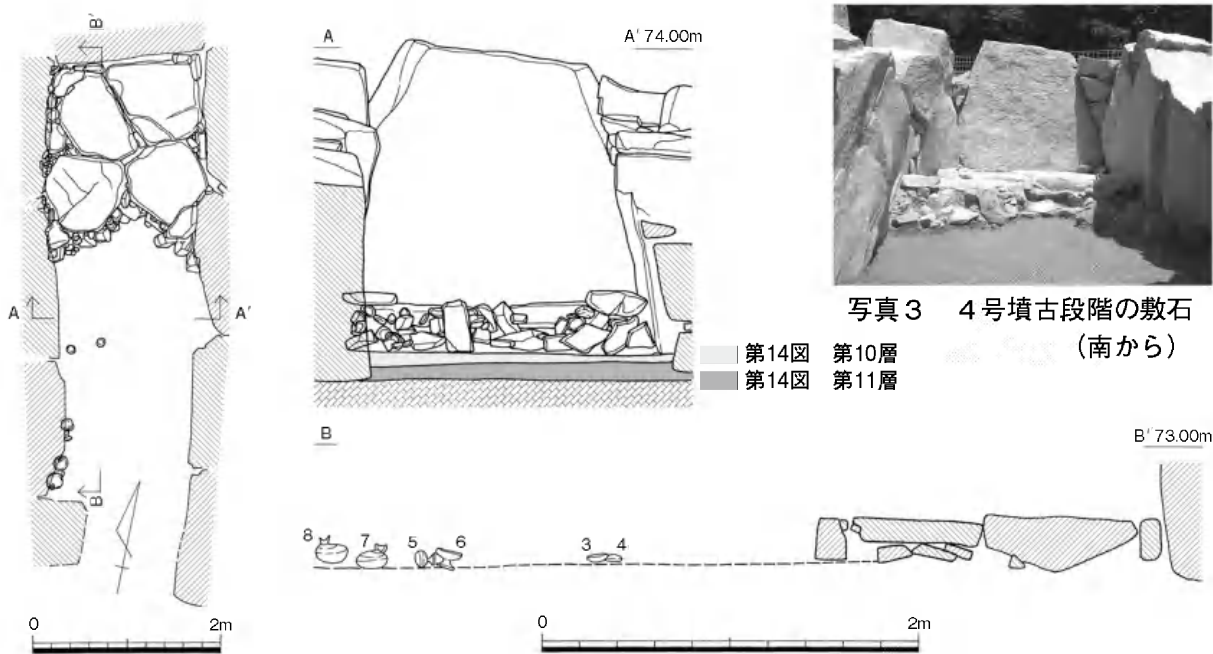


写真3 4号墳古段階の敷石 (南から)

第15図 4号墳古段階の敷石 (1/80・1/40)

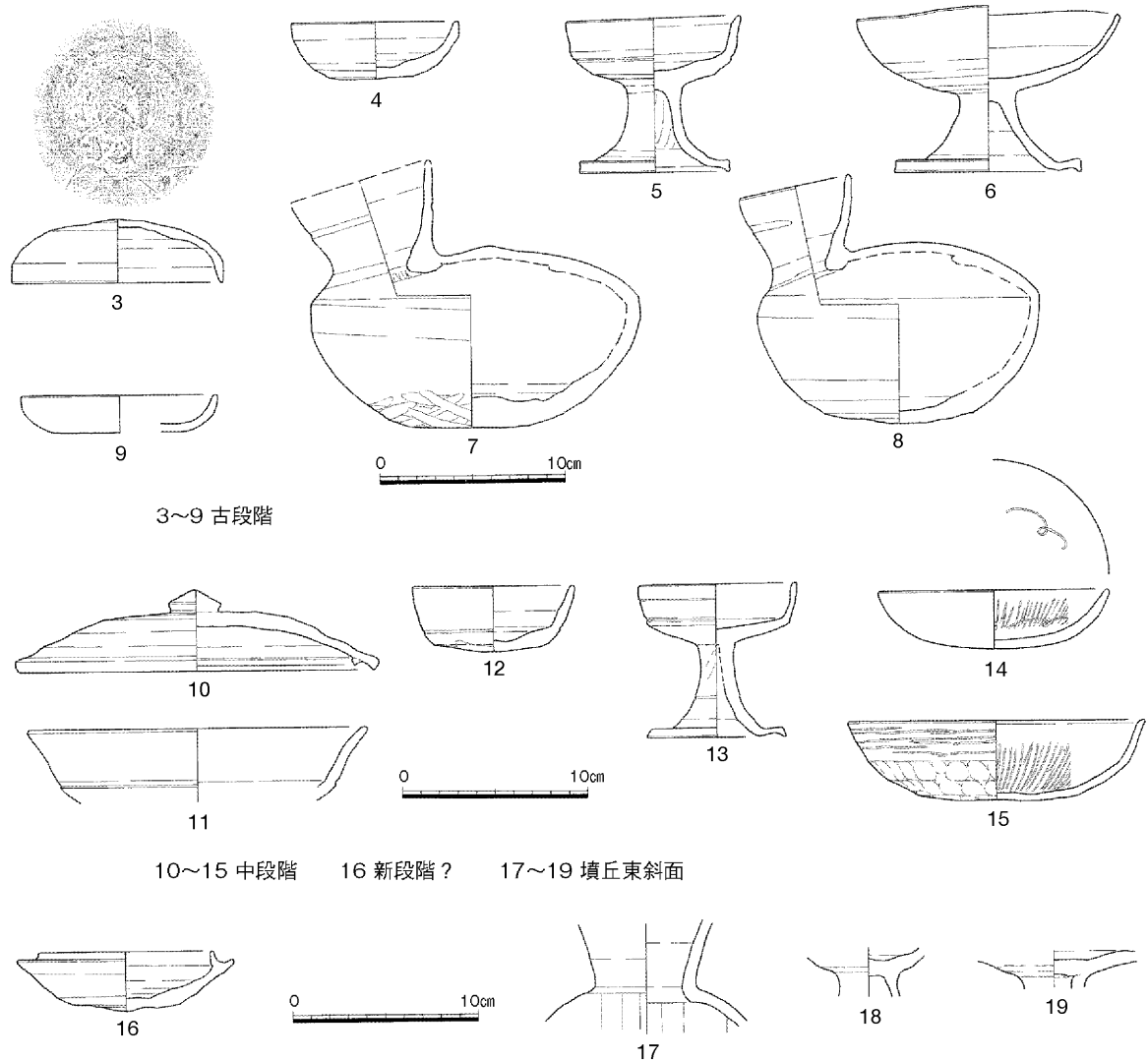
た。新段階敷石床は、中段階敷石床上に20cm～10cm大の角礫や河原石を置いている（床面西側については、当初落ち込んだ石と誤認してしまったため、除去してしまった。ただし、これらの石は中段階敷石床上のみに存在していた）。これらの石は古段階敷石床とほぼ同じ高さまで敷かれていた。この敷石床から南側では古・中段階土床面上に土が約5cm敷かれていた。

3 出土遺物

遺物は石室内と墳丘盛土および表土から出土している。3・4の須恵器杯は中段階敷石床の下、古段階土床上から出土した。5・6の須恵器高杯、7・8の須恵器平瓶は袖付近から出土し、転石等により断面観察が十分にできなかったものの、底面レベルは古段階土床とほぼ同じである。M2の鉄鏝は8の平瓶の下から出土した。5～8の土器とM2はいずれも古段階敷石床時のもので、中段階敷石床構築時に袖付近に集められたものであろう。9の土師器碗は奥壁側の敷石の間に入り込んでいたものである。古段階敷石床時の副葬品が破損して落ち込んだものか、古段階敷石床構築時に入り込んだものか不明である。10～15の土器は中段階敷石床時の副葬品と考えられる。12の須恵器杯身、13の須恵器高杯、14の土師器杯は中段階敷石床上から出土し、特に12・14の土器は新段階敷石床の下から出土した。10・11・13・15は新段階敷石床構築時に集められた可能性が高い。16の須恵器杯は北東端の敷石上から伏せた状態で出土している。調査時には新段階敷石床時の副葬品と考えていたが、形態から古段階敷石床時の副葬品の可能性も考えられる。M1の鉄鏝の先端部は、奥壁側の敷石付近を掘り下げた排土中からである。17～19の須恵器は、墳丘東側の表土および工事残土から出土している。

4 小結

4号墳は径14mの円墳であり、後述する5・6号墳と同様に墳丘前面に石列を、さらに墳丘前面の盛土内に石積み構築されていることが明らかになった。築造時期は、石室袖部や中段階敷石床下か



第16図 4号墳出土遺物1 (1/4)

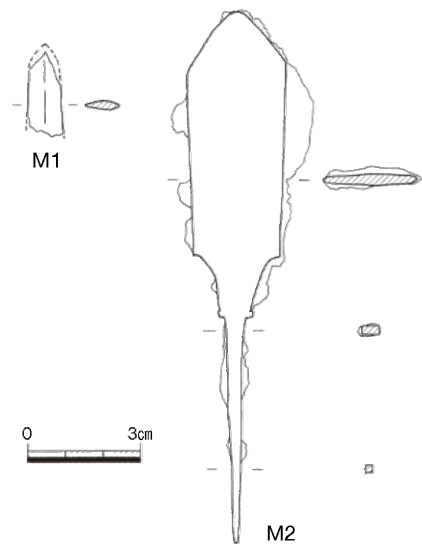
ら出土した須恵器がTK217型式の段階と考えられることから、7世紀前半代と思われる。

石室床面の敷石床の状況から、少なくとも2時期の追葬が想定され、最初の追葬は新段階敷石床下などから出土した須恵器・土師器から7世紀後半代、最終の追葬は時期決定可能な遺物が出土していないため不明である。

横穴式石室は、墳丘の構築状況や残存していた側壁裏込め石の検出状況から、奥壁および奥壁側1石目の側壁は1段積みであったと思われる。

17~19の須恵器や県道工事残土中から石室を構成していたと考えられる巨石が出土していることから、4号墳の北側にも古墳が存在していたと想像される。

なお、5点ほどサンプルとして石室石材を鈴木茂之准教授に鑑定していただき、花崗岩との御教示を得た。



第17図 4号墳出土遺物2 (1/2)

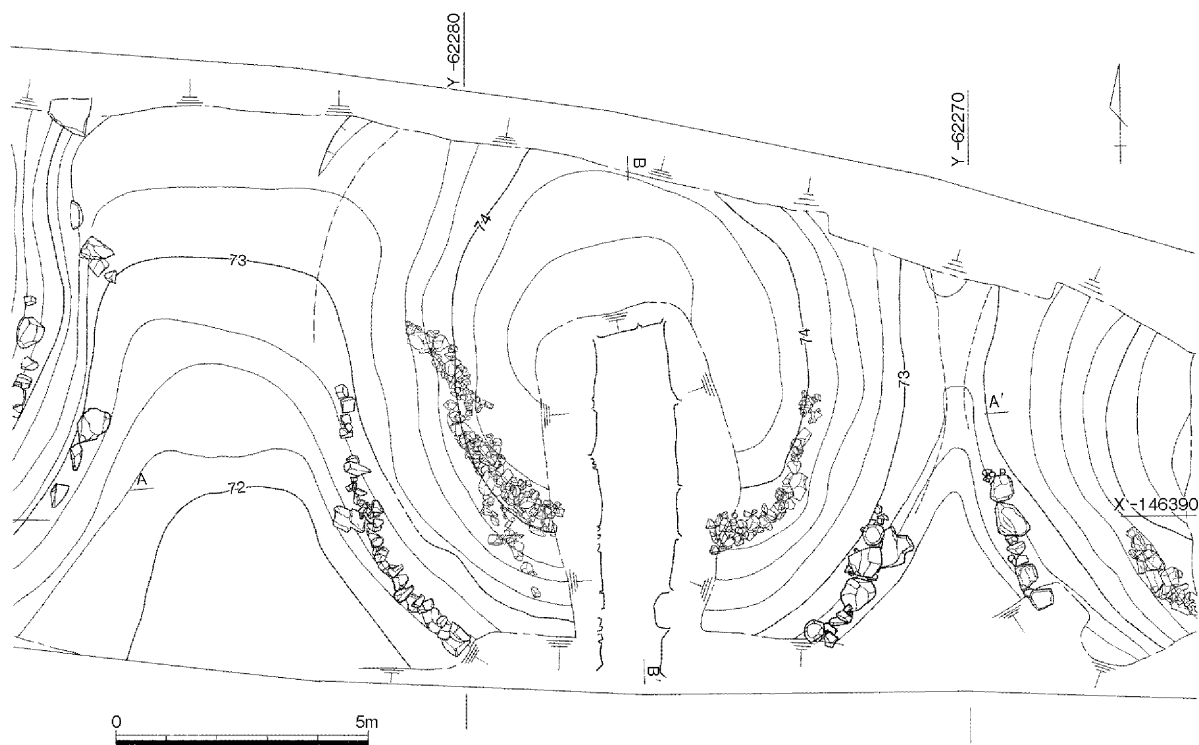
第3節 5号墳

1 墳丘と周溝

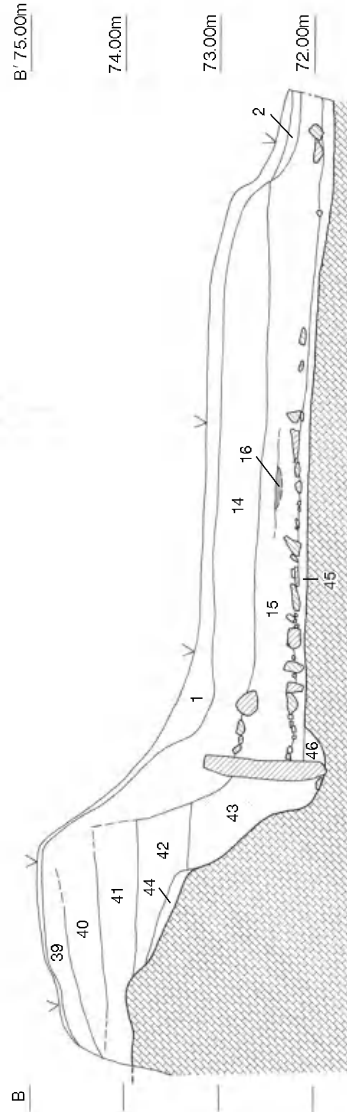
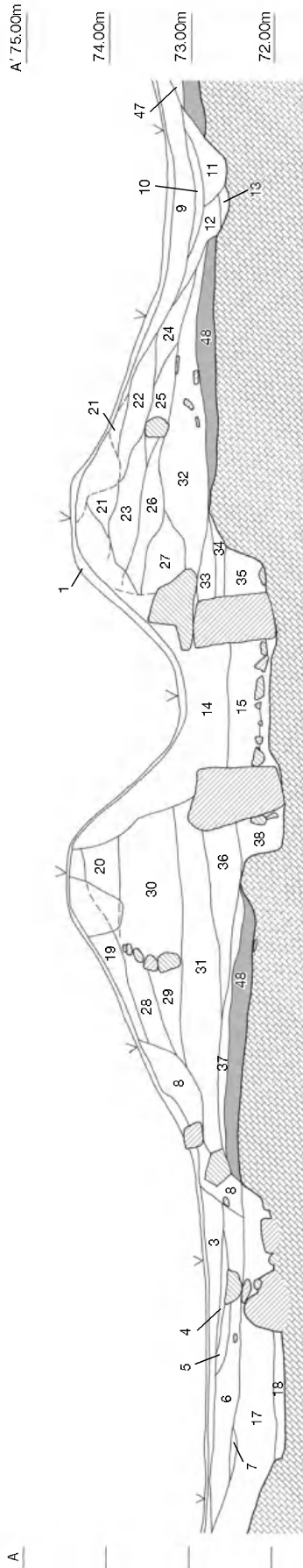
5号墳は山裾の斜面に築造された円墳である。調査前から、墳丘上部が削平を受け、墳丘は天井石が失われ、石室の一部が露出していた。また、墳丘の南側に市道が、北側には県道倉敷美袋線が通っており、それらによって墳丘の前後も削平を受けている。墳丘（第18図）の法量は直径13m、残存高2.4mを測る。盛土中には墳丘前半分を巡る石積みと墳丘南西側に石列があり、外表施設には墳端の前半分を石列が巡っている。幅約1.0mの周溝が墳丘の東西に残存しているが、東側の周溝は4号墳の周溝と切り合いで上部が削られており、西側の周溝は土砂の流出等で上部が失われている。

墳丘については、後ろ半分が整形した地山の上に盛土で、墳丘の前半分は全て盛土である。墳丘内の盛土（第19図）は大きな単位で墳丘の下部、石室の2段目までを覆った中部の石積み内側、石積みを覆う中部の外側、天井石までを覆った上部の4部位に分かれ、層の細かい版築構造にはならない。構築方法は、地山に掘り方を掘削し、石室の1段目を据え、裏込めをした後に、下部の盛土を敷き、墳端の石列を並べる。その上に石室の2段目を積み、盛土で周りを固める。そのマウンド上に石積みを設置し、盛土を補強する。それらの周りに、石積み頂部のレベルまで盛土で覆い、そこで盛土内の石列を並べる。そして天井石を据え、頂部まで盛土で覆って墳丘を形作ったと考えられる。

石列（第20図）は30cm台の角礫を基調に、一部100~70cm台の大形の石を用い、墳丘の前面に一段だけ置かれている。また、西側の石列には10cm台の角礫が裏込めとして使用されていた。これらの石

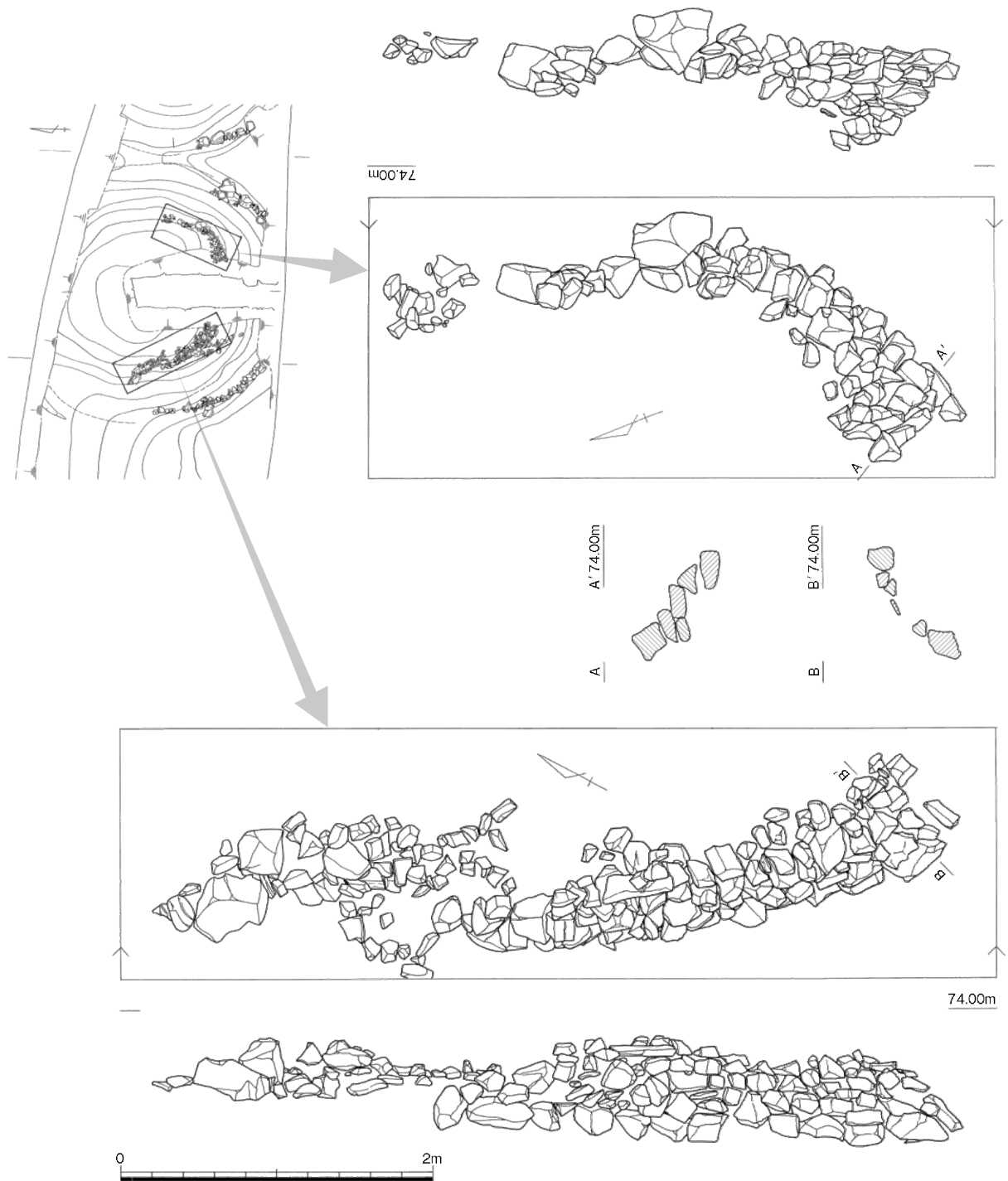


第18図 5号墳 (1/150)



- 1 <腐葉土>
- 2 暗褐色土 (瓦類含) <現代>
- 3 黄褐色砂質土 <近世~現代>
- 4 褐灰~明褐色砂質土 <近世~現代>
- 5 褐灰色砂質土 <近世~現代>
- 6 褐灰色細砂と明褐色粗砂の互層 <近世~現代>
- 7 にぶい黄褐色砂質土 <近世~現代>
- 8 黄褐色土 <流土>
- 9 黄褐色土 (砂含) <流土>
- 10 暗黄色土 (炭多含)
- 11 褐色土
- 12 暗灰色土
- 13 暗灰色粗砂
- 14 黄褐色土
- 15 黄褐色砂質土
- 16 <披熟赤化>
- 17 灰黄褐色砂質土
- 18 黑色粘性砂質土
- 19 黄褐色砂質土 <盛土>
- 20 黄褐色土 <盛土>
- 21 にぶい黄褐色土 <盛土>
- 22 黄褐色土 <盛土>
- 23 褐色土 <盛土>
- 24 褐色土 <盛土>
- 25 にぶい黄褐色土 <盛土>
- 26 黄褐色土 <盛土>
- 27 暗黄褐色土 <盛土>
- 28 黄褐色土 <盛土>
- 29 褐色土 <盛土>
- 30 暗灰黄褐色土 <盛土>
- 31 暗褐色土 <盛土>
- 32 黄褐色土 <盛土>
- 33 暗褐色土
- 34 黄褐色土
- 35 褐色土
- 36 黄褐色土
- 37 暗褐色土と黄褐色土の混合土
- 38 黄褐色土
- 39 黄褐色土 <盛土>
- 40 にぶい黄褐色土 <盛土>
- 41 黄褐色土 <盛土>
- 42 暗褐色土 <裏込め土>
- 43 暗黄褐色土 <裏込め土>
- 44 暗褐色土 (炭粒多含)
- 45 暗褐色土
- 46 黒褐色土
- 47 暗黄褐色土 <4号墳盛土>
- 48 暗褐色土 <旧表土>

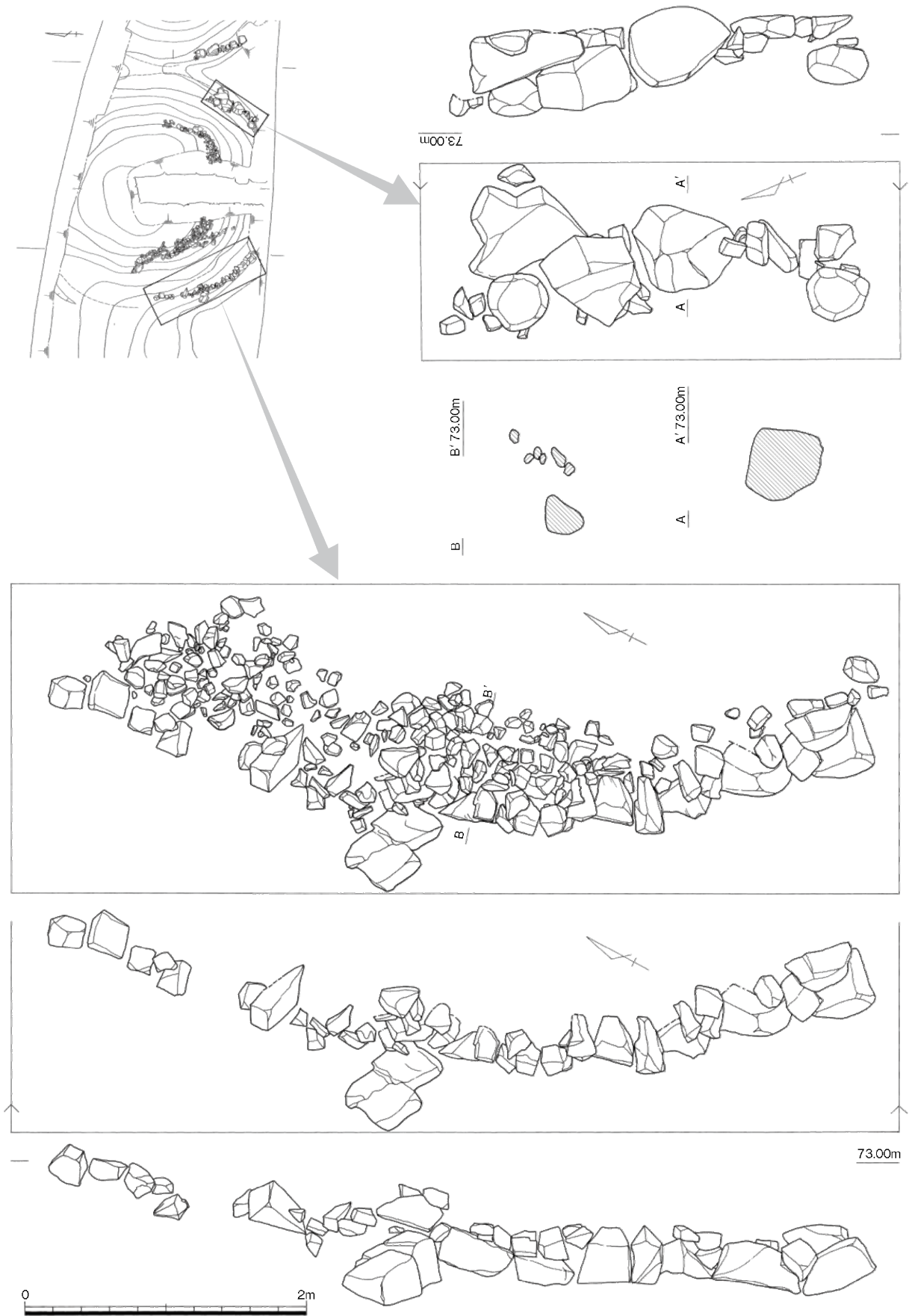
第19図 5号墳丘断面 (1/80)



第21図 5号墳石積み (1/40)

列は墳端を強調し、墳丘前面の盛土の流出を防止する役割を持っていたと考えられる。

石積み（第21図）は墳丘前面の盛土内に石室の側壁を挟むようにハの字形に置かれている。東西ある石積みのうち東側は盛土構築段階に一部が崩れている。石積みとしたが、実際は墳丘構築段階で墳丘の中心部側の盛土に貼り付くように積まれている。石積みの構造は5～6段積まれており、墳丘側面に回り込むと、石の段数が減っていき、最終的には一段になる。西側の後ろ半分の石積みは前面部分とは異なり、基本一段で乱雑に散らばっているため、後述する石列の一部に含まれるものかもしれない。石積みの石材を見てみると、最下段の石は40～20cm台の角礫を使用し、それよりも上段になる

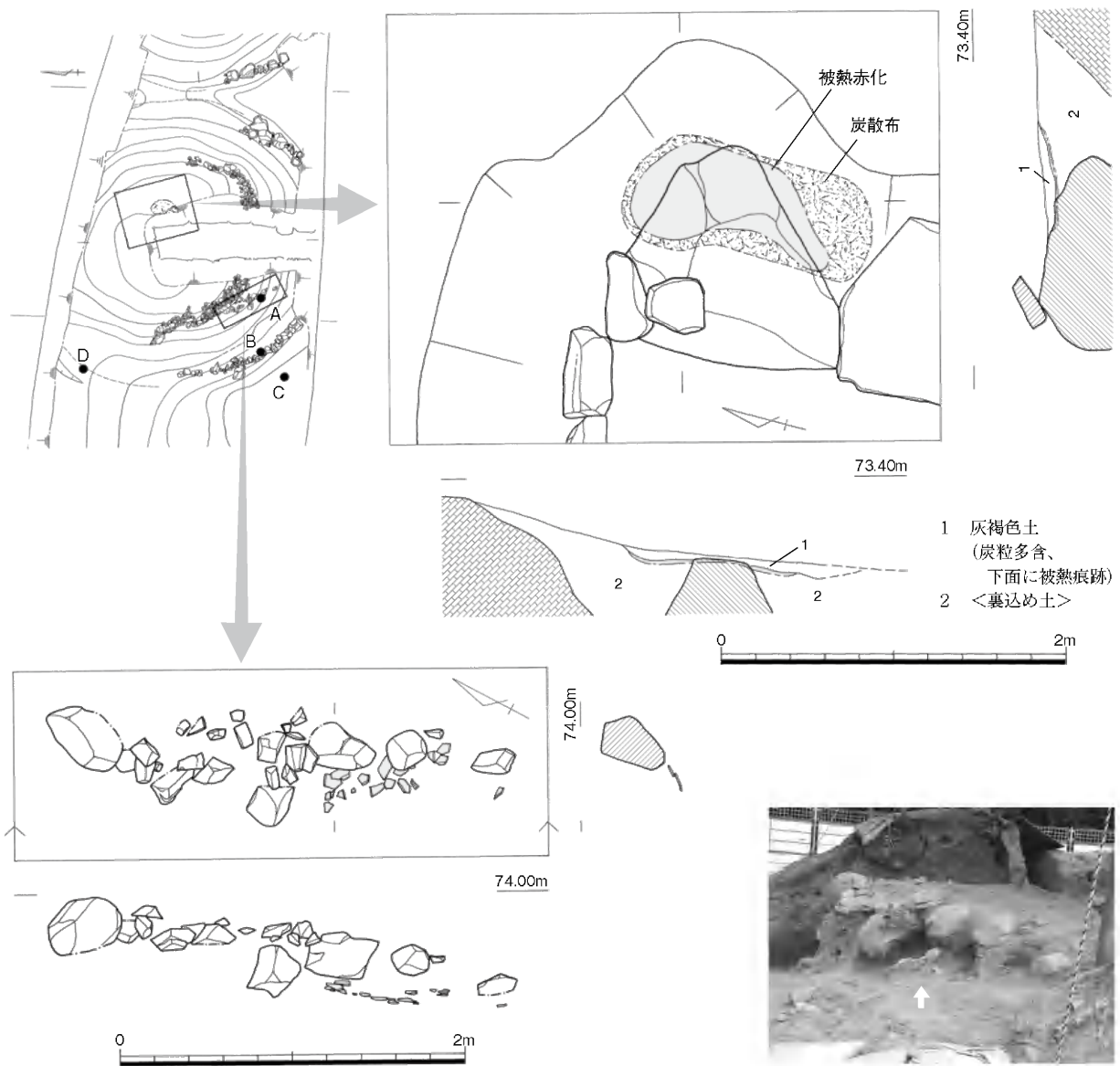


第20図 5号墳石列 (1/40)

と、礫のサイズは比較的小形の揃ったものを用いている。石積みの並び方は上部がほぼ直線になっているが、下部は若干の丸みを帯びる。また、この石積み頂部の標高は、残存する側壁の2段目とほぼ同じであるため、天井石を置く前の盛土のレベルに合わせて構築されたと考えられる。そのため石積みの役割は、墳丘前面部の盛土の強化に用いられたのであろう。

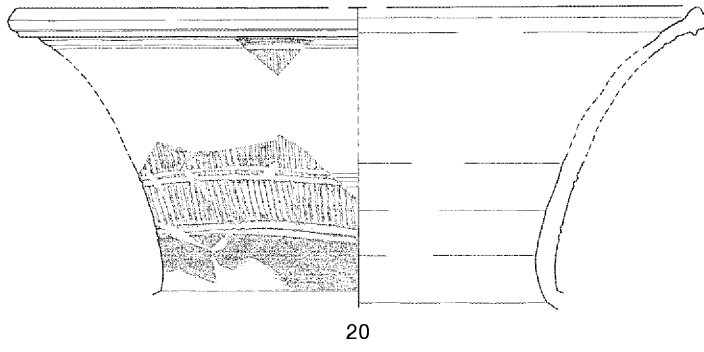
東側壁の一番奥、下段の石材の裏込め土上面に被熱面（第22図）が確認された。これは墳丘構築途中に、1段目の側壁の裏込めをした後、何らかの儀式、あるいは作業工程のために火を起こした痕跡ではないかと考えられる。

墳丘前面東側の盛土中に石列（第22図）が確認されている。石材は40~10cm台の礫が用いられている。この石列は基本的に標高73.5m前後を、石室開口方向に対して斜め向きで、ほぼ直線で置かれている。さらに石列下部（A地点）や、墳裾の石列（B地点）、その外方（C地点）、周溝内（D地点）で、須恵器甕片（第23・24図）が散乱した状態で検出された。A地点出土21・22・24・25の内面調整から、少なくとも甕2個体が存在したと推定され、これらはB・C地点出土の甕片と接合した。D地

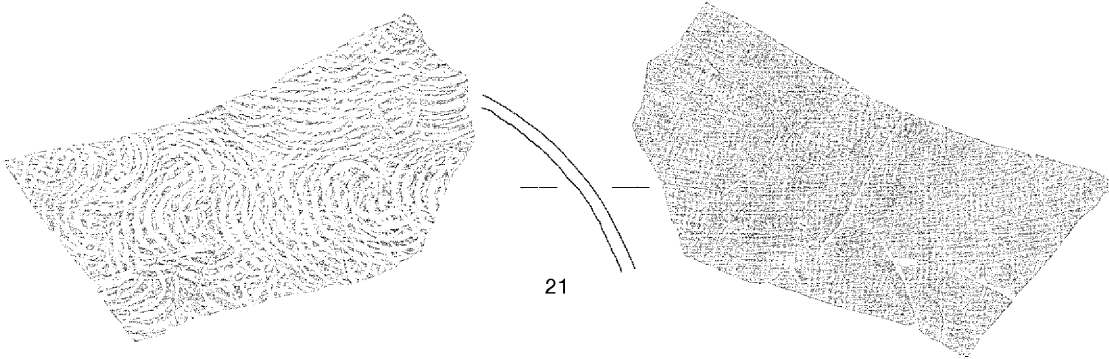


第22図 5号墳焼土面と土器溜まり (1/40)

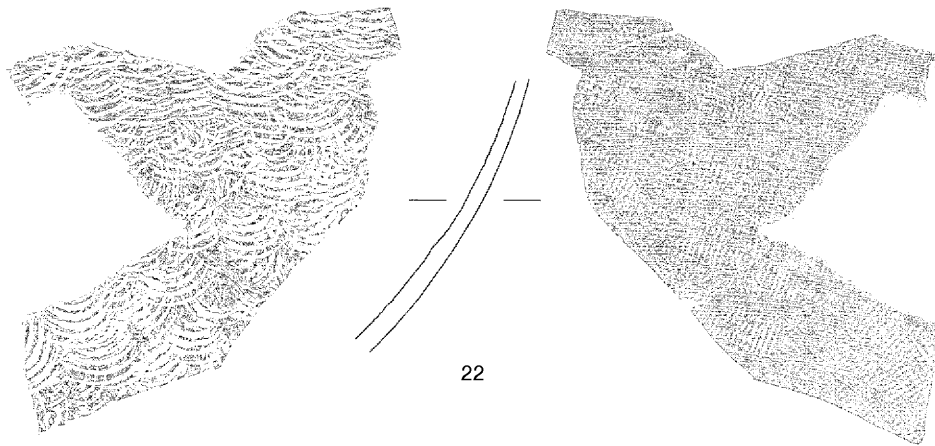
写真4 5号墳土器溜まり
(A地点)と石列(南西から)



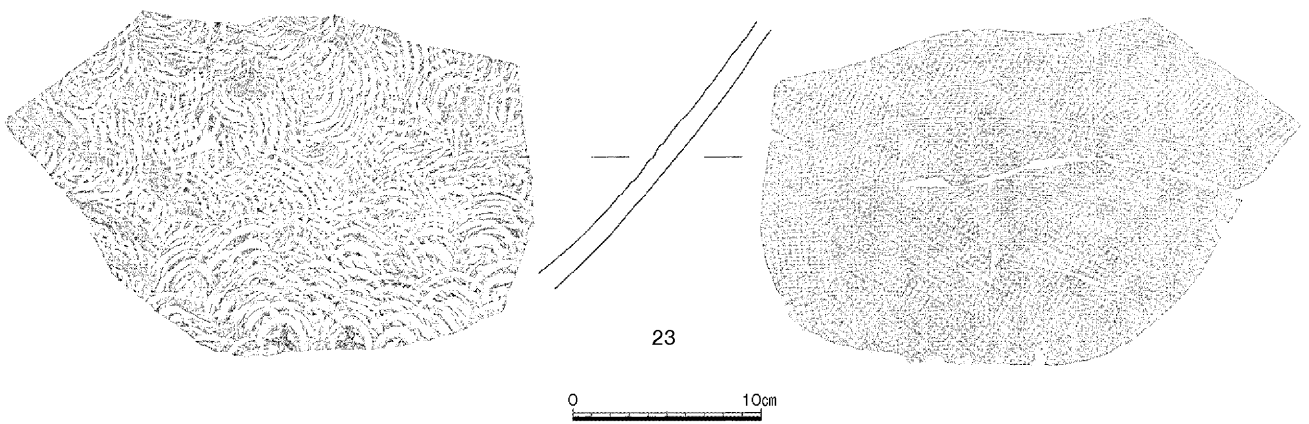
20



21



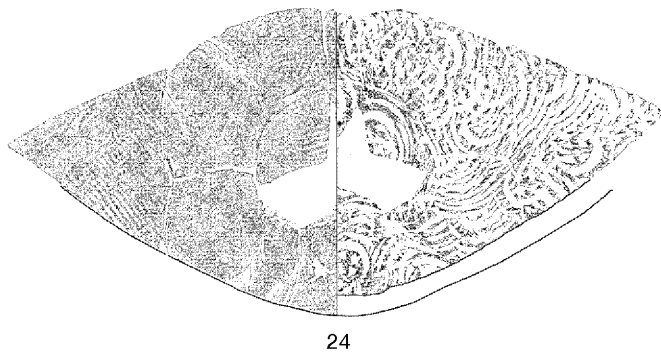
22



23

0 10cm

第23図 5号墳出土遺物1 (1/4)



第24図 5号噴出土遺物2 (1/4)

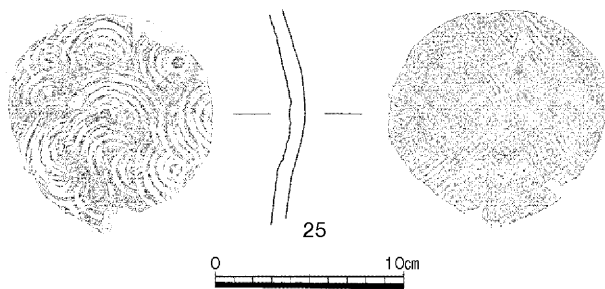


写真5 5号墳土器溜まり
(A地点) (南西から)



写真6 5号墳土器溜まり
(D地点) (北東から)

点出土23は、24と同様に車輪文が見られるが、同一個体かどうかは不明である。いずれにしても、A地点出土の須恵器は、石列や盛土との関係から、墳丘築造途中で盛土中に取り込まれたと考えられる。

2 横穴式石室

5号墳の埋葬施設は左片袖式の横穴式石室（第25図）である。玄門近くの羨道に30cm台の閉塞石が残存している。石室の開口方向はN-179°-Eである。石室は、羨道前面は市道により一部が削平されており、天井石は全て取り除かれ、羨道部石材の一部、玄室部の側壁や奥壁の上部は、一部を除いて抜き取られた状態であった。使用石材は全て近隣で調達した花崗岩である。

石室内の堆積（第19図）は上層から、表土（腐植土）層・中世の攪乱層2層・床石下層・旧表土層となっており、中世の攪乱層中に側壁の石材が、抜き取りの際に転石となって入り込んでいる。

石室の法量は残存長約7.0m、石室の内法は、玄室は長さが最大で5.3m、幅は奥壁側1.4m・中央部1.6m・玄門部は1.3m、羨道の長さは1.8m、幅は1.0m、石室の残存高は最大で1.4mを測る。

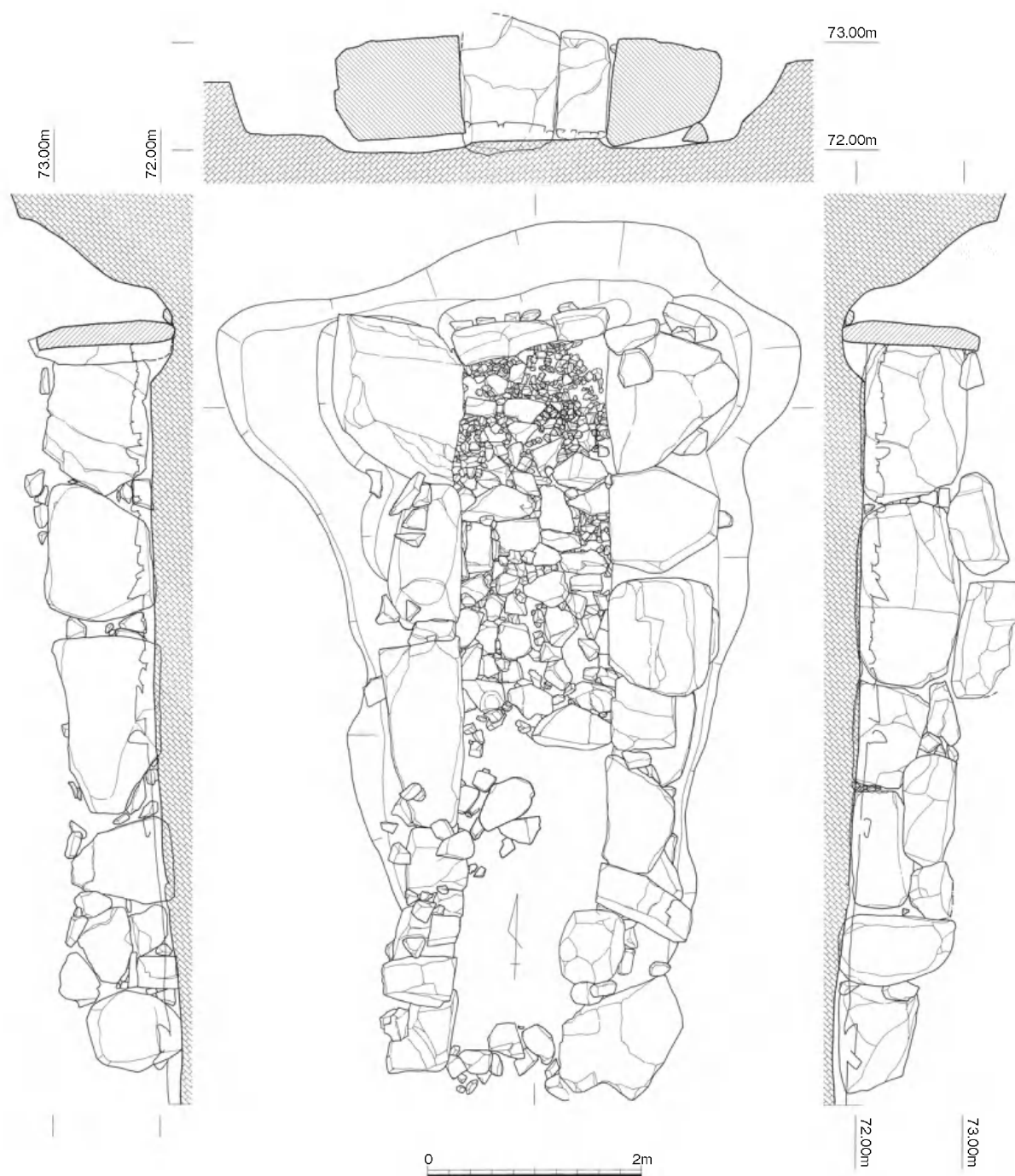
石室の掘り方は、玄室を中心とした部分に地山を最大70cmほど削り込まれている。それに対して羨道部に向かうにつれて、掘り方は徐々に浅くなり、石室の羨道部に先端にいたると、掘り方はほとんど無くなる。羨道部は地山を削った面と旧表土上に、石材を据えただけのようである。

石室の構造は抜き取りのために確定的ではないが、奥壁は2段以上、側壁は2～3段の石材が積まれていたと考えられる。残存している下段の奥壁は2枚の鏡石である。側壁は、袖石が立柱状に1段据えられていることを除けば、玄室のものは長さ1.7～0.9mの大きめの石材を置いて、上段は下段と同じく1.0m台の石を積んだと考えられる。羨道の側壁は、下段の石材に玄室のものと比べて比較的小さな1.0～0.4m台の角礫を置き、その上部に同程度、あるいは若干小振りの石材を積む。

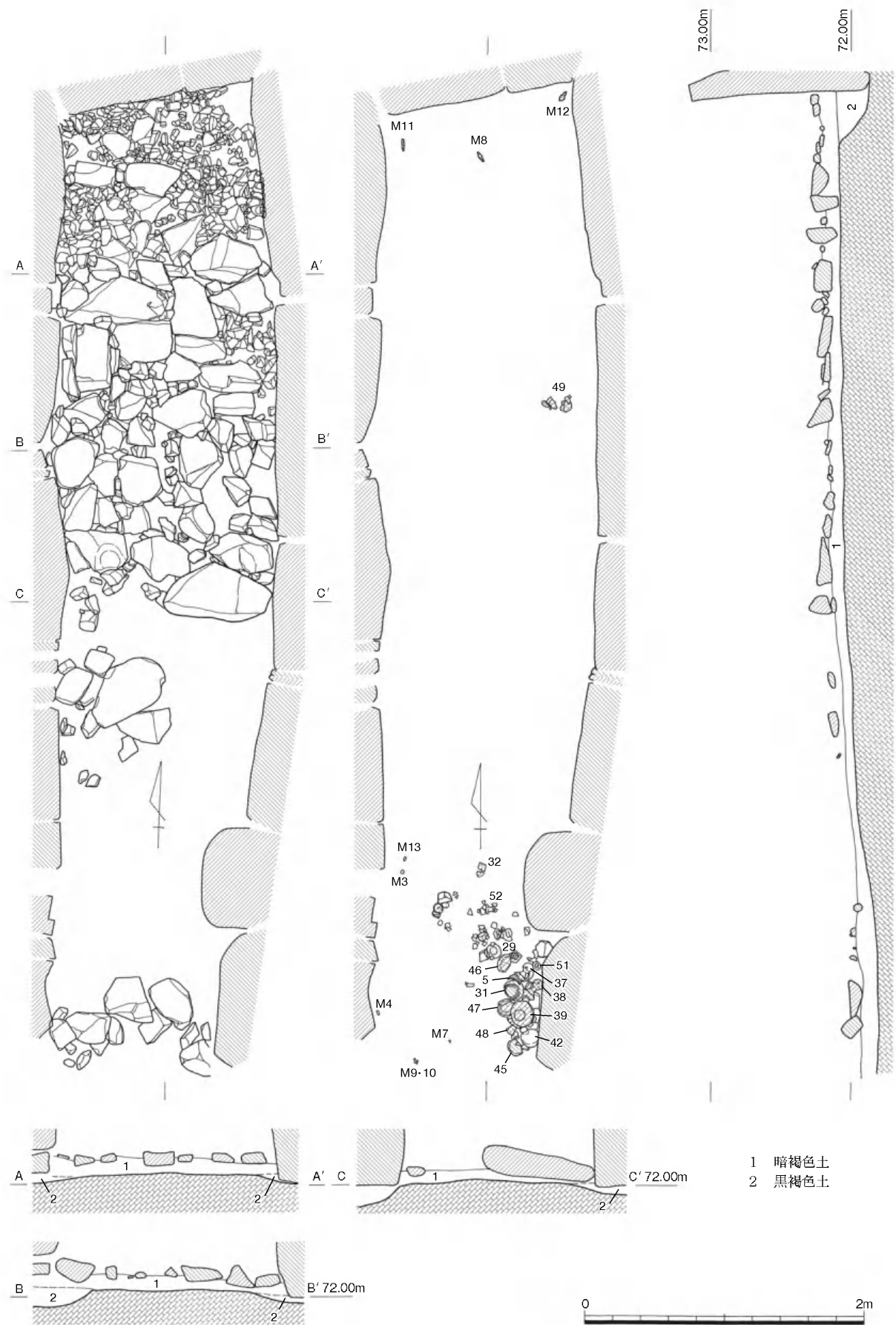
また側壁石材のいくつかには敲打痕が確認された。そのため石室は、適当な大きさに加工し、敲打

によって平坦面を整形した石材も用いて造られたと考えられる。

床面（第26図）は追葬時に玄門から玄室の手前約2.0mの所に大形の板石で区切り、そこから奥壁までが石が敷かれる。そのため玄室の奥壁側3.7mは敷石のために一段高い構造になっている。敷石は奥壁から1m付近までは10～5cm台の小型の角礫を用いた礫床となっており、その他は前面部から礫床に向かって70～20cm台の板石が敷かれる。ただしこの板石は4・6号墳に比べると小振りで、並び方も雑然としている。そして床石を取り除いたところに初葬面が確認された。初葬段階は石室内床面に敷石を用いなかったようである。床面の石敷きによる再構築があったことや、後述する出土遺物から、最低でも2回以上の追葬を行った可能性が考えられる。



第25図 5号墳石室 (1/60)



第26図 5号墳石室床 (1/40)

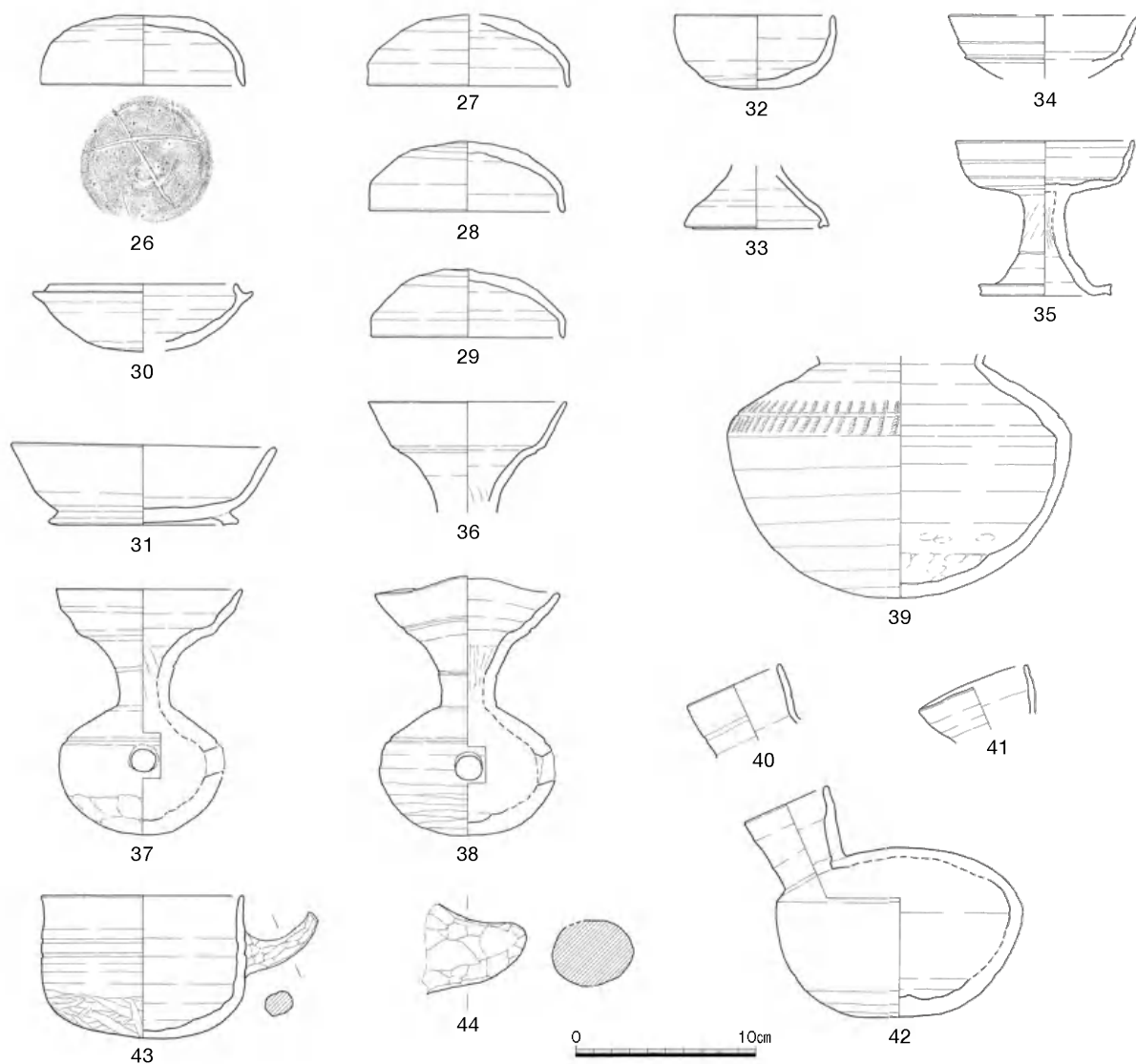
3 出土遺物

石室内の遺物は、玄室にはほとんど無く、追葬時に多くが羨道部に掻き出されている（第26図）。玄室内から出土した遺物は、土器では土師器や須恵器が出土している。多くは小片であるが、土師器では敷石下部より高杯49、敷石直上に甑44が確認されている。また初葬面の奥壁周辺には木棺に用いたと考えられる鉄釘M8・M11・M12が出土している。

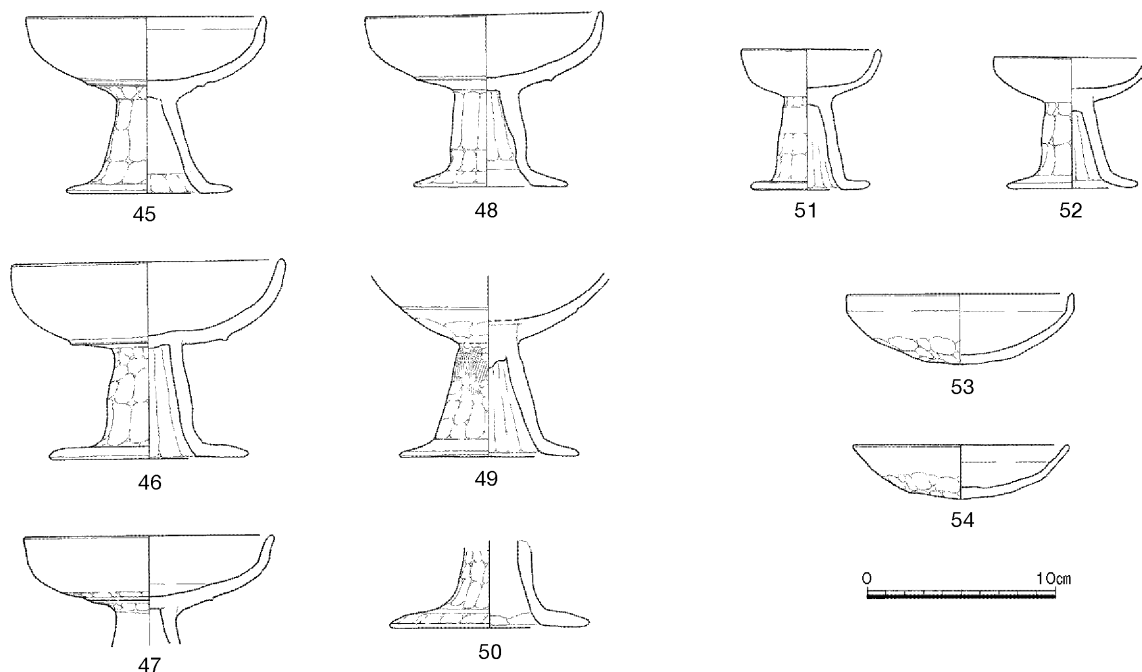
羨道部からは、須恵器（第27図）は杯蓋26～29・杯身30～32・高杯33～35・甗36～38・短頸壺39・平瓶40～42・把手付碗43が出土している。1点だけ高台を持つ飛鳥IV式期の杯身（31）があったが、それ以外はT K209～T K217段階のものであると考えられる。なかでも39の短頸壺は口縁部から頸部にかけて意図的に削り取られた痕跡が見られる。

また、土師器（第28図）は杯53・54と高杯45～48・50～52が確認されている。これらは、時期的に、須恵器のT K217段階と並行するものである。

金属製品（第29図）は鉄釘M9・M10・M13と銅芯に鍍金した耳環M3・M4が出土した。



第27図 5号墳出土遺物3（1/4）

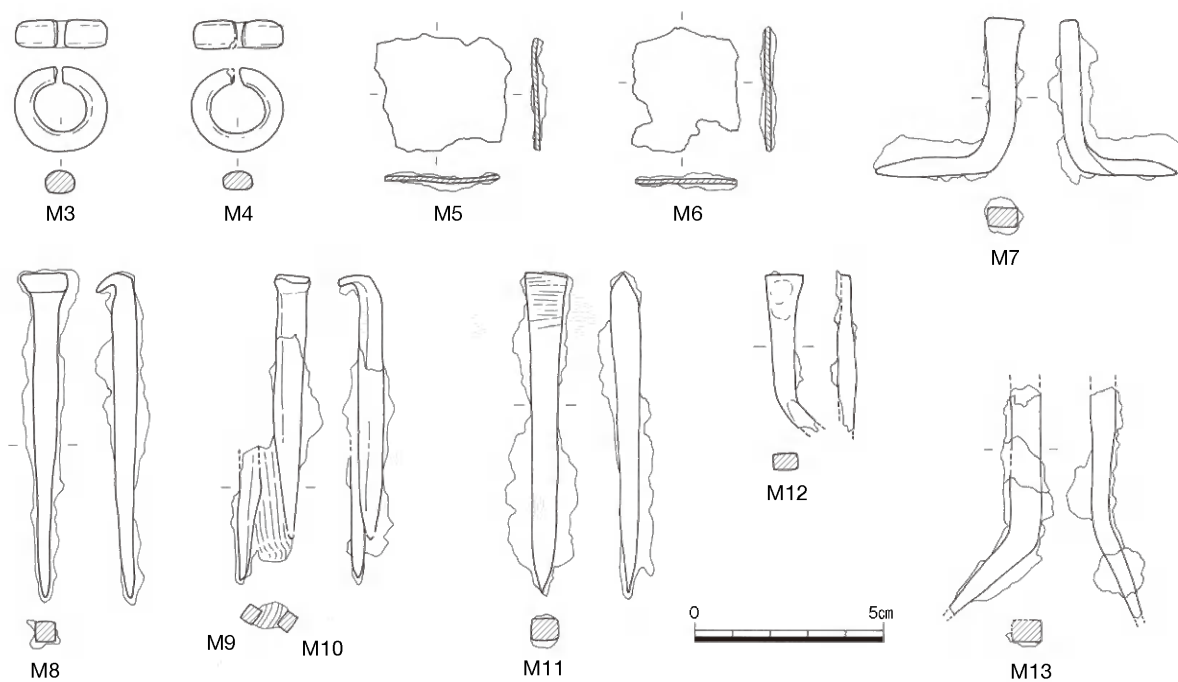


第28図 5号墳出土遺物4 (1/4)

そのほかの遺物として、中世の攪乱層に早島式土器碗や鉄釘などが確認されている。

4 小結

5号墳は、TK209の須恵器が出土していることから、古い段階も想定できるが、基本的にはTK217段階の出土遺物を中心としているため、築造時期は7世紀前半ではないかと考えられる。そして床面の状況や羨道部の遺物から、追葬を経て、古墳の終末期まで使用されたのではないかと考えられる。



第29図 5号墳出土遺物5 (1/2)

第4節 6号墳

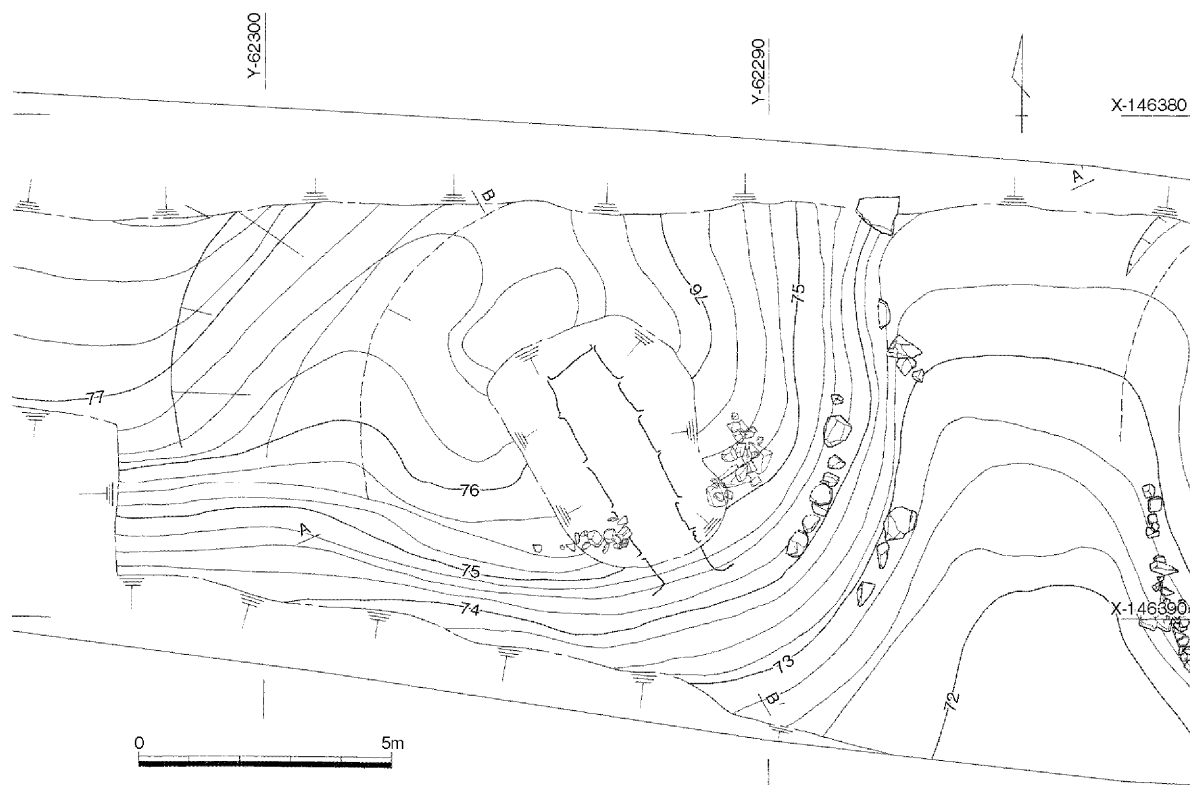
1 墳丘と周溝

6号墳は5号墳と小さな谷筋を挟んで西側の尾根先端部に立地する。調査前の状況は、4・5号墳と同様に、石材の抜き取りによって墳丘の中央部が大きく窪み、北側の道路が周溝の東半部と墳丘の北端部を削平していた。南側の道路の削平はかろうじて墳丘南端部をかすめる程度であった。

6号墳の墳丘は、直径10m、残存高2.6mの円形である。墳丘内部に石積み、墳丘裾部に石列が検出され、墳丘外には人為的に配置されたと推定される貼石が認められた。

墳裾部の石列は、横穴式石室東側壁の最前部の石材から、東へ約1.5mの地点から検出された。この1.5mの間は石材が流失している可能性があり、本来は石列と側壁は接していたと考えられる。石列の残存長約3mで、4・5号墳と同様に石室の開口する墳丘の前面にのみ設置され、墳丘の背面には延びていない。角礫を外側に面を作って並べ、一部、二段に積んでいる所があるので、もとは二段以上の石積みだった可能性もある。石室開口部西側には石列が確認されなかったが、流失したのか、もともとなかったのか、判断が付かなかった。

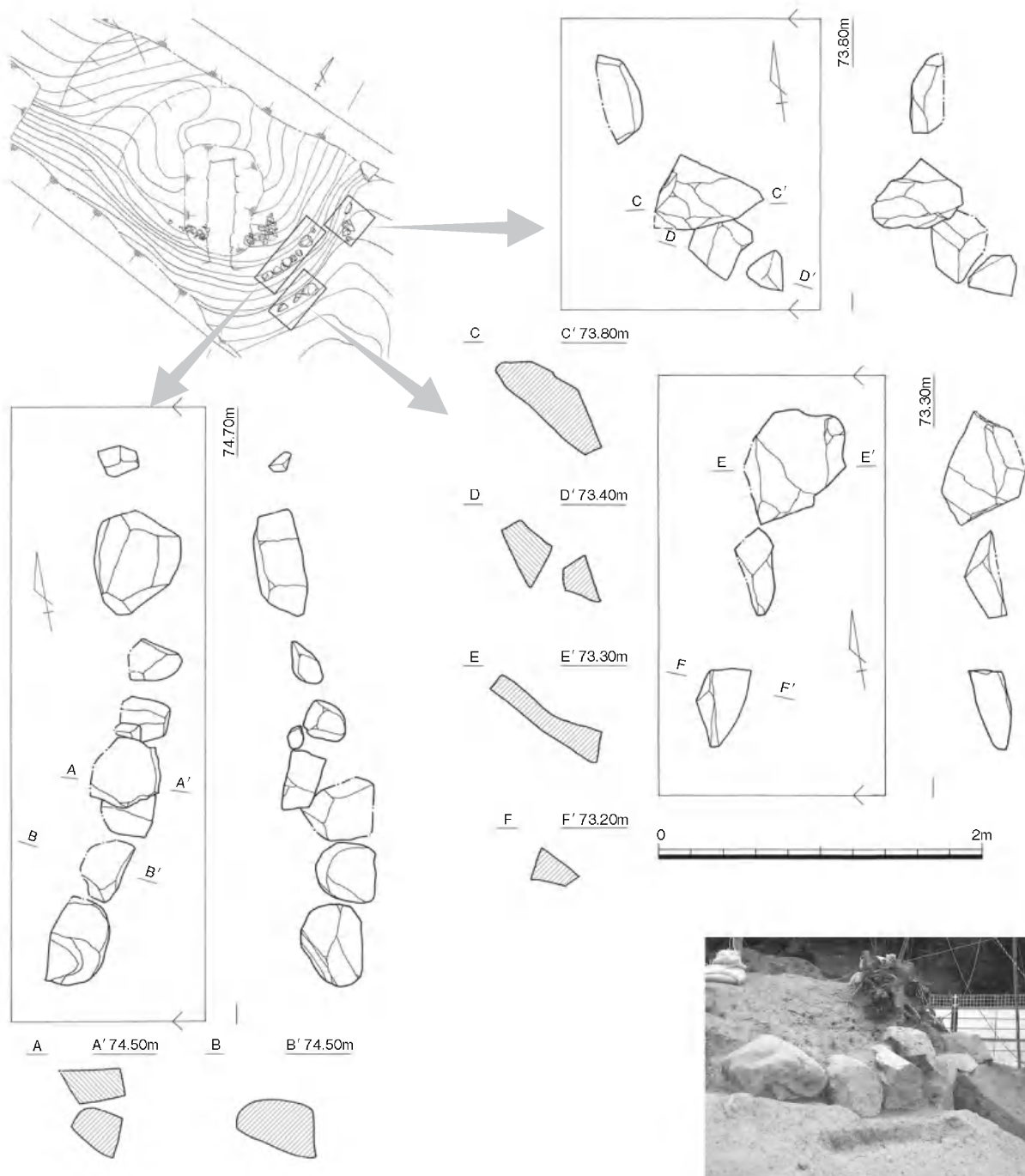
墳裾の石列よりさらに約1.5m下方に貼石がみられた。この貼石は、谷部の積み重なり散乱した石とは違って、あたかも斜面に貼り付けたかのように観察された。ただ、間隔がまちまちであり、剥落した痕跡も確認されなかったことから、人為的か否かで理解が分かれるところであるが、調査担当者としては、古墳を立派に見せるための視覚的効果をねらった配石と考えている。



第30図 6号墳 (1/150)



第31図 6号墳填丘断面 (1/80)



第32図 6号墳石列・貼石 (1/40)

写真7 6号墳石列 (南から)

石積みは、石室の東西両側で検出された。西側の石積みは約20cm大の角礫を約1.5mにわたって、直線的に並べたもので、石列といった方がいいかもしれない。この石積みは石室掘り方内に収まっており、位置的には側壁の裏込め土の流出を防いでいるように見られるが、高さがないので、石の厚みしか土止めの役目を果たせない。また、この石積みの東部は、右側壁一段目の石材上面に載っており、側壁の一部となっている。側壁石材上面の石積みと裏込め部分の石積みと、位置や並びからは分離できそうにない。以上のことから、西側の石積みの設置時期は側壁の二段目を設置する直前と考えられ、その目的は、側壁石材二段目を安定しておけるように、側壁一段目の上面から裏込め土上面にかけて石を配置したものと推定される。東側の石積みは、50cm大の大形の石を基礎にして、小形の石を平面

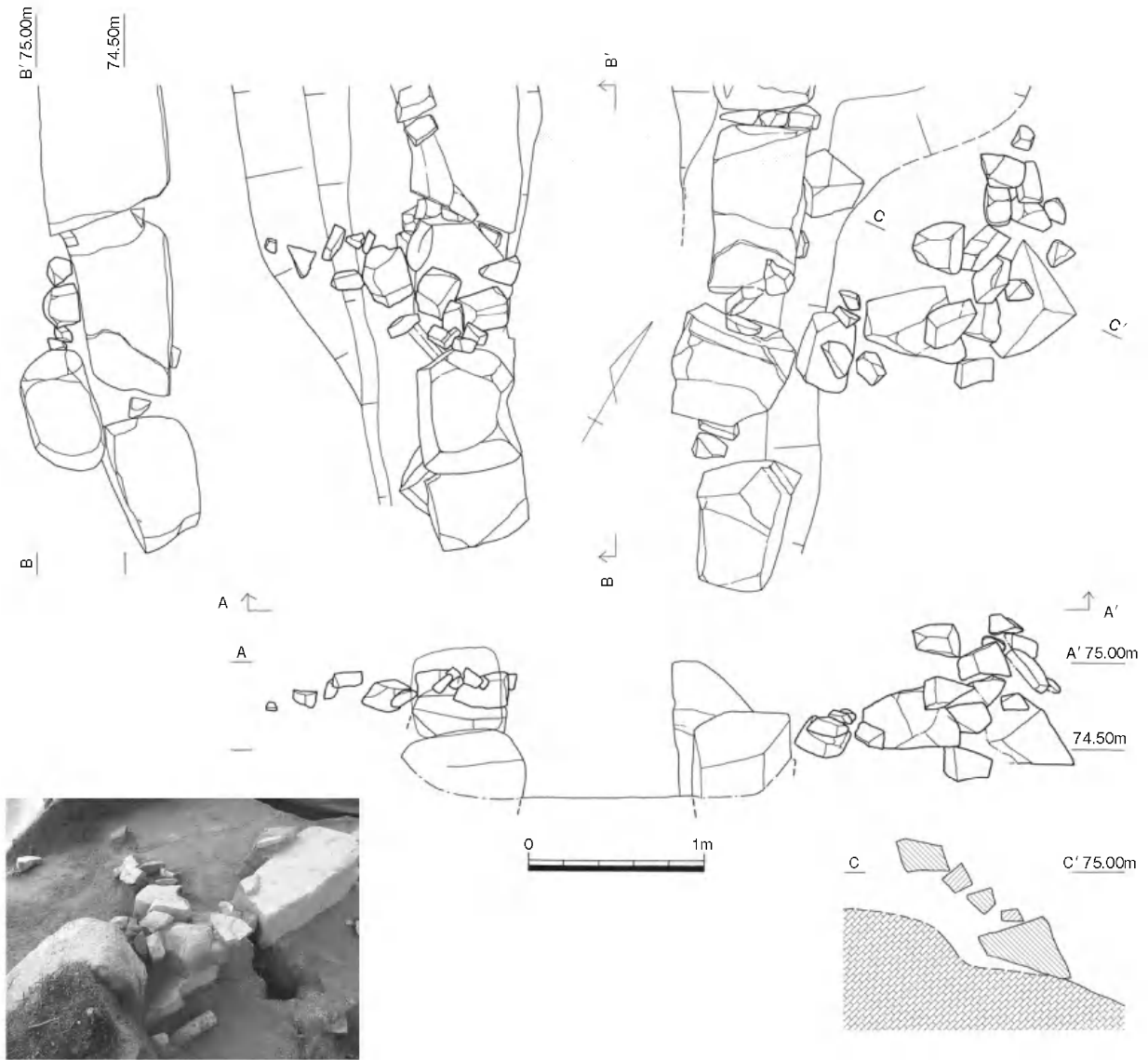
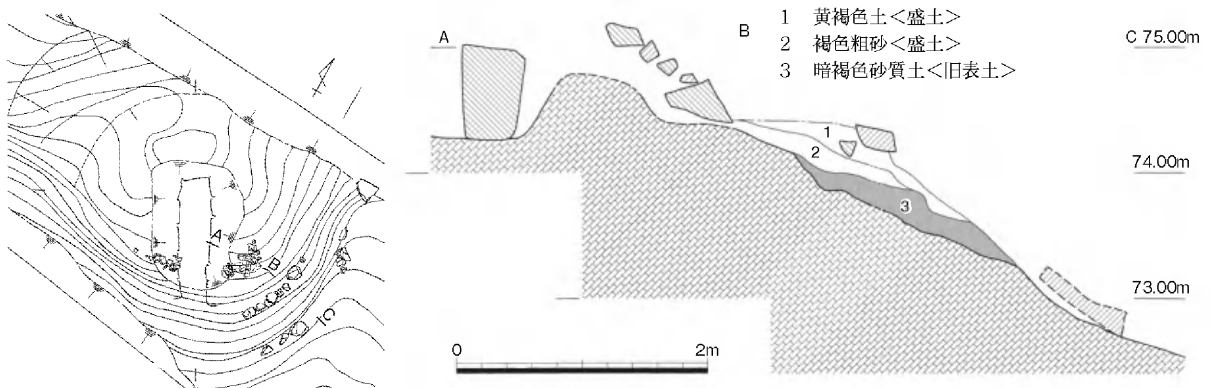


写真8 6号墳西側石積み（東から）

第33図 6号墳石積み（1/40）

「逆L」字形にやや乱雑に積み上げたもので、不安定な石もあることから、盛土と同時に積み上げたものと推定される。設置時期はその位置と高さから、側壁一段目石材の裏込めを行って後、二段目の石材を積み上げる前に設置開始され、二段目の裏込めを行うとともにその高さを増していったものと考えられる。

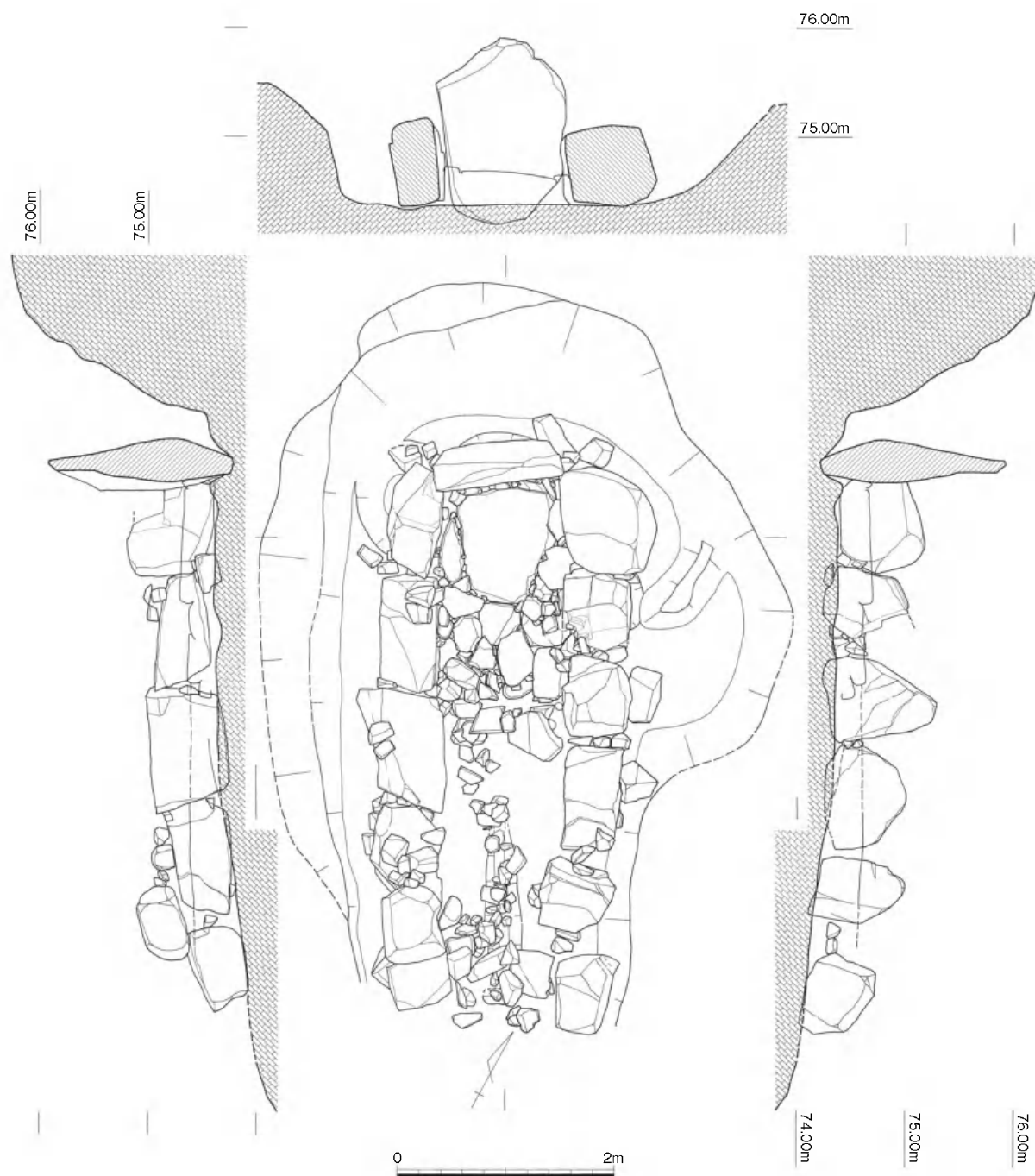


第34図 6号墳石積み・石列・貼り石断面（1/60）

えられる。機能は盛土や裏込め土の土止めと推定される。石積み上面の高さは、側壁一段目の石材上面の高さより若干高い程度で、4・5号墳で検出された石積みと比べると、かなり低い。

2 横穴式石室

6号墳の埋葬主体は無袖式の横穴式石室である。天井および側壁の二段目以上の石材は完全に抜き取られていたが、奥壁や側壁一段目そして床面は残っていた。石室は残存長5.1mであるが、墳端の石列の位置や方向から推定すると、現存する側壁最前部の石の前にもう一石あった可能性があり、その場合、石室全長は5.5m前後になる。石室幅は奥壁部で1.1m、中央部で1.2m、入口部で1.0mを測り、



第35図 6号墳石室 (1/60)

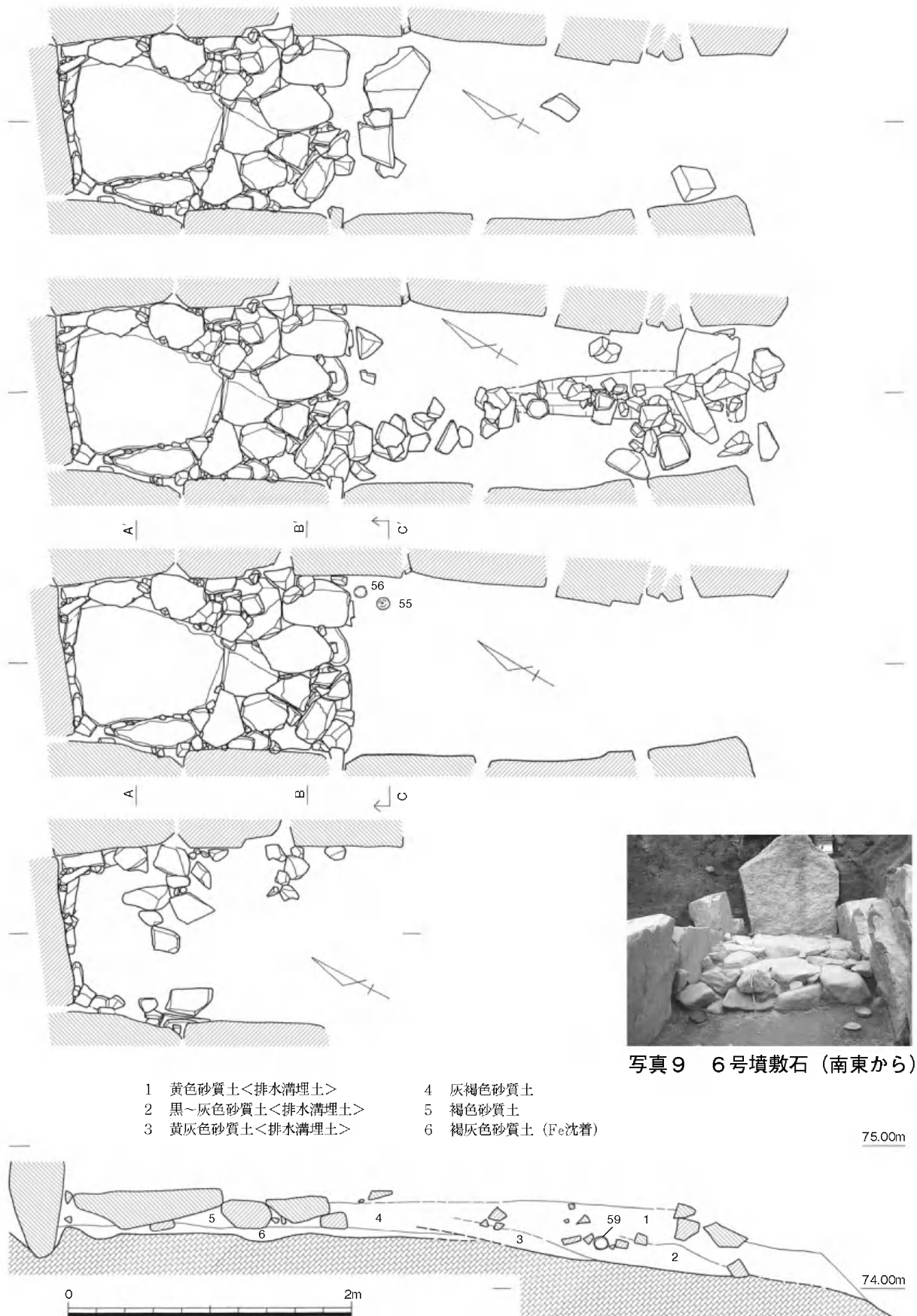
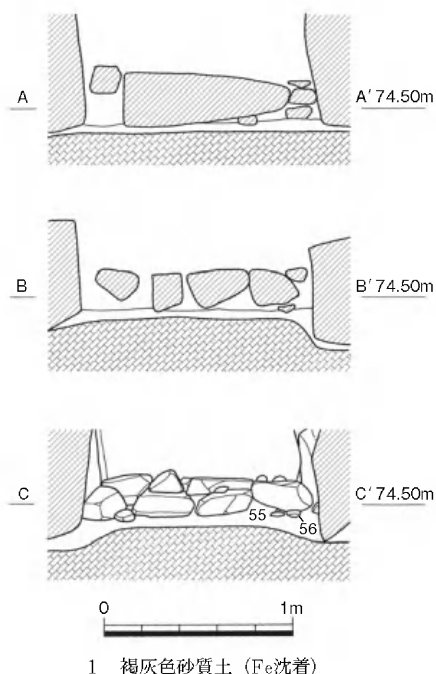
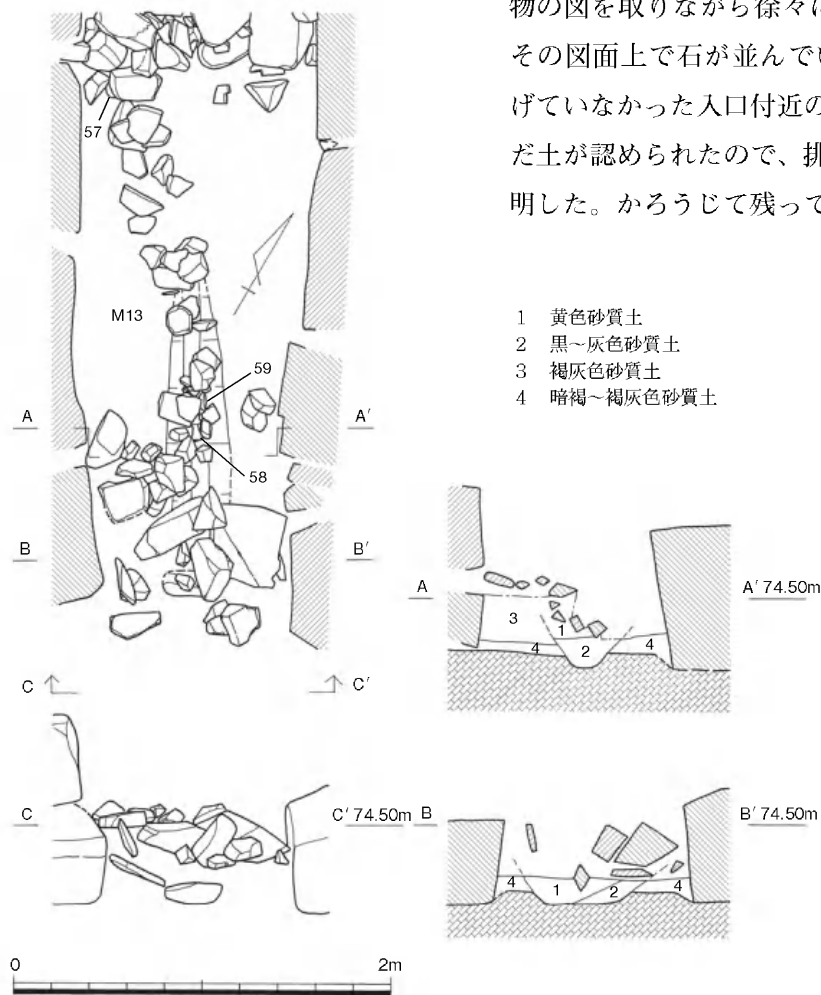


写真9 6号墳敷石 (南東から)

第36図 6号墳石室床 (1/40)



第37図 6号墳石室敷石 (1/40)



第38図 6号墳排水溝 (1/40)

僅かに胴張り気味である。開口方向はN-152°-Eで、等高線に直交するように南東を向いている。奥壁には幅1.2m、高さ1.7m、厚さ40cmの薄い板状の石を使用している。床面から奥壁の上端までの高さは1.3~1.5mを測る。

床面は、奥壁から約2mまでが敷石床で、そこから入口までは土床となっている。敷石床は奥壁側中央に平面約1×0.8m、厚さ26~30cmの大きな平石を置いて、その周囲に小形の石を配置している。敷石床の前面部は石の面をそろえて配置され、敷石床上面は土床より20cmほど高い。敷石を除去し、精査したが、敷石の下には上部の石の水平を取るために詰められたと推定される石材が認められるだけで、土器など遺物の破片はまったく検出されなかったことから、この敷石床は石室構築当初に附設されたものと考えられる。

土床部分は、なかなか床面と推定できるような土の違いや固さの違いが認められなかったので、検出された石や遺物の図を取りながら徐々に掘り下げていった。ところが、その図面上で石が並んでいることに気づき、まだ取り上げていなかった入口付近の石の周囲を精査すると、黒ずんだ土が認められたので、排水溝が掘削されていたことが判明した。かろうじて残っていた断面を観察すると、石の状

況などから、排水溝は標高74.50m付近から掘り込まれていると推定された。排水溝は、敷石床の前面西端から掘られ、入口に向かうにつれて石室幅の中央により、入口部分で溝の幅が約1m、石室いっばいに広がっていると推定される。溝の深さも入口に向かうにつれ徐々に深くなる。この排水溝は、その内部に入れられた石の量は少なく、大半は土で埋まっていることから、埋設して常時機能させるものではなく、溜まった水や湿気を抜くた

めに掘られ、すぐ埋められた一時的な溝と考えられる。また、排水溝に対しては基盤となっている土の中から須恵器蓋杯55・56が床面に置かれたような状態で検出された。これらの須恵器が置かれた面が当初の土床面と推定され、追葬時にこの土床上に土を盛り、敷石床より僅かに低い程度の高さに再び土床面をこしらえ、それと同時かもう一段階後に排水溝を掘削したと理解される。

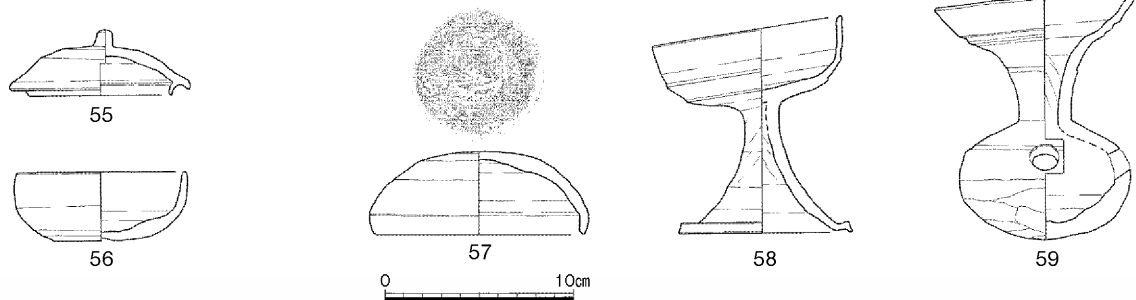
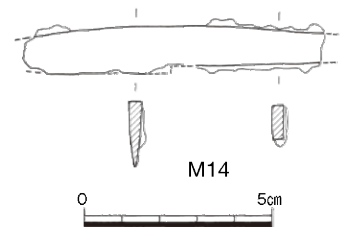
なお、鑑定の結果、石室の石材は花崗岩であり、周辺の石材を使用している。

3 出土遺物

出土遺物には須恵器と鉄製品がある。乳頭状のつまみが付く55蓋と・56杯は前述したように、敷石床前面の東側土床上に置かれていたもので、初葬時の遺物と推定され、出土状況から両者はセットと捉えられる。57蓋、58高杯、59甕は排水溝内から出土した。59甕の内部には、穿孔時の胎土が内部に残っている（図版16）。また、鉄製刀子M14も排水溝内から検出された。これら排水溝内の遺物は、初葬に伴うか、あるいは土床に盛土した段階の追葬に伴うと考えられるが、土器の特徴からすると、初葬に伴っていた可能性が高いと思われる。

4 小 結

八紘6号墳の築造は、須恵器からTK217型式の時期と推定され、土床が二面あると判断されることから、最低一回の追葬を行ったと考えられる。石敷床が石室構築当初のものと推定される点や、排水溝が追葬に伴うものと考えられる点などは留意される。



第39図 6号墳出土遺物 (1/4・1/2)



写真10 6号墳古段階の土器 (南から)

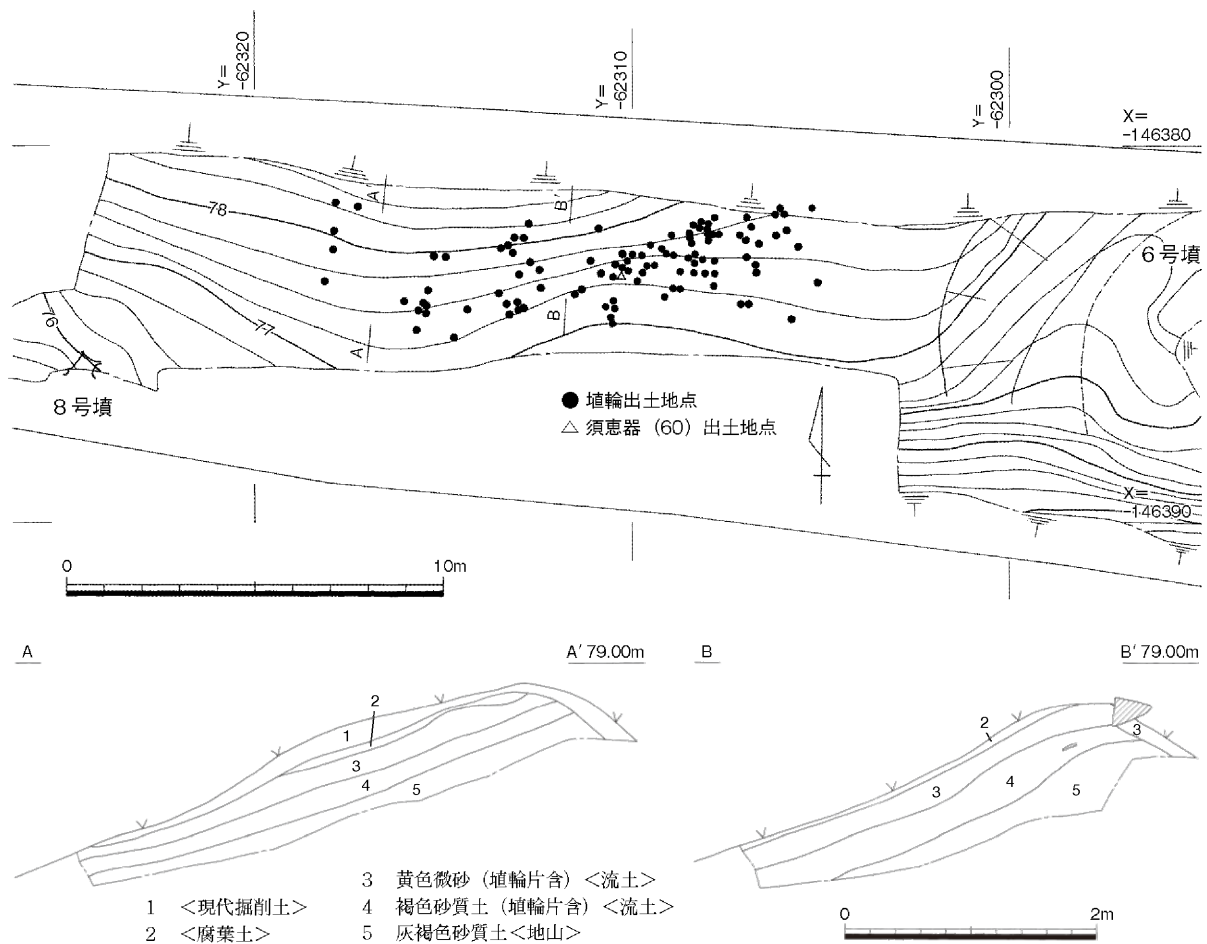


写真11 6号墳排水溝内の土器 (西から)

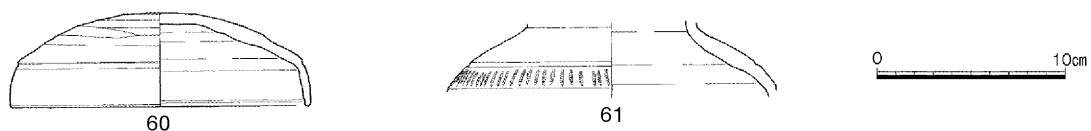
第5節 7号墳

1 出土遺物

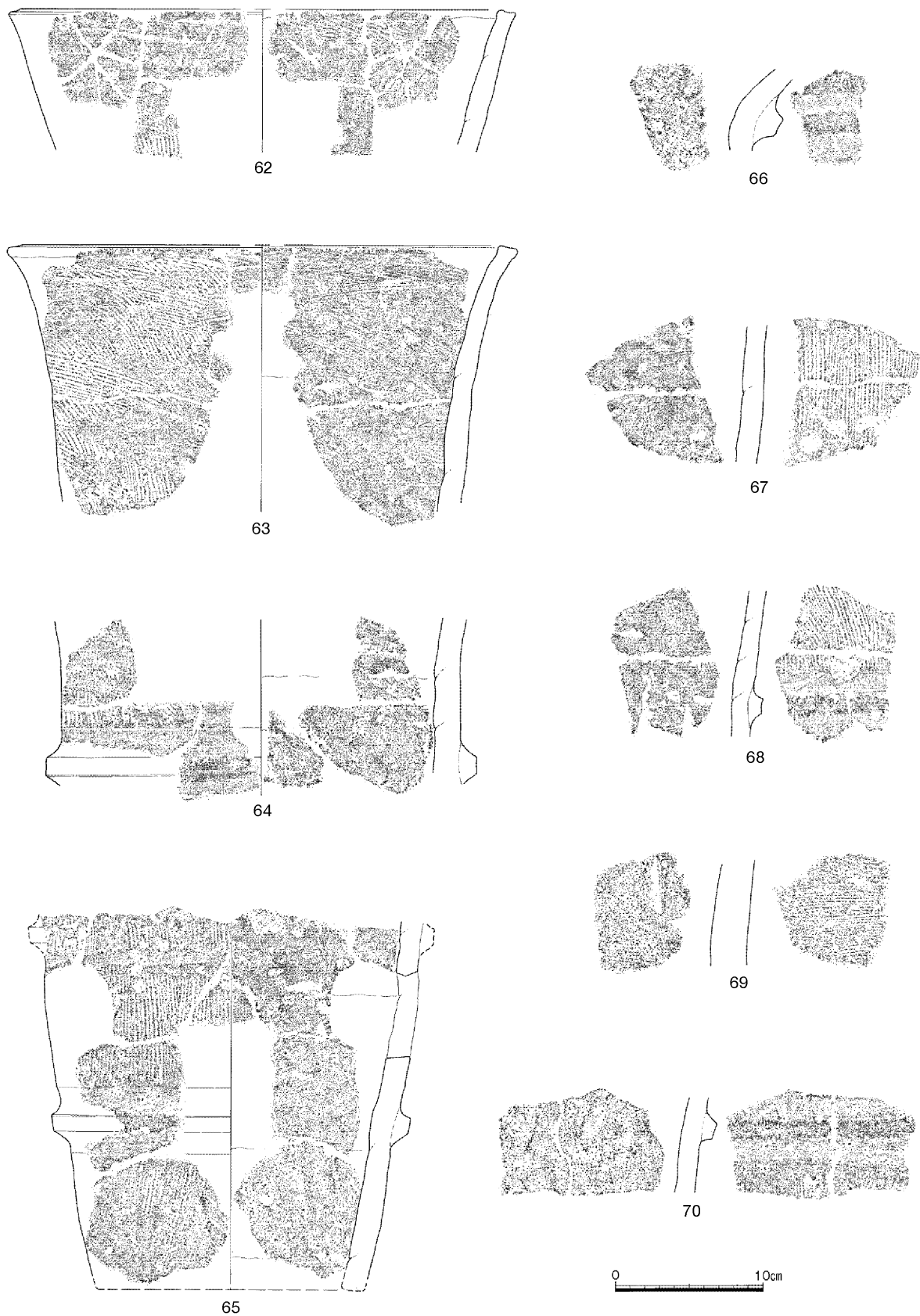
八紘6号墳の西側にある尾根上から多数の埴輪片と少量の須恵器片が出土した。出土埴輪片の総数は約500片で、接合するものは少なかった。出土範囲は、数点ほど5号墳と6号墳の間の谷底から出土したが、それ以外はほぼ尾根上に限定される。出土層位は、地山上の黄～褐色を呈する砂質土層で、流土層と推定される。出土状況も散乱したような状況で、自立した状態のものや、自立場所が特定されるような状況ではなかった。60の須恵器杯蓋は埴輪出土範囲のほぼ中心で検出された。10片ほどの細片が散らばって出土し、完形の約3分の1ほどに接合した。埴輪には円筒埴輪と朝顔形埴輪が認められる。62・63は口縁部で内外面ともに斜め方向の粗いハケメが施されている。63の外面にタガの剥



第40図 埴輪片出土位置と土層 (1/200・1/60)



第41図 出土須恵器 (1/4)



第42図 出土埴輪 1 (1/4)

落した痕跡は認められないので朝顔形埴輪の可能性もある。65は一番大きく接合されたもので、円形の透かしとその上下にタガが巡る。71・72は基底部片で、外面は、底部調整である斜め方向の板状工

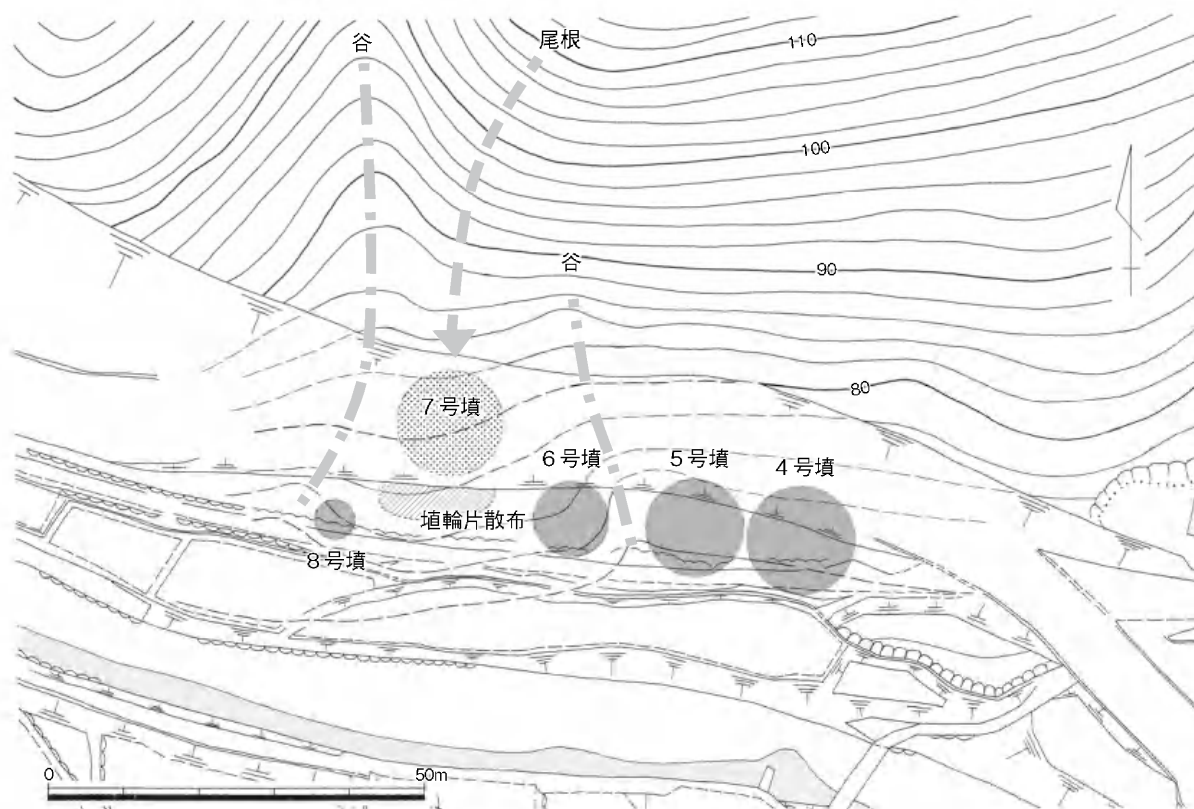


第43図 出土埴輪2 (1/4)

具による押圧が加えられ、内面は指ナデが粗く施され、接合痕跡が残る。69のみ横方向のハケメが見られるが、器壁が厚く形象埴輪の一部かもしれない。埴輪を概観すると、外面に施されたタテハケは条線の幅が狭いものもあるが、広いものがほとんどであり、ほぼすべて、色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含むことから、埴輪に時期差は特に認められないと考えられる。

2 小 結

出土した埴輪や須恵器は、上方に位置する古墳から流下したものと考えられる。第44図を見ると、5・6号墳間の谷と8号墳の西にある谷に挟まれて、小さな尾根が北から延びている。埴輪出土地のすぐ上方は、幅約18mにわたり、県道による削平があり、県道より上方は踏査したが古墳は見あたらなかったため、第44図の点描で示す位置に古墳があったと考えてほぼ間違いはない。この古墳を7号墳とする。7号墳は、共伴する須恵器の特徴からTK10型式の新相の時期に築造されたと推定される。

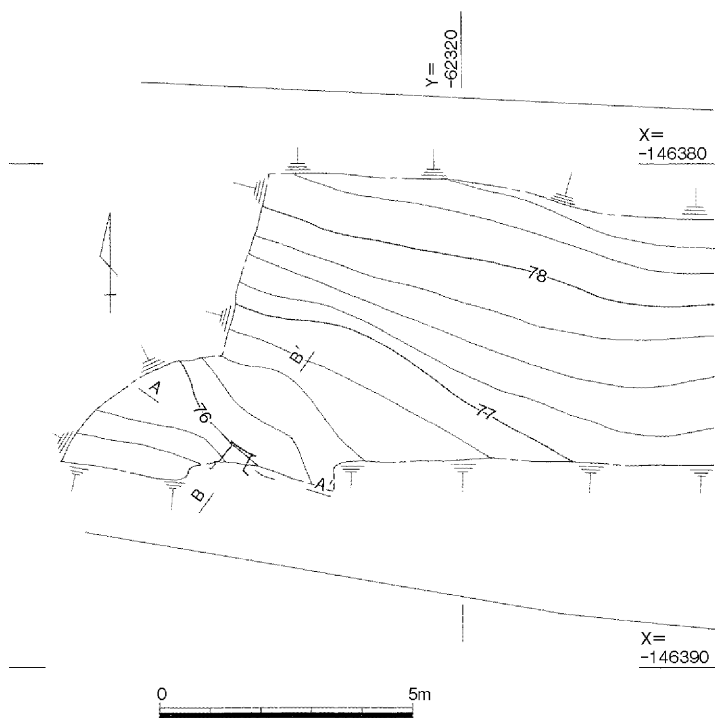


第44図 7号墳推定位置 (1/1,000)

第6節 8号墳

1 墳丘と横穴式石室

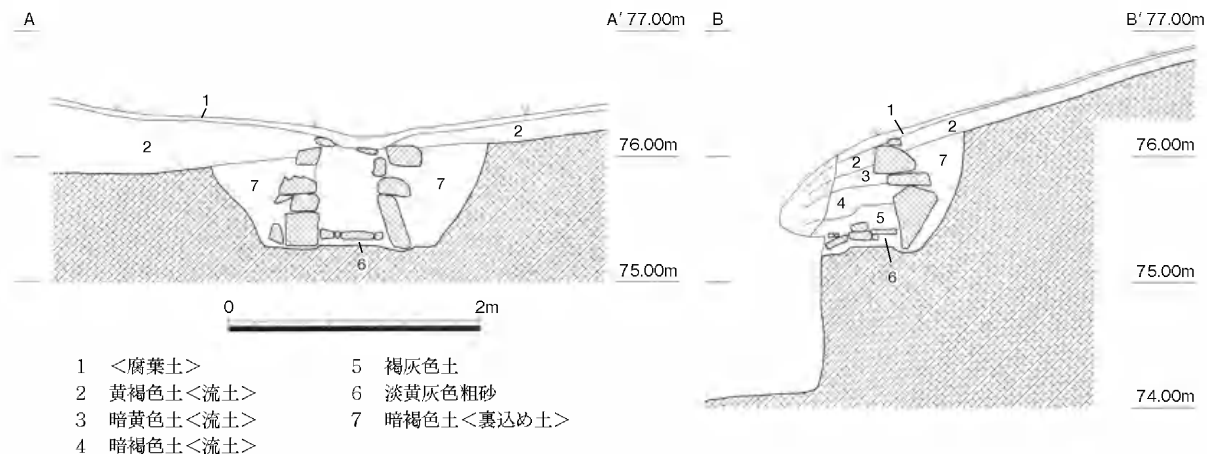
8号墳は調査区の西端に所在し、6号墳から約20m西側に位置している。市道側の崖面から検出され、市道との比高差は約1.5mを測る。墳丘はすでに流失しており、石室のみ残存していた。その石室も南側は道路等によって大規模に削平を受け、いわゆる「生きている石」は奥壁と両側壁の奥壁側のみであった。しかしながら、両側壁の開口部側は原位置をとどめないものの、その構造が想定可能な状態で確認された（第47図）。



第45図 8号墳 (1/150)

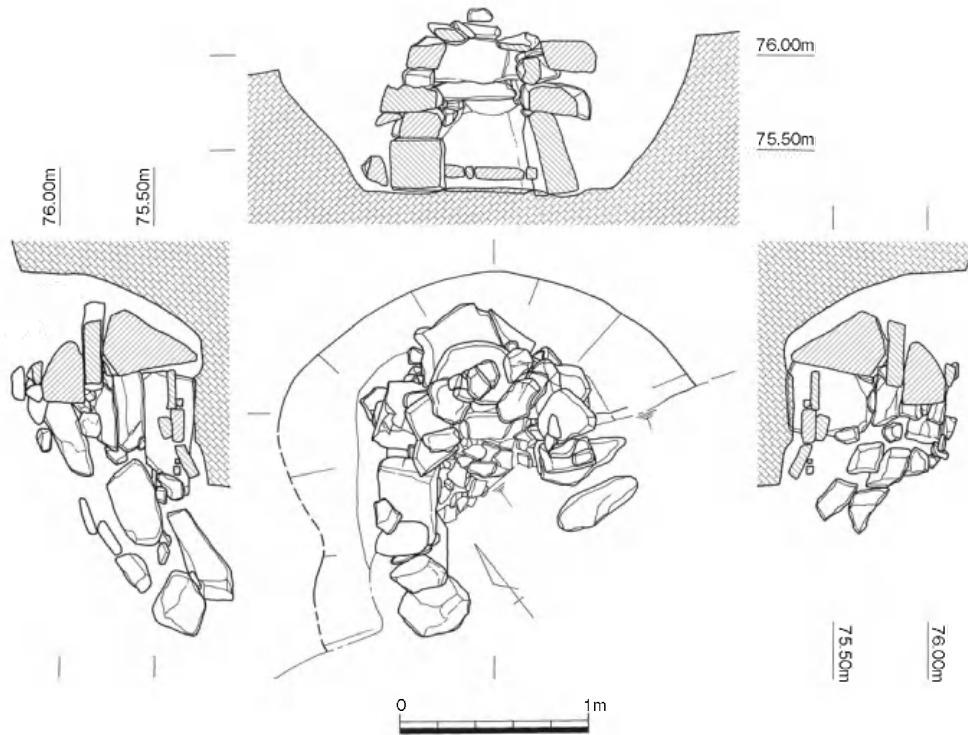
横穴式石室は、現存で幅2.2m、深さ80cmの掘り方を掘ってから構築されている。規模は、現存長1.4m、幅60cmを測る。奥壁は三段積みでやや内傾しており、基底石には60×50cm大の石を据えている。側壁は検出状況から推測するに、三～四段積みであり、横方向の目地が通っていたものと思われる。

石室床面には、南側が「いも穴」によりやや崩落気味であるものの、敷石が認められた。石室の主軸に40cm大の平滑な石を、その石と側壁との空隙は拳大の河原石を主体として置き、さらにそれらの間隙は小角礫を敷き詰めていた。奥壁から約25cm南

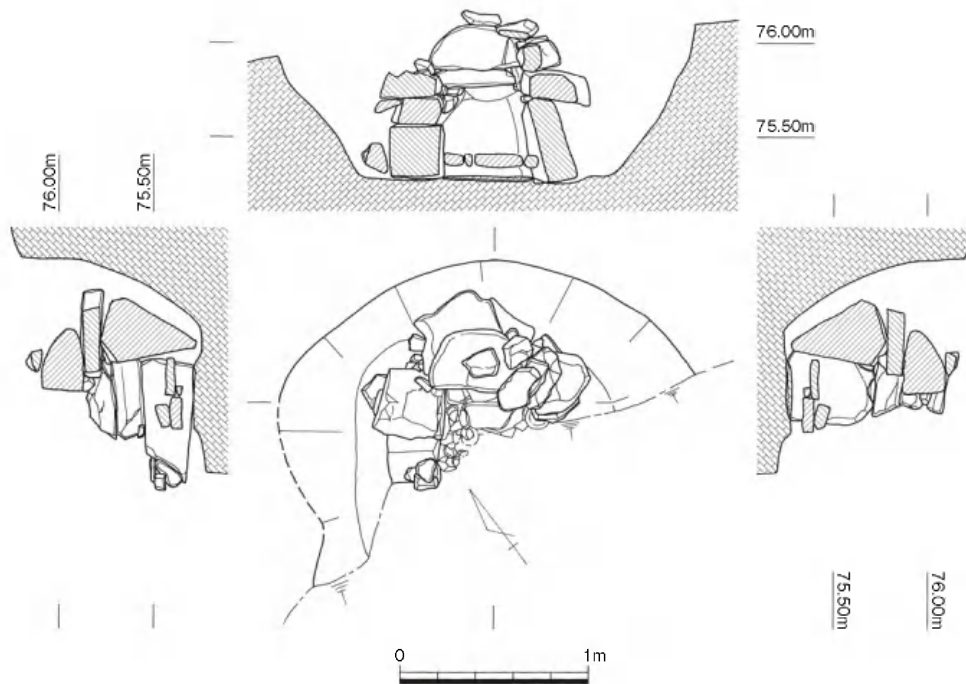


第46図 8号墳断面 (1/60)

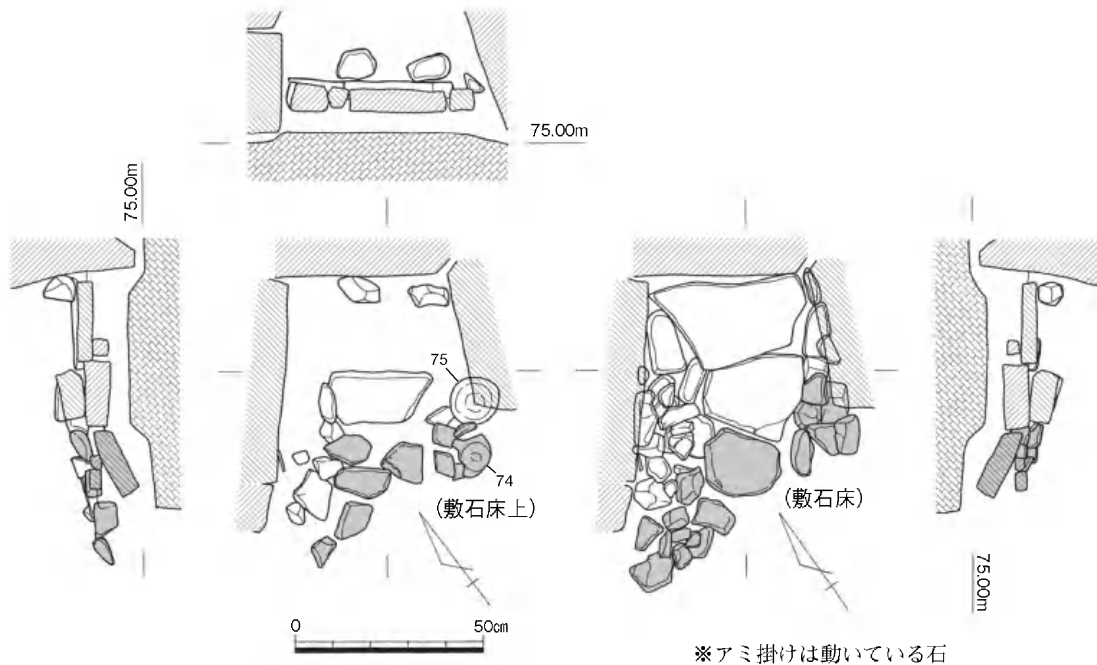
側で、敷石床上に約25×15cmの平石が検出された。この石は棺台と想定されるものの、石の南側にも10cm大の石が平石とほぼ同じ高さまで敷石床上に置かれていることから、ある段階の敷石床の可能性も考えられる。さらに、奥壁に接して敷石床上から10cm大の石が2個検出された。



第47図 8号墳石室〈検出状況〉(1/40)



第48図 8号墳石室〈原位置を保っている石材〉(1/40)



第49図 8号墳石室床 (1/20)

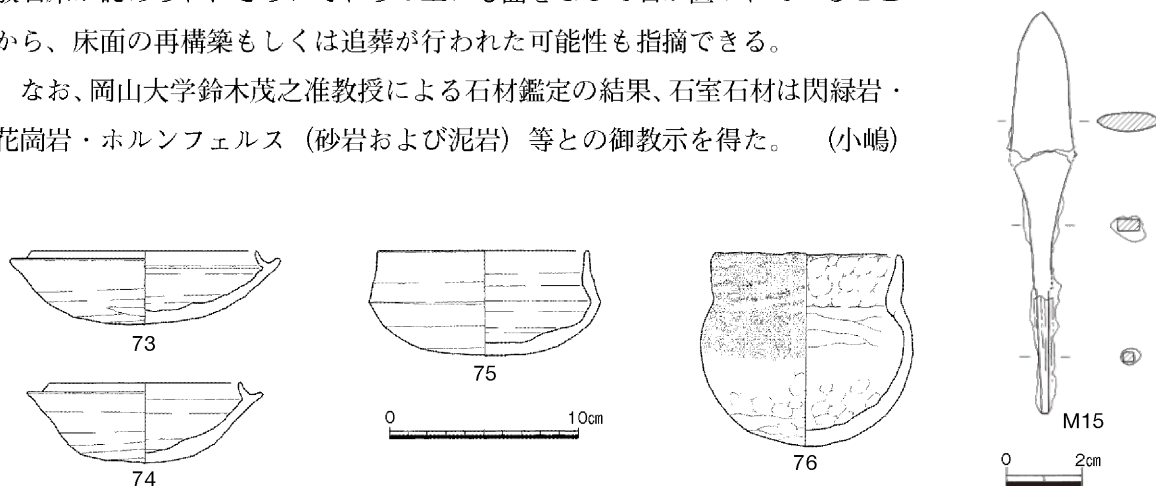
2 出土遺物

敷石床上からは74・75の須恵器杯身やM15の柳葉形鉄鏃が出土した。74・75はいずれも伏せられた状態で検出されている。73の須恵器杯身、76の土師器製塩土器はいずれも古墳南側の「いも穴」から出土した。73はほぼ完形品であり、76は復元完形である。出土位置等から、この古墳に副葬されていたものが落ち込んだものと考えられる。

3 小結

8号墳は墳丘形態が不明なものの、丁寧に構築された小規模な横穴式石室をもつ古墳であることが明らかになった。築造時期は、副葬されていた土器からTK209型式段階と思われる。石室床面には敷石床が認められ、さらにそれらの上にも面をなして石が置かれていることから、床面の再構築もしくは追葬が行われた可能性も指摘できる。

なお、岡山大学鈴木茂之准教授による石材鑑定の結果、石室石材は閃緑岩・花崗岩・ホルンフェルス（砂岩および泥岩）等との御教示を得た。（小嶋）

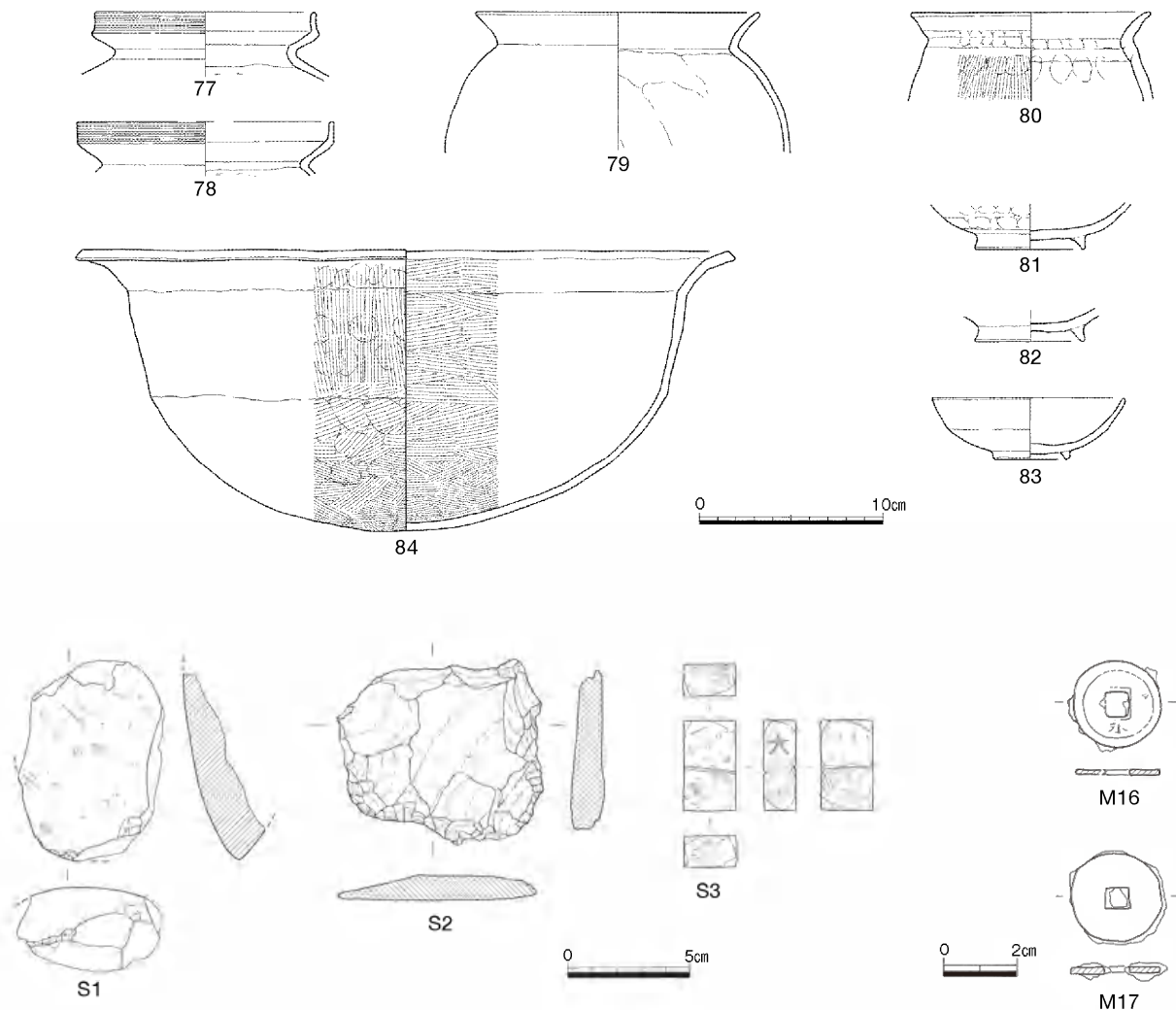


第50図 8号墳出土遺物 (1/4・1/2)

第7節 その他の遺物

八紘4～8号墳と直接は関係しないと考えられる遺物を集めた。77～80は古墳時代前期の土師器甕で、4号墳の東側から出土した。79・80は古墳時代後期の土師器甕で、79は5～6号墳間の谷の堆積土下層から、80は4号墳石室流入土中から出土した。81～84は鎌倉時代の土師器で、81・82・84は4号墳の石室内から、83は5号墳の石室内から出土した。石器では、5～6号墳間の谷の堆積土下層の砂層から、S1流紋岩製大型蛤刃石斧とS2サヌカイト製スクレイパーが出土した。S3は4・5号墳間の周溝部表土直下で検出された。流紋岩製の砥石と考えられるが、中央を切断しようとした痕跡があり、「大」の字の線刻がある。この「大」の字は通常書き順とは逆であることから、印鑑として再利用しようとしたものと推定される。ただ、うったての向きまでは逆になっていない。鉄銭M16は4号墳石室内から、M17は5号墳石室内から出土した。M16は「寛永通寶」と推定される。

弥生時代および古墳時代前期の遺物から周囲にその時代の集落が存在する可能性があるが、よくわからない。4・6号墳石室は鎌倉時代および近世以降に、目的は不明であるが、再利用されている。



第51図 その他の遺物 (1/4・1/2)

第4章 まとめ

八紘古墳群の築造年代と築造順序について

7号墳は出土須恵器からTK10型式新相の時期に、次いで8号墳がTK209型式の時期に築造されたと推定される。そして4～6号墳出土の須恵器の大半は、TK217型式の範疇と考えられることから、この3基は相前後して築造され、床面の状況などから幾度かの追葬が行われたと推定される。この築造順序を総社市教育委員会が発掘した1～3号墳の調査成果に当てはめると第52図のようになる。これは現存する西支群17基のうち僅か8基の調査成果なので、

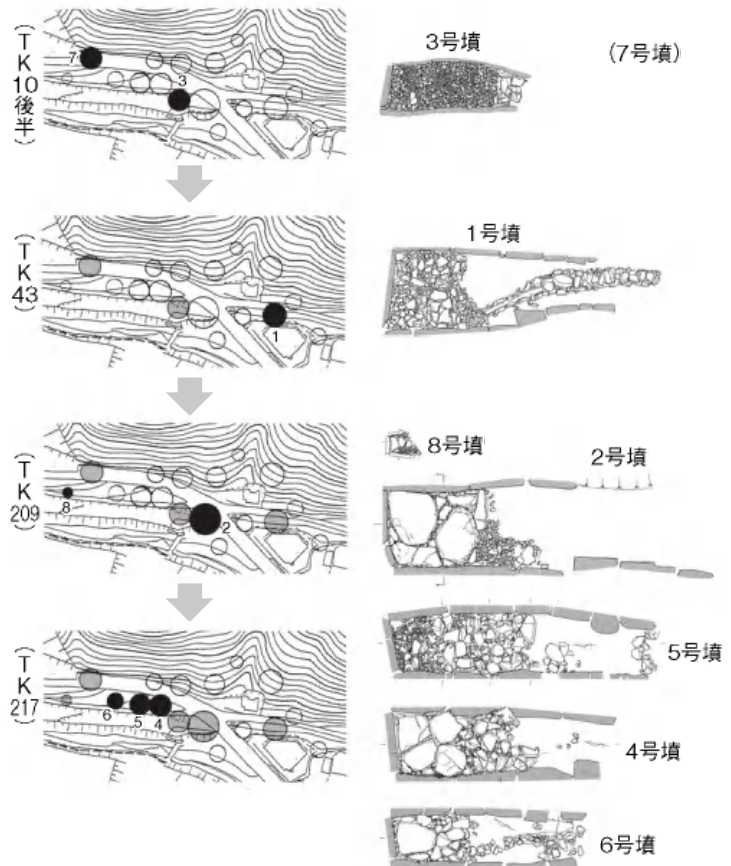
確実なことは言及できないが、3号墳と7号墳は西支群において最初に築かれた古墳で、中でも7号墳は埴輪をもつ点、尾根上に立地している点等から西支群造墓の端緒となった古墳と考えたい。

墳丘内の石積みについて

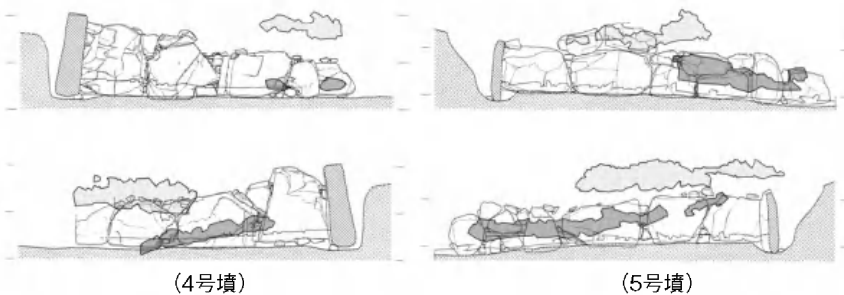
八紘4～6号墳の大きな特徴となるのが、墳丘内に構築された石積みの存在である。石積みの機能は盛土の流出を防止する土止めと考えられる。石積みは古墳の南側だけにあって北側にはないのは、北側は地山が高いので、特に土止めする必要がなかったと推定される。4～6号墳の石積みは、断面土層の観察から、天井石を置く前に石積みの構築が終了していると推定される。また、4・5号墳の石積みの高さは側壁最上面と一致していると考えられる(第53図)。

築造工程

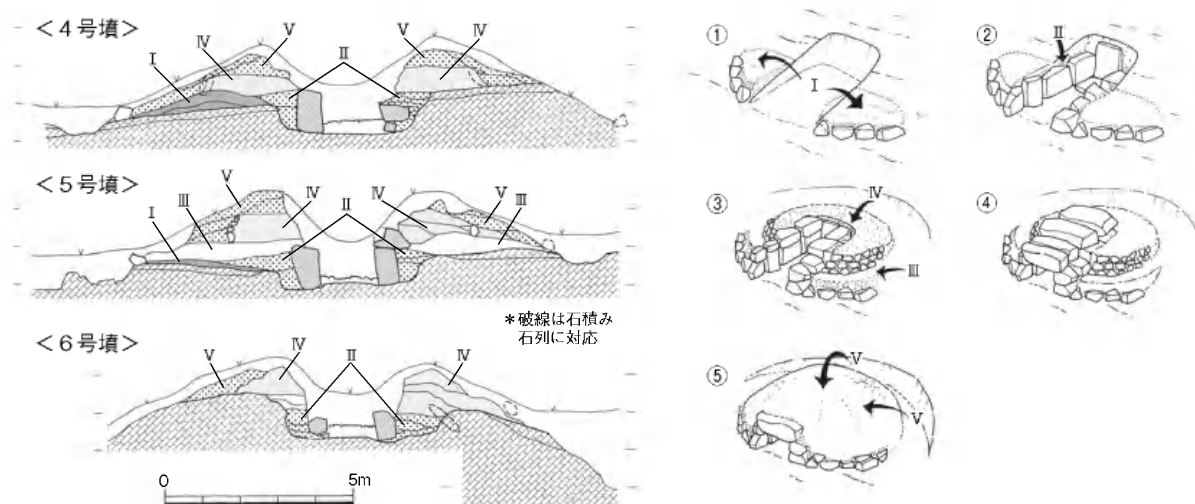
上記の特徴を加味しつつ、墳丘断面の土層から古墳の築造工程を復元すると第54図のようになる。①斜



第52図 八紘1～8号墳の築造時期と築造順序および敷石
(1/5,000・1/200)



第53図 側壁と石積み・石列の見通し図 (1/160)
薄い灰色：石積み
濃い灰色：石列



第54図 八紘4～6号墳の墳丘断面（1/200）と4・5号墳の構築工程（模式図）

面に石室の掘り方を掘り、その土（I層）を両サイドの斜面の低い方に盛る。墳端の石列はこのとき設置されていたと考えられる。②石室側壁一段目と奥壁、4・6号墳の場合は敷石床を設置し、掘り方と石材の隙間を埋める（II層）。4号墳では側壁の裏込めに炭や灰が部分的に用いられる。また、5号墳では石室のそばで焼土面と炭が見られた。③側壁二段目以上を構築ながら、裏側に土（IV層）を置きつつ、石積みを行う。5号墳では石積みをする前に土（III層）を盛り、その上面を水平に整えている。また、5号墳では、西側石積みの設置完了後、その前面に須恵器甕片が散乱する状況が生じ、破片はそのまま盛土内に取り込まれる。④天井石を設置する。⑤周溝の掘削土で全体に盛土（V層）し、墳丘を整える。

石室内の敷石について

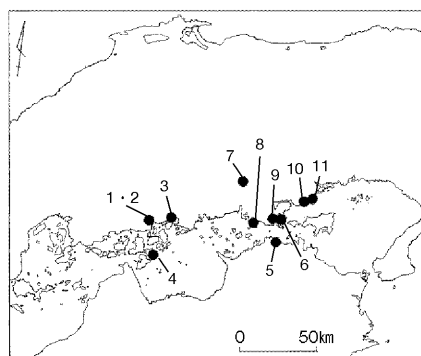
八紘1～8号墳の特徴の一つに床面の敷石が上げられる。これを大観すると、①築造時期の古い3号墳は円礫を使用し、②新しい時期の2・4・6号墳は大きな石材を用いる傾向が見られる。また、③2・4・6号墳では敷石床と土床に明瞭な段差をもち、4号墳では、敷石の中にも段差を設けている。敷石床の存在はこの地域に限定したことはないが、③の特徴は、現在のところ、近隣の「西団地内遺跡群」にしか確認されていない。新本川流域の特徴である可能性が高いと考える。

八紘古墳群の被葬者像について

八紘古墳群はおよそ6世紀後半から7世紀中頃まで古墳が築造され、7世紀の終わり頃まで追葬が行われたと推定される。今回の調査では鉄滓の出土を見なかったが、八紘古墳群は、指呼の間に広がる砂子遺跡の製鉄集団の墓地として造墓が開始されたと考えられる。砂子遺跡の周囲には、八紘古墳群以外に二反峠古墳群があり、これら後期群集墳のまとまりが砂子遺跡を取り囲むように立地する(第4図参照)。加えて、古墳時代前半期からの首長系列墳と考えられている砂子山古墳群がある。その中に横穴式石室をもつ全長30mの前方後円墳11・13号墳や、直径約26mの大円墳15号墳が確認されたことで、砂子山古墳群は、砂子遺跡の盛行期である古墳時代後期まで系譜をたどることができる。

製塩土器が出土した8号墳について

製塩土器が出土した中四国地方の6世紀後半以降の古墳を概観すると（第55図）、その所在は臨海部に限定され、製塩集団との関係が指摘されている古墳がほとんどである。このような状況は、この時期、臨海部の製塩集団に関係した人物の埋葬に際して、製塩土器（に入れた塩）を副葬することが



番号	所在地	名称	立地	時期	製塩土器*
1	広島県	みたち第3号墳	河口	MT85 ~ TK43	VI式
2	広島県	兜山北古墳	河口	後期	VI式
3	広島県	広塚2号墳	海浜	後期	VII式
4	愛媛県	岩ヶ峰古墳	海浜	TK209	VI式
5	香川県	横立山東麓1号墳	海浜	後期	VI式
6	香川県	喜兵衛島2・5・6・8・16号墳	海浜	TK10 ~ 217	VI式
7	岡山県	八紘8号墳	内陸	TK209	VI式
8	岡山県	琴海1号墳	海浜	TK209 ~ 217	VI式
9	岡山県	地藏山1号墳	海浜	TK43	IV・V・VI式
10	岡山県	槌ヶ谷1号墳	海浜	TK43 ~ 209	VI式
11	岡山県	乙佐塚古墳	海浜	TK10後半 ~ TK217	VI・VII式

*製塩土器の分類は大久保敬也「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』(下) 1992による

第55図 6世紀後半以降で製塩土器が出土した古墳

あったことを示している。八紘8号墳は、当時の海岸線と推定される倉敷市玉島や船穂町の平野北縁部から、直線距離で約10kmも離れている。このように内陸部にある古墳から製塩土器が出土するのは、非常にまれと言わねばならない。さらに留意されるのは、8号墳の横穴式石室の小ささと、時期の古さである。出土した須恵器の特徴はTK209型式と考えられるので、この小さな石室を横穴式石室の形骸化や単埋葬化に伴う小形化と捉えるには時期がやや古く思われる。8号墳とほぼ同時期に2号墳、より新しい時期に4～6号墳などの大きな横穴式石室が造られているのであるから、石室の大きさの違いは階層差と捉えることができよう。前述したように、八紘古墳群自体は砂子遺跡の製鉄集団の墓地として造墓が開始されたと考えられることから、8号墳の被葬者は、製鉄集団の成員であり、かつ、臨海部の製塩集団と関係の深い人物と想定される。

リーゼガング現象について

八紘4～6号墳の墳丘断面等で褐色で固い土層と淡色で柔らかい土層の互層が観察された。当初、これは版築状の盛土層であると考えていたが、地山・裏込め土・旧表土に関係なく、互層が延びていく事実が確認されたことから、この互層は自然現象と考えざるを得なくなった。倉敷自然史博物館地学担当学芸員の武智泰史さんに写真と土のサンプルを見ていただいた。この互層は「土の中に含まれていた鉄分が地下水や雨水の水分中にとけ込んで、リーゼガング現象によって、綿状に水酸化鉄として沈殿したもの」で、リーゼガング現象は「山でも沖積地でも起こる」現象と御教示いただいた。また、現地では岡山大学の新納泉先生に実見していただき、「自然現象に間違いはないだろう」という所見をいただいた。岡山理科大学の白石純先生には鉄分の分析をしていただき、「試料の制約のため、この結果を即リーゼガング現象の根拠にはできない」との注意付で「褐色土の方が1%鉄分が多い」という結果を得た。記して感謝の意を表します。



写真12 4号墳墳丘断面(南から)



写真13 4号墳墳丘断面拡大(南から)

註

- (1) 村上幸雄「板井砂奥古墳群」谷山雅彦「又五郎谷古墳群」『西団地内遺跡群』総社市教育委員会 1991
- (2) 武田恭彰「砂子遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』10・11 総社市教育委員会 2001
- (3) 間壁忠彦「総社市山田砂子山古墳群の墳形と石室」『倉敷考古学集報』第19号 倉敷考古館 1986
- (4) 『古墳時代の海人集団を再検討する』資料集第Ⅱ分冊 埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究会実行委員会 2007
『多々良製塩遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 1994

付載1 八紘7号墳出土埴輪ほかの胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. 分析目的

この胎土分析では、自然科学的分析手法を用いて、八紘7号墳出土埴輪および墳丘の土壌について、次に述べる事柄について検討した。

- (1) 八紘7号墳出土埴輪には、外面調整で3種類に分類されている。分類は①横ハケで器壁が厚いもの。②縦ハケでハケの幅が広いもの。③縦ハケでハケの幅が狭いもの。以上の外面調整の違いが胎土にもあるかどうか。また、周辺古墳（二反峠10号墳、立坂北1号墳）から出土した埴輪との胎土比較を行った。
- (2) 八紘古墳群の墳丘内部で観察された版築状の盛り土が、鉄分が沈着して縞状に形成されるリーゼ gangs 現象と考えられている。この鉄分が沈着している部分（赤褐色部分）とそうでない部分（白色部分）で鉄分量の違いがみられるかどうか。

2. 分析方法と試料

蛍光X線分析法では、胎土の成分(元素)量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分(元素)は、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・Pの10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成型機で約15^トの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

分析に供した試料は、第1表に示した埴輪、土壌の18点である。

3. 分析結果

【蛍光X線分析結果について】

(1)埴輪の分析

分析の結果、Ca・K・Ti・Feの成分に顕著な差があることから、第1図K-Ca、第2図Ti-Ca、第3図Ti-Feの散布図により胎土の差異を検討した。

第1図、第2図の散布図では八紘7号墳出土埴輪が、外面調整の違いで胎土に差があるかどうか検討した。その結果、外面調整で3種類に分類された埴輪は調整の違いで胎土に差はなかった。また、周辺古墳から出土した埴輪の比較では、二反峠10号墳、立坂北1号墳出土埴輪と比較した。その結果、第1・2・3図より、八紘7号と二反峠10号墳、立坂北1号墳のあいだで胎土に違いがみられた。つまり、八紘7号墳の埴輪にはCa量が多く含まれていた。また、第3図から二反峠10号墳には他の埴輪に比べFe量が多く含まれており、胎土が異なった。

(2)土壌の分析

第1・2・3図とも土壌分析では、赤褐色部分と白色部分では胎土に違いがあった。

またFe量の比較では、第3図から白色部分にくらべ赤褐色部分にFe量が1%ほど多く含まれていることがわかった。なお、土壌の分析試料は、同一個体を4分割して分析した。したがって散布図には赤褐色と白色の土壌は各4点ずつ分析している。

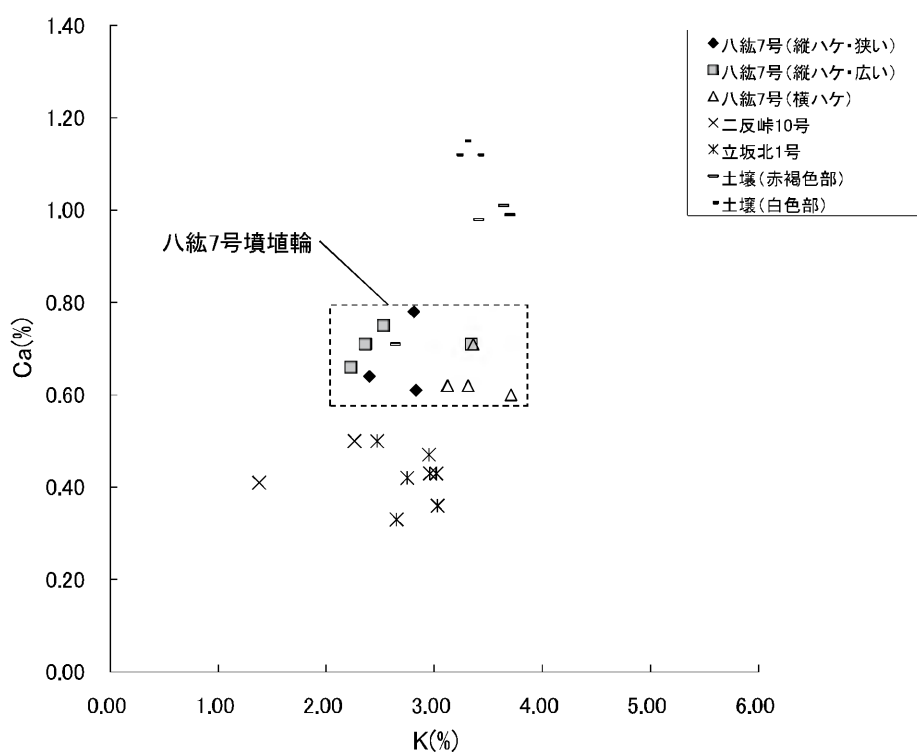
4. まとめ

八紘7号墳ほか出土埴輪および土壌分析の蛍光X線分析による胎土分析を実施したところ、次のようなことが推定された。

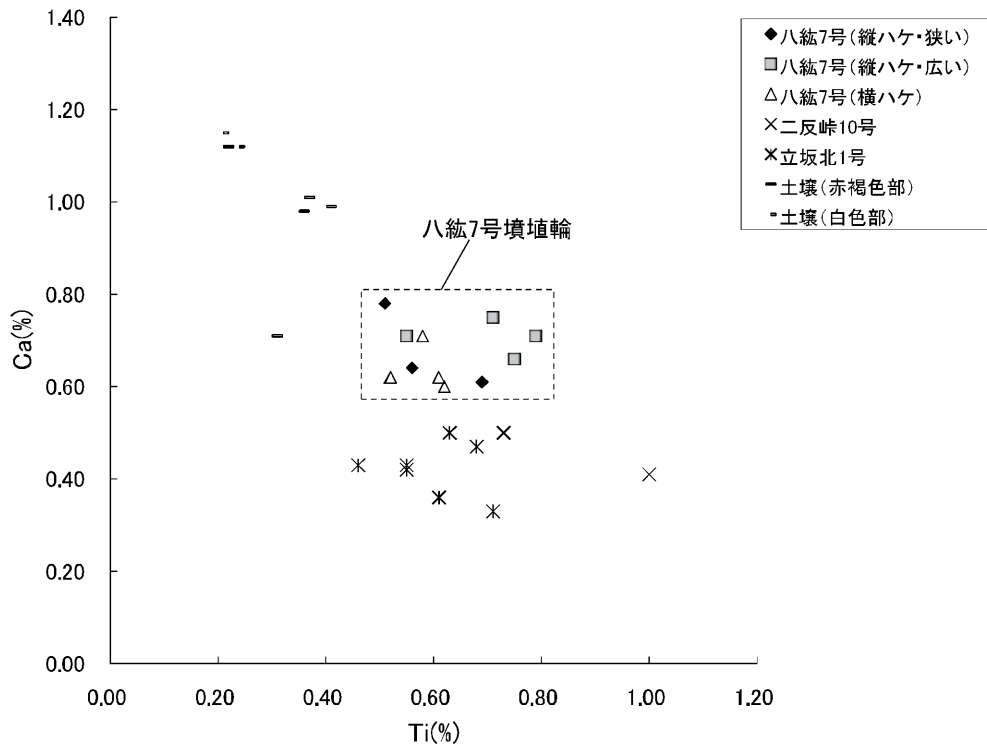
- (1) 八紘7号墳出土埴輪のうち外面調整が異なっても胎土分析には差異がみられなかった。また周辺古墳出土埴輪との比較では、二反峠10号墳、立坂北1号墳との比較を行った。すると、いずれの古墳出土の埴輪とも胎土が異なった。
- (2) 八紘古墳群の墳丘土壌の分析では、版築状土壌の赤褐色部と白色部の鉄分量の比較をした結果、赤褐色部分に鉄分がやや多く含まれていた。

以上、埴輪の分析では、各古墳で胎土が異なっており、分析結果のみから予想されることは、各古墳出土埴輪は、それぞれで生産されたことが想定される。しかし、分析点数が少ないこともあり、試料点数を増やせば胎土差がみられなくなることも十分考えられる。今後の課題である。

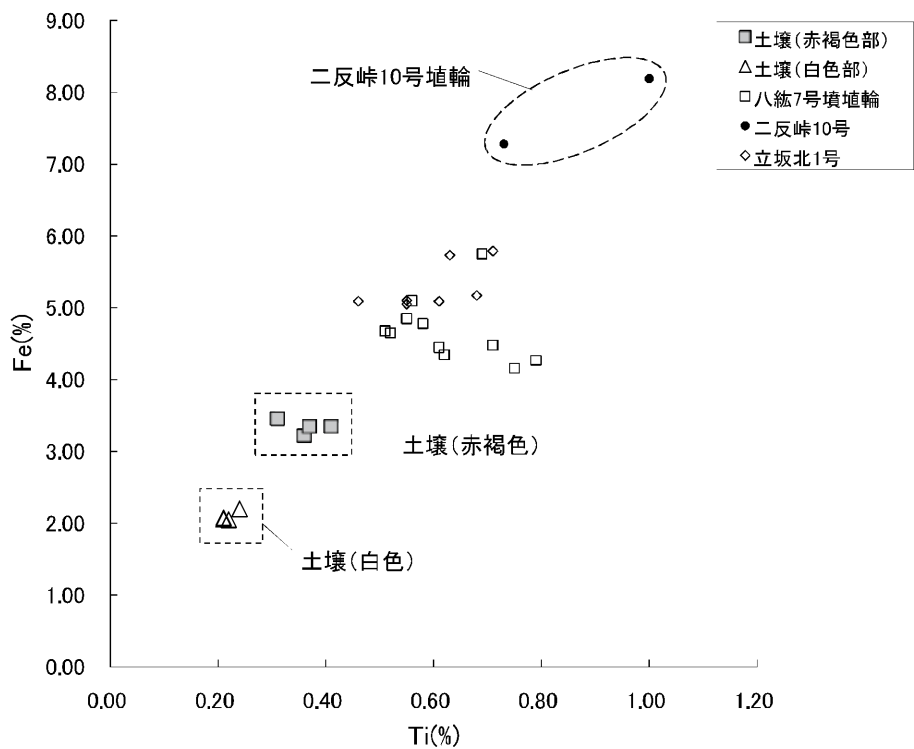
この分析の機会を与えていただいた、島崎東氏、物部茂樹氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはいろいろご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。



第1図 八紘7号墳出土埴輪ほかの胎土比較



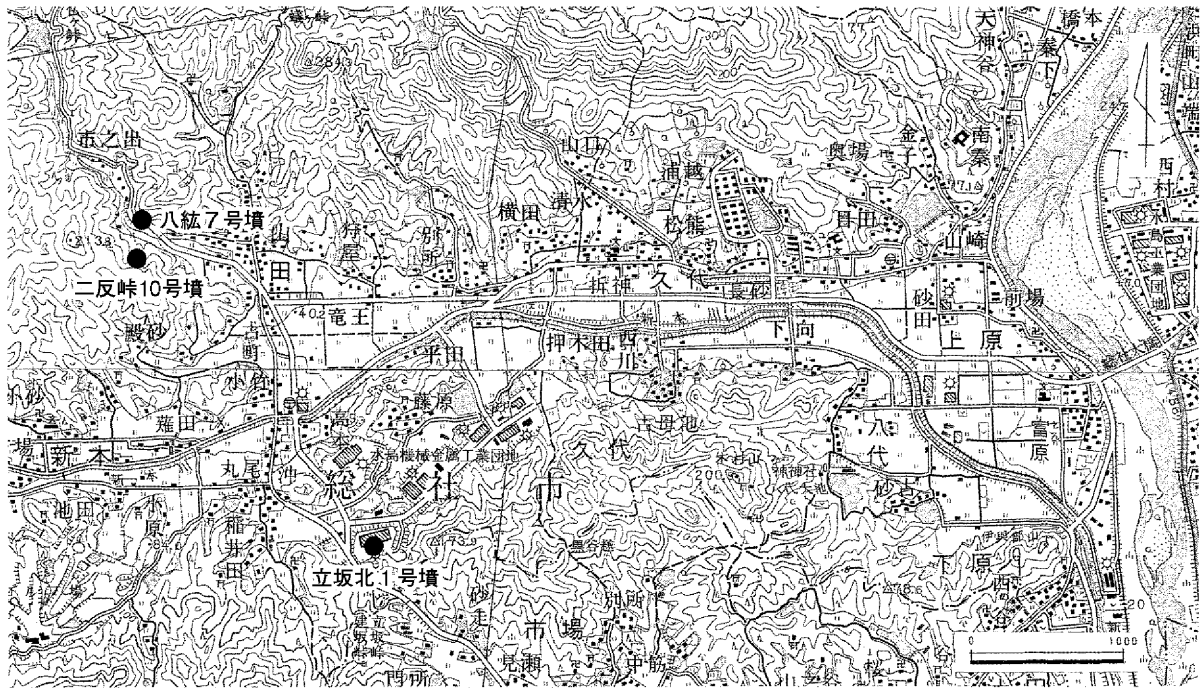
第2図 八紘7号墳出土埴輪ほかの胎土比較



第3図 八紘古墳群墳丘土壤ほかの胎土比較

第1表 八紘7号墳ほか出土埴輪の胎土分析一覧表 (%)

試料番号	遺跡名	器種	Si	Ti	A	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	特徴
1	八紘7号墳	埴輪	66.06	0.69	18.83	5.75	0.07	1.56	0.61	2.83	2.83	0.25	縦ハケ (狭い)
2	八紘7号墳	埴輪	67.79	0.51	20.57	4.68	0.06	1.38	0.78	0.25	2.81	0.61	縦ハケ (狭い)
3	八紘7号墳	埴輪	65.64	0.56	18.54	5.10	0.06	1.89	0.64	4.45	2.40	0.29	縦ハケ (狭い)
4	八紘7号墳	埴輪	67.02	0.79	21.98	4.27	0.04	1.52	0.71	0.47	2.36	0.32	縦ハケ (広い)
5	八紘7号墳	埴輪	65.61	0.71	20.74	4.48	0.08	1.57	0.75	2.69	2.53	0.30	縦ハケ (広い)
6	八紘7号墳	埴輪	64.47	0.75	20.31	4.16	0.06	1.76	0.66	4.86	2.23	0.28	縦ハケ (広い)
7	八紘7号墳	埴輪	65.73	0.55	18.79	4.85	0.06	1.49	0.71	3.69	3.34	0.25	縦ハケ (広い)
8	八紘7号墳	埴輪	65.52	0.62	18.69	4.35	0.04	1.65	0.60	4.06	3.71	0.21	横ハケ (器壁厚い)
9	八紘7号墳	埴輪	64.79	0.52	18.85	4.65	0.05	2.02	0.62	4.47	3.31	0.25	横ハケ (器壁厚い)
10	八紘7号墳	埴輪	66.72	0.61	18.60	4.45	0.05	1.54	0.62	3.46	3.12	0.28	横ハケ (器壁厚い)
11	八紘7号墳	埴輪	67.25	0.58	20.41	4.78	0.06	1.27	0.71	1.01	3.36	0.20	横ハケ (器壁厚い)
12	二反峠10号墳	埴輪	63.26	0.73	19.52	7.28	0.07	1.67	0.50	3.85	2.26	0.29	掲載番号1
13	二反峠10号墳	埴輪	60.46	1.00	22.58	8.19	0.09	1.85	0.41	3.48	1.38	0.19	掲載番号1
14	立坂北1号墳	埴輪	64.74	0.63	21.13	5.73	0.06	1.58	0.50	1.88	2.47	0.60	
15	立坂北1号墳	埴輪	63.72	0.71	19.87	5.79	0.08	1.57		4.38	2.65	0.33	
16	立坂北1号墳	埴輪	61.48	0.68	21.89	5.17	0.07	1.67	0.47	4.90	2.95	0.19	
17-1	地山(赤色部分)	土壌	68.31	0.41	17.34	3.35	0.05	1.69	0.99	3.25	3.70	0.33	
17-2	地山(赤色部分)	土壌	65.10	0.36	17.49	3.22	0.05	1.99	0.98	6.46	3.41	0.39	
17-3	地山(赤色部分)	土壌	67.75	0.31	17.81	3.46	0.03	3.41	0.71	3.17	2.64	0.25	
17-4	地山(赤色部分)	土壌	66.96	0.37	17.72	3.35	0.04	1.75	1.01	4.28	3.64	0.30	
18-1	地山(白色部分)	土壌	70.89	0.21	14.56	2.06	0.03	1.63	1.12	5.51	3.22	0.29	
18-2	地山(白色部分)	土壌	72.76	0.24	14.92	2.20	0.04	1.53	1.12	2.88	3.41	0.41	
18-3	地山(白色部分)	土壌	71.06	0.22	14.92	2.05	0.03	1.63	1.12	4.98	3.21	0.33	
18-4	地山(白色部分)	土壌	72.05	0.21	14.70	2.08	0.03	1.54	1.15	3.95	3.29	0.48	



第4図 分析埴輪の出土古墳 (1/50,000)

付載2 八紘古墳群の墳丘堆積物中の炭化材の年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、八紘古墳群4号墳側壁裏と5号墳焼土面上の盛土中から出土した炭化材2点である。

2. 分析方法

測定用の炭化材は、観察できる中で最も外側の年輪を含む2-3年分を採取した。炭化材に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。試料が木材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

また、年代測定対象とした炭化材については、年代測定値の評価を行う際の資料として樹種同定を合わせて実施しや。炭化材試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。

3. 結果

放射性炭素年代測定結果を表1、暦年較正結果を表2に示す。補正年代は、4号墳資料・5号墳資料ともに1500±30BPを示す。測定誤差を σ として計算させた暦年較正結果は、4号墳資料がcal AD 543-599、5号墳資料がcalAD 544-602を示す。なお、測定対象とした炭化材は、4号墳の炭化材がクリ、5号墳の炭化材がコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。以下に解剖学的特徴を示す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*) ブナ科

試料は樹芯付近で、1年分の組織が観察できる。環孔材で、孔圏部は1-4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

4. 考察

今回測定対象とした4号墳および5号墳の炭化材は、各々クリ、クヌギ節に同定された。樹種は異なっているが、いずれも二次林の代表的な樹種である。これらの炭化材の年代値は、極めて近似する値を示し、1500±30BPを示した。暦年較正では、6世紀後半～7世紀前半の年代を示している。八紘古墳群の時期については、発掘調査の結果、古墳時代終末の6世紀後半に築造、7世紀前半頃まで追葬されていたことが確認されている。この調査成果を踏まえると、今回年代測定対象とした炭化材は、古墳築造時に取り込まれたものであることが推定される。

引用文献

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) ,2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修) ,海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

表1 放射性炭素年代測定結果

遺構名	位置	状態・種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
4号墳	側壁裏盛土中	炭化材 クリ	1500±30	-26.87±0.56	1530±30	IAAA-91400
5号墳	焼土面上盛土中	炭化材 クヌギ節	1500±30	-26.36±0.41	1520±30	IAAA-91401

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

遺構名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.	
		誤差	cal AD		cal BP		相対比
4号墳	1502±30	σ	cal AD 543	- cal AD 599	cal BP 1407 - 1351	1.000	IAAA-91400
		2σ	cal AD 439	- cal AD 485	cal BP 1,511 - 1,465	0.090	
			cal AD 532	- cal AD 637	cal BP 1,418 - 1,313	0.910	
5号墳	1498±32	σ	cal AD 544	- cal AD 602	cal BP 1,406 - 1,348	1.000	IAAA-91401
		2σ	cal AD 440	- cal AD 485	cal BP 1,510 - 1,465	0.082	
			cal AD 532	- cal AD 641	cal BP 1,418 - 1,309	0.918	

- 1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

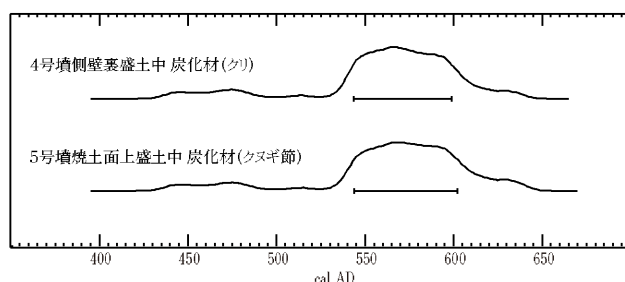


図1 暦年較正結果

遺物観察表

- ・〈数字〉は復元値、(数字)は残存値、－は計測不能を示す。
- ・色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)による。
- ・鉄鏝の測定部位・各部名称は右図のとおり。

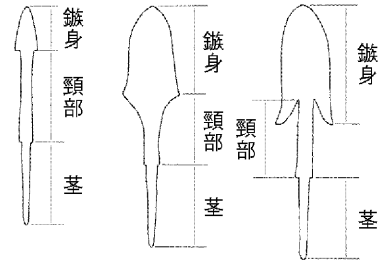


表3 土器

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)				残存状況	色調	備考	実測番号
					口径	胴部最大径	底径	器高				
1	二反峠10号墳	前方部	埴輪	円筒	—	—	(17.2)	(12.6)		2.5YR5/6 (明赤褐)		84
2	八絨19号墳	石室内	須恵器	杯蓋	14.3	—	—	4.5	完形	N6/0 (灰)	小西幸一氏寄贈	70
3	八絨4号墳	石室内	須恵器	杯蓋	11.2	—	—	3.4	完形	2.5Y8/1 (灰白)	ヘラ記号「×」	8
4	八絨4号墳	石室内	須恵器	杯身?	8.8	—	—	3.1	ほぼ完形	2.5Y6/1 (黄灰)		7
5	八絨4号墳	石室内	須恵器	高杯	9.1	—	7.9	8.2	ほぼ完形	2.5Y7/1 (灰白)		10
6	八絨4号墳	石室内	須恵器	高杯	14.0	—	9.9	8.9	ほぼ完形	2.5Y7/1 (灰白)		9
7	八絨4号墳	石室内	須恵器	平瓶	—	17.7	—	(14.1)	ほぼ完形	N6/0 (灰)		11
8	八絨4号墳	石室内	須恵器	平瓶	5.9	15.1	—	13.5	ほぼ完形	2.5Y7/1 (灰白)		12
9	八絨4号墳	石室内	土師器	高杯か杯	(10.3)	—	—	(2.0)		10YR7/4 (にぶい黄橙)		25
10	八絨4号墳	石室内	須恵器	杯蓋	19.1	—	—	4.4	ほぼ完形	外N6/0 (灰) 2.5Y7/1 (灰白) 内・断2.5Y7/1 (灰白)		21
11	八絨4号墳	石室内	須恵器	杯身?	(18.0)	—	—	(3.95)		N6/0 (灰)		22
12	八絨4号墳	石室内	須恵器	杯身	8.6	—	6.1	3.5	ほぼ完形	外2.5Y7/1 (灰白) 内・断2.5Y7/2 (灰黄)		17
13	八絨4号墳	石室内	須恵器	高杯	8.25	—	7.3	8.35	ほぼ完形	N6/0 (灰)		15
14	八絨4号墳	石室内	土師器	杯	(12.0)	—	—	3.2		7.5YR6/4 (にぶい橙)	畿内系土師器	18
15	八絨4号墳	石室内	土師器	杯	15.8	—	8.5	4.3	ほぼ完形	2.5YR6/6 (橙)	畿内系土師器	19
16	八絨4号墳	石室内	須恵器	杯身	9.2	—	—	3.2	完形	外5Y7/1 (灰白) 内・断N6/0 (灰)		16
17	八絨4号墳	東側面	須恵器	提瓶	—	—	—	(5.7)		外・内N5/0 (灰) 断2.5YR5/1 (赤灰)		26
18	八絨4号墳	東斜面	須恵器	高杯	—	—	—	(2.8)		2.5Y7/1 (灰白)		13
19	八絨4号墳	東斜面	須恵器	高杯	—	—	—	(2.0)		2.5Y7/3 (浅黄)		14
20	八絨5号墳	西側石列	須恵器	甕	(36.0)	—	—	(16.0)		外・内N5/0 (灰) 断7.5YR5/1 (褐灰)		4748
21	八絨5号墳	盛土中	須恵器	甕	—	—	—	(10.4)		外N5/0 (灰) 内・断N6/0 (灰)		40
22	八絨5号墳	盛土中	須恵器	甕	—	—	—	(14.5)		N6/0 (灰)		41
23	八絨5号墳	周溝	須恵器	甕	—	—	—	(14.1)		N5/0 (灰)	車輪文	85
24	八絨5号墳	盛土中	須恵器	甕	—	—	—	(9.7)		N6/0 (灰)	車輪文	42
25	八絨5号墳	盛土中	須恵器	甕	—	—	—	—		外N5/0 (灰) 7.5YR5/2 (灰褐) 内・断N5/0 (灰)	車輪文	39
26	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯蓋?	11.1	—	—	4.0	ほぼ完形	N6/0 (灰)	ヘラ記号「×」	43
27	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯蓋	11.0	—	—	(4.0)		N6/0 (灰)		52
28	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯蓋	10.9	—	—	3.9		N6/0 (灰)		53
29	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯蓋	10.6	—	—	3.8	完形	N6/0 (灰)		4
30	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯身	(10.3)	—	—	(3.7)		N6/0 (灰)		44
31	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯身	14.5	—	9.8	4.4	ほぼ完形	外・内10YR5/1 (褐灰) 断10YR7/2 (にぶい黄橙)		54
32	八絨5号墳	石室内	須恵器	杯身?	8.7	—	—	4.1	ほぼ完形	N6/0 (灰)		55
33	八絨5号墳	石室内	須恵器	椀の台?	—	—	(7.0)	(3.5)		N5/0 (灰)		45
34	八絨5号墳	石室内	須恵器	高杯	(10.4)	—	—	(3.5)		外・内N5/0 (灰) 断10YR7/2 (にぶい黄橙)		49
35	八絨5号墳	石室内	須恵器	高杯	9.7	—	7.0	8.7	ほぼ完形	N4/0 (灰)		56
36	八絨5号墳	石室内	須恵器	ハンウ	(10.9)	—	—	(6.2)		N5/0 (灰)		46
37	八絨5号墳	石室内	須恵器	ハンウ	10.2	9.2	—	13.65	ほぼ完形	N6/0 (灰)		1
38	八絨5号墳	石室内	須恵器	ハンウ	10.0	9.7	—	13.7	完形	N6/0 (灰)		2
39	八絨5号墳	石室内	須恵器	短頸壺	—	19.0	—	(13.5)	ほぼ完形	N6/0 (灰)		3
40	八絨5号墳	石室内	須恵器	平瓶?	(5.5)	—	—	(3.4)		5Y6/1 (灰)		50
41	八絨5号墳	石室内	須恵器	平瓶?	(6.4)	—	—	(2.8)		N5/0 (灰)		51
42	八絨5号墳	石室内	須恵器	平瓶	4.85	14.8	—	12.8	ほぼ完形	2.5Y7/2 (灰黄)		6
43	八絨5号墳	石室内	須恵器	把手付椀	11.1	11.2	—	7.9	ほぼ完形	N5/0 (灰)		5
44	八絨5号墳	石室内	土師器	瓶?	—	—	—	(5.0)		10YR7/4 (にぶい黄橙)		66
45	八絨5号墳	石室内	土師器	高杯	12.4	—	8.4	9.4	ほぼ完形	2.5YR6/6 (橙)		62
46	八絨5号墳	石室内	土師器	高杯	14.1	—	10.3	10.5	ほぼ完形	7.5YR7/6 (橙) 一部2.5YR6/8 (橙)		57

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)				残存状況	色調	備考	実測番号
					口径	胴部最大径	底径	器高				
47	八絛5号墳	石室内	土師器	高杯	13.0	—	—	(5.8)		外2.5YR6/6 (橙) 内・断7.5YR6/6 (橙)		63
48	八絛5号墳	石室内	土師器	高杯	(12.5)	—	7.9	9.35	ほぼ完形	5YR7/6 (橙)		60
49	八絛5号墳	石室内	土師器	高杯	—	—	9.2	(9.7)		5YR6/6 (橙)		59
50	八絛5号墳	石室内	土師器	高杯	—	—	10.3	(4.5)		5YR6/6 (橙)		64
51	八絛5号墳	石室内	土師器	高杯	7.0	—	7.6	6.0	ほぼ完形	外5YR7/8 (橙) 内・断5YR5/6 (明赤褐)		58
52	八絛5号墳	石室内	土師器	高杯	(8.0)	—	6.7	7.0		5YR6/6 (橙)		61
53	八絛5号墳	石室内	土師器	杯	(11.9)	—	—	3.7		5YR6/8 (橙)		68
54	八絛5号墳	石室内	土師器	杯	(11.3)	—	—	2.9		5YR6/8 (橙)		67
55	八絛6号墳	石室内	須恵器	杯蓋	7.45	—	—	3.5	完形	N6/0 (灰)		37
56	八絛6号墳	石室内	須恵器	杯身	8.85	—	4.6	3.6	完形	N6/0 (灰)		38
57	八絛6号墳	石室内	須恵器	杯蓋	10.8	—	—	4.4	ほぼ完形	5Y7/1 (灰白)	ヘラ記号「×」	36
58	八絛6号墳	石室内	須恵器	高杯	9.9	—	9.0	10.75	ほぼ完形	N6/0 (灰)		34
59	八絛6号墳	石室内	須恵器	ハソウ	10.6	9.1	—	13.9	完形	N7/0 (灰白)	内部に孔土残存	35
60	八絛7号墳	流土中	須恵器	杯蓋	(15.6)	—	—	5.0		N6/0 (灰)		71
61	八絛7号墳	流土中	須恵器	短頸壺	—	—	—	(4.0)		N6/0 (灰)		72
62	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	(35.4)	—	—	(9.6)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		74
63	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	(35.2)	—	—	(18.0)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		73
64	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(12.1)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		81
65	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(25.9)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		75
66	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(5.7)		7.5YR6/4 (にぶい橙)	朝顔形	76
67	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(9.3)		5YR6/6 (橙)		79
68	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(9.8)		5YR6/6 (橙)		78
69	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(7.3)		5YR6/6 (橙)		77
70	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(6.4)		5YR6/6 (橙)		80
71	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	—	(12.7)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		82
72	八絛7号墳	流土中	埴輪	円筒	—	—	(22.7)	(9.2)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		83
73	八絛8号墳	(石室内)	須恵器	杯身	11.8	—	—	3.9	ほぼ完形	外・内5Y5/1 (灰) 断2.5Y4/1 (黄灰)		31
74	八絛8号墳	石室内	須恵器	杯身	10.0	—	—	4.2	ほぼ完形	外・内N5/0 (灰) 断2.5Y6/2 (灰黄)		30
75	八絛8号墳	石室内	須恵器	杯身?	11.1	12.2	—	5.6	ほぼ完形	10YR6/2 (灰黄褐)		32
76	八絛8号墳	(石室内)	土師器	鉢	9.7	11.2	—	10.2	ほぼ完形	10YR6/2 (灰黄褐) 一部5YR6/4 (にぶい橙)	製塩土器	33
77	八絛4号墳	東斜面	土師器	甕	(11.8)	—	—	(3.8)		外・内7.5YR6/6 (橙) 断N2/0 (黒)		27
78	八絛4号墳	東斜面	土師器	甕	(15.7)	—	—	(3.0)		7.5YR6/4 (にぶい橙)		28
79	八絛5・6号墳間	谷下層	土師器	甕	(15.4)	—	—	(7.7)		外・内10YR7/3 (にぶい橙) 断10YR7/3 (にぶい橙) N2/0 (黒)		65
80	八絛4号墳	石室内	土師器	甕	(12.7)	—	—	(4.9)		10YR6/6 (明黄褐)		24
81	八絛4号墳	石室内	土師器	椀	—	—	5.8	(2.5)		10YR7/3 (にぶい黄橙)	早島式土器椀	23
82	八絛4号墳	石室内	土師器	椀	—	—	5.9	(1.8)		外7.5YR6/7 (橙) 内10YR8/4 (浅黄橙) 断10YR6/3 (にぶい黄橙)	早島式土器椀	20
83	八絛5号墳	石室内	土師器	椀	10.3	—	3.9	3.4	完形	7.5YR7/4 (にぶい橙)	早島式土器椀	69
84	八絛4号墳	石室内	土師器	鍋	35.2	—	—	15.3	ほぼ完形	10YR7/4 (にぶい黄橙)		29

表4 金属製品 (鍔)

掲載番号	遺構名・層位		計測値 (mm)					重量 (g)	分類	材質	残存状況	備考	実測番号
			全長	鍔身長	鍔身幅	頸部長	茎長						
M1	八絛4号墳	石室内	(24)	(24)	(10)	—	—	0.72	長頸柳葉	鉄	欠損		M18
M2	八絛4号墳	石室内	141	66	26	16	59	17.64	柳葉	鉄	完形		M1
M15	八絛8号墳	石室内	(107)	(39)	(18)	(35)	33	10.68	柳葉	鉄	ほぼ完形		M17

表5 金属製品 (刀子・釘・耳環ほか)

掲載番号	遺構名・層位		器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	残存状況	備考	実測番号
				長さ	幅	厚さ					
M3	八絛5号墳	石室内	耳環	23	24	7.5	12.50	銅		鍍金	M13
M4	八絛5号墳	石室内	耳環	22.5	24	7.5	9.89	銅		鍍金	M14
M5	八絛5号墳	石室内	板状	(35)	(36)	1	4.30	鉄			M10
M6	八絛5号墳	石室内	板状	(34)	(28)	1	3.97	鉄			M11
M7	八絛5号墳	石室内	釘	68	11	5	11.63	鉄			M8
M8	八絛5号墳	石室内	釘	86	12	6.5	12.75	鉄			M3
M9	八絛5号墳	石室内	釘	(33)	(5)	(5.5)	10.23	鉄		木質付着	M6
M10	八絛5号墳	石室内	釘	70.5	8	5		鉄			M7
M11	八絛5号墳	石室内	釘	84.5	11.3	9	15.58	鉄		木質付着	M5
M12	八絛5号墳	石室内	釘	(43)	10	5	3.85	鉄			M4
M13	八絛5号墳	石室内	釘	(67)	(8)	(7)	7.81	鉄			M9
M14	八絛6号墳	石室内	刀子	(80)	12.5	3	11.90	鉄			M15
M16	八絛4号墳	石室内	銭	24.5	24.5	1.2	3.31	鉄		寛永通宝	M2
M17	八絛5号墳	石室内	銭	23.5	24.0	2	3.81	鉄			M12



1 調査前（北西から）



2 調査前（南東から）



1 4号墳調査前（南から）



2 4号墳（南から）



3 4号墳西側石列（南西から）



4 4号墳西側石列（南から）



5 4号墳西側石積み（南から）



6 4号墳東側石積み（南から）



4号墳石室（南から）



1 4号墳西側側壁（東から）



2 4号墳東側側壁（西から）



3 4号墳古段階の敷石（南から）



4 4号墳中段階の土器（南西から）



5 4号墳古段階の土器（南東から）



1 5号墳調査前（南から）



2 5号墳（南から）



3 5号墳西側石列（南西から）



4 5号墳東側石積み断面（西から）



5 5号墳西側石積み（南西から）



6 5号墳東側石積み（南東から）



5号墳石室（南から）



1 5号墳西側側壁（南東から）



2 5号墳東側側壁（南西から）



3 5号墳袖石の裏側（東から）



4 5号墳土器出土状況（南から）



5 5号墳石室（北から）



1 6号墳調査前（南東から）

2 6号墳（南東から）



3 6号墳石列と貼石



6号墳石室（南東から）



1 6号墳東側石積み (南東から)



2 6号墳敷石 (南から)



3 6号墳敷石下の状況 (南東から)



4 6号墳排水溝 (北西から)



5 6号墳石室 (北から)



1 埴輪散布地 (西から)



2 埴輪散布地土層 (南東から)



3 埴輪出土状況 (南東から)



4 8号墳調査前 (南東から)



5 8号墳検出状況 (南西から)



1 8号墳石室検出状況（南から）



2 8号墳石室検出状況（西から）



3 8号墳床面（南西から）



4 8号墳石室奥壁背面（北東から）



5 8号墳石室（南西から）



1 8号墳西側側壁（南から）



2 8号墳東側側壁（西から）



3 8号墳石室掘り方（南西から）



4 8号墳実測風景（南から）



5 4～6号墳盛土除去後（東から）

图版 14



4号墳出土土器



5号墳出土土器①

图版 16



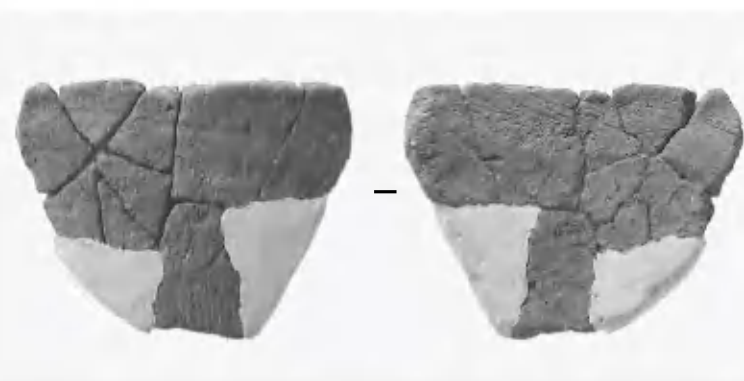
1 5号墳出土土器②



2 6号墳出土土器



60



62



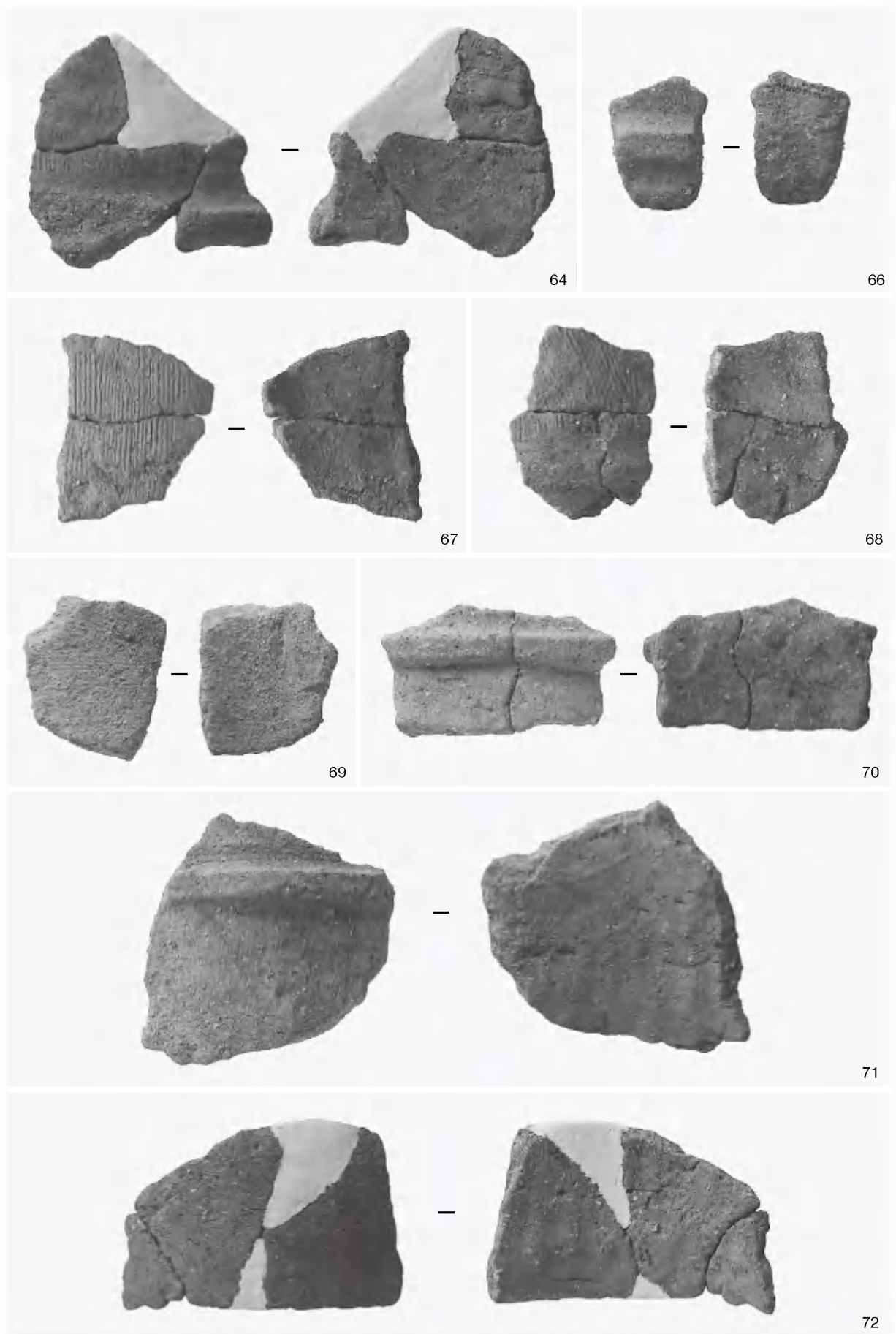
63



65

7号墳出土土器①

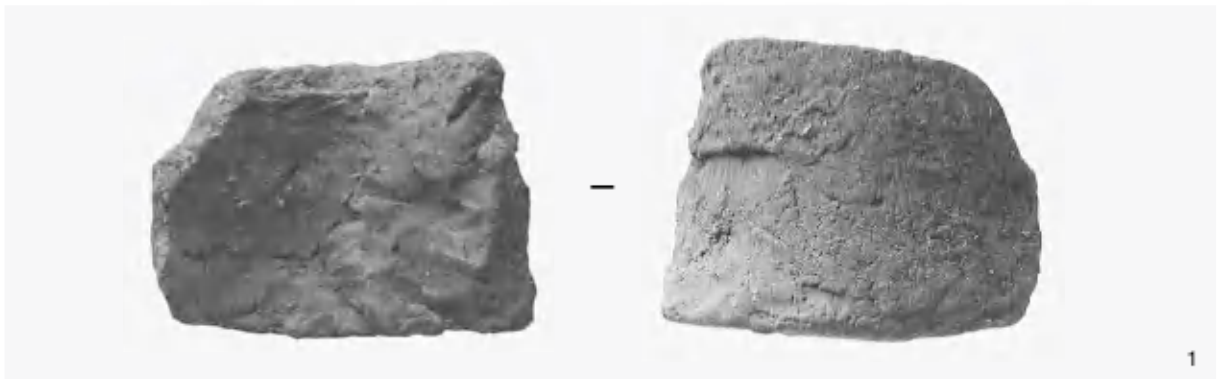
图版 18



7号填出土土器②



1 8号墳出土土器



2 二反峠 10号墳出土埴輪

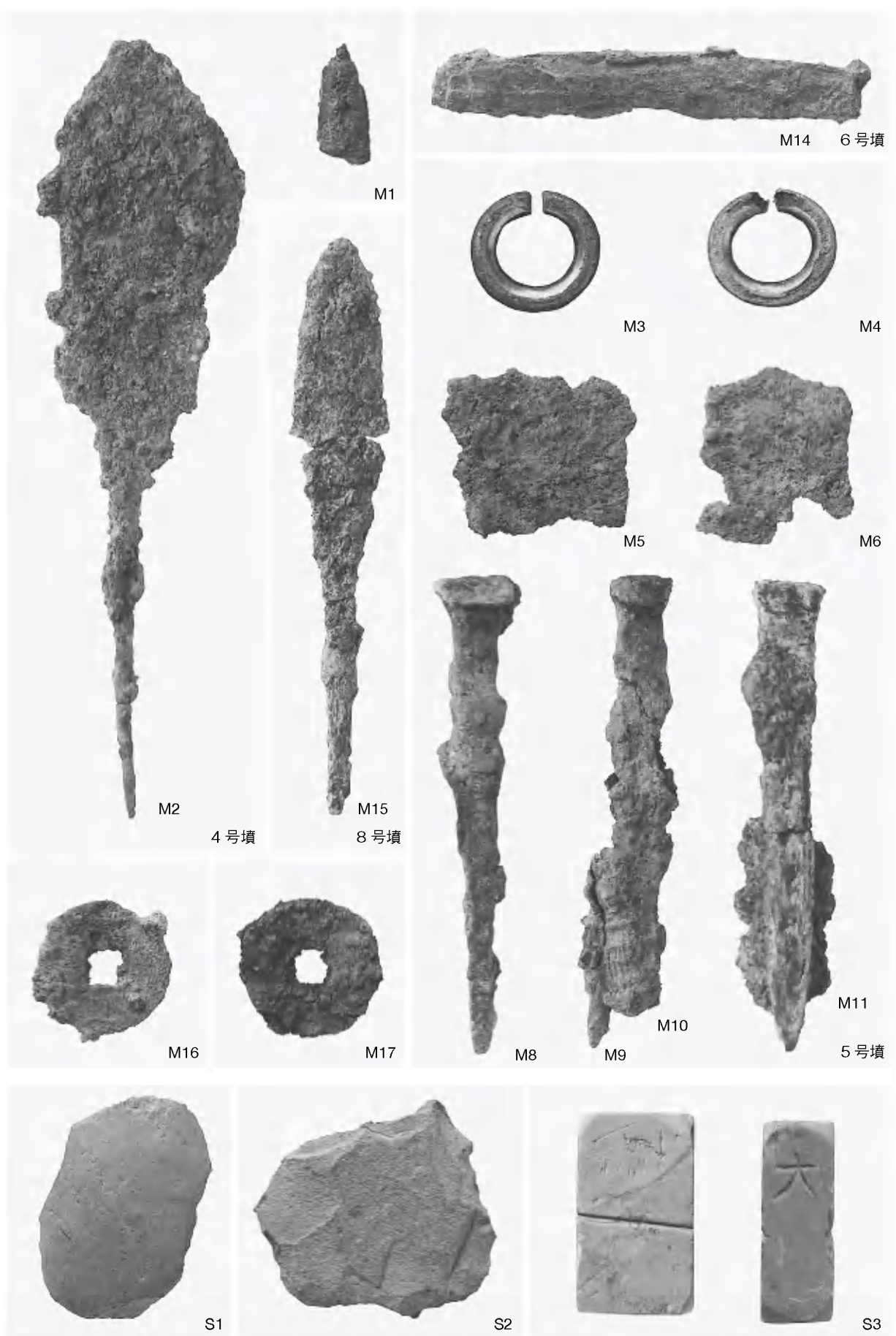


3 八紘 19号墳出土須恵器



4 古墳出土中世土師器

図版 20



金属製品・石製品

報告書抄録

ふりがな	はっこうこふんぐん							
書名	八紘古墳群							
副書名	主要地方道倉敷美袋線道路改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	233							
編著者名	物部茂樹 島崎東 小嶋善邦 白木亨 白石純							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL086-293-3211 URL http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ' , "	東経 ° , ' , "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はっこうこふんぐん 八紘古墳群	おかやまけん 岡山県 そうじやし 総社市 やまだ 山田	33208	4号墳 332080109 5号墳 332080108 6号墳 332080107 7号墳 33208**** 8号墳 33208****	34° 40' 42"	133° 39' 13"	20090401~20090930	1,200㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
八紘4号墳	古墳	古墳 後期		古墳 1基		須恵器・土師器・鉄鍬		盛土中に石積み
八紘5号墳	古墳	古墳 後期		古墳 1基		須恵器・土師器・耳環		盛土中に石積み
八紘6号墳	古墳	古墳 後期		古墳 1基		須恵器・土師器・刀子		盛土中に石積み
八紘7号墳	古墳	古墳 後期		古墳 1基		須恵器・埴輪		
八紘8号墳	古墳	古墳 後期		古墳 1基		須恵器・製塩土器・鉄鍬		小形の横穴式石室
要約	<p>八紘古墳群は、現存34基の後期群集墳である。古墳の分布には東西にまとまり（支群）が見られ、今回調査を実施した4～8号墳は西支群（現存17基）に属している。</p> <p>4号墳は、直径14mの円墳で、盛土内に石積みをもつ。石室は右片袖式で、玄室長4.7m、幅1.7～1.3mを測る。2段の敷石床を設置する。出土土師器の中に畿内系土師器椀2点が見られる。5号墳は、直径13mの円墳で、盛土内に石積みをもつ。石室は左片袖式で、玄室長5.0～5.3m、幅1.6～1.3mを測る。当初は土床で、追葬時敷石床にしている。耳環が2点出土している。6号墳は、直径10mの円墳で、盛土内に石積みをもつ。石室は無袖式で、石室現存長5.1m、幅1.2～1.0mを測る。1段の敷石床を設置している。追葬時に排水溝を掘削している。7号墳は調査区外に位置し、すでに消滅していると考えられるが、流出した円筒埴輪片を多数検出した。8号墳の墳丘は流失している。石室は残存長1.4m、奥壁部の幅45cmで非常に小さい。製塩土器が1点出土した。</p> <p>4～8号墳の時期は6世紀後半から7世紀にかけてで、7号墳→8号墳→4～6号墳の順に築造されたと考えられる。なお、1～3号墳は総社市教育委員会によって調査されている。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 233

八 絃 古 墳 群

主要地方道倉敷美袋線道路改築
に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成23年3月11日 印刷

平成23年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花房1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2